

特別テーマ展関連講座

—押出遺跡の6次調査と山形県内の縄文前期後半の世界—

講義 4

山形県内の縄文時代前期後半の土器様相

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

小林 圭一 氏

平成 30 年 7 月 15 日 (日)

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

山形県内の縄文時代前期後半の土器様相

小林圭一（山形県埋蔵文化財センター）

1. はじめに

縄文時代前期の年代は、今から 6,000 ～ 5,000 年前の約 1,000 年間に相当するとこれまで理解されてきた。しかし近年の炭素 14 年代法を用いた年代測定研究では、較正年代が 7,000 ～ 5,470 年前 (5000 — 3520calBC) と推定され、従来の年代観より約 1,000 年遡ると共に、1,500 年間の長期にわたっていた可能性が指摘されている (小林謙一 2007)。この時期は完新世で最も温暖な気候最温暖期 (ヒブシサーバル期) で、現在よりも年平均で 1 ～ 2℃程気温が高く、湿潤であったと推定されている。また海水面も現在より 2 ～ 3m 程高くなり、海水が湾内の奥深くまで浸入した「縄文海進」の時期に相当し、そのビトークは前期初頭にあつたと考えられている。

縄文前期は温暖な気候を背景に生活が安定し、これまでの遊動的な生活様式から定住的な生活へと転換した。その結果大規模な集落が成立し、フラスコ状土坑のような貯蔵施設が発達し、集団墓地も形成されるようになった。また文化的にも高揚した様相が窺われ、使用目的に応じた多様な形状の土器が製作されるようになり、彩漆土器や木製品に象徴される植物資源の高度な利用技術の確立、更には装身具類の発達など、豊かな暮らしを営んだ様相が判明している。この時期縄文文化を構成した基盤が確立したと見なすことが出来るであろう。

しかし縄文時代前期末葉十三菩提式期の関東地方は、零細な遺跡が散在した状況が見られ衰退期 (人口減少期) を迎えていた。これに対し、時間的に対応する大木 6 式期の東北地方の中・南部では、遺跡数が増加し繁栄期にあつたことが指摘されている (今村 2010: 459 — 465 頁)。それ以前の当該域の前期後葉 (大木 3 ～ 5 式) は遺跡数が少なくっており、表向きは末葉になって回復したように見受けられる。しかし大木 6 式期の遺跡が一律に安定的に継続していた訳ではなく、詳細な編年研究に照らしてみると、存続期間の長い遺跡は岩手県南部と宮城県

北部、即ち北上川中・下流域と南三陸沿岸～松島湾の沿岸域に集中しており、他の地域の遺跡では大木 6 式の時間幅の中でも激しい消長を辿った様相が観察される。

前期末葉は東日本の地域間の交流関係が劇的に変化した時期と想定されており、特に日本海沿岸部では大木 6 式 3 期以降に、石川県・富山県方面の北陸集団が海岸伝いに秋田市府近まで進出し往還していた状況が指摘されている (今村 2006a・b)。また東北の内陸部でも広汎な土器情報の伝達と人的交流が行われていたと推定されている。そして中期初頭五頭ヶ台Ⅱ式期には南西関東や中部高地で人口が増加し繁栄期を迎えていたのに対し、同時期の東北中・南部では対照的に遺跡や遺物が極端に少なく、住居跡の検出例もなくなるなど一時的な衰退期にあり、続く大木 7a 式の竹ノ下式並行期になって回復したと考えられている (今村 2010: 464 — 465 頁)。関東と東北では上記したように衰退と繁栄の経過にタイムラグが存するが、大木 7b 式・阿玉台Ⅰa 式期には共に安定と繁栄を背景とした中期社会に移行しており、それぞれに有力な地域圏が形成されるに至ったと考えられる。

筆者はこれまで、山形県の庄内・村山・置賜地方と宮城県南部、福島県会津地方について、今村啓爾氏の大木 6 式土器の 5 細分編年に準拠して、土器型式の変遷過程と地域社会の在り方を考察した (小林圭一 2014・2016)。その結果大木 6 式中段階の 3 期を境に、山形県の日本海沿岸部 (庄内地方) では北陸方面の影響の増大、内陸部 (村山・置賜地方) では大規模遺跡の衰退や遺跡数の減少、福島県会津地方では沼沢火山の噴火の影響による遺跡数の減少と日本海沿岸部との交流が杜絶した可能性を指摘した。東北中部の太平洋側 (岩手県南部・宮城県北部) が縄文前期後葉～中期初頭にかけて長期的に継続した大規模な遺跡が多いのに対し、東北南部の遺跡は一般に時間幅が限定され、長期にわたって営まれた遺跡が少ない傾向が見られ、大木 6 式の 1 型式の範囲においても、安定した生活が営まれていた訳ではなかったと

考えられる。

2. 今村啓爾氏の大木6式土器の編年

大木6式土器は、東北前半の縄文時代前期の最終末に位置づけられる土器型式である。本稿では、東日本の前期末葉～中期初頭の編年研究を牽引する今村啓爾氏の大木6式5細分編年（今村2006c）に準拠して、山形県内の遺跡の大木6式土器の変遷を概観する。

大木6式土器は球胴形と長胴形の土器を主体に構成されるが、この区分は大木6式が成立する時期（大木5b～6式1期）はそれ程明瞭でなく、2期以降に分化が進行する。それぞれ北部（岩手県・宮城県北部）と南部（宮城県南部・山形県・福島県）を中心とした地域差が存するが、北部では長胴形と球胴形の文様が類似し、特に長胴形に裝飾が多く、変化を追跡しやすいことから、この系列を基本として5期に分期し、これに球胴形土器や南部の諸系統を対比させ、並行関係を示した（表1）。今村氏の編年研究を簡潔にまとめることは至難であるが、大木6式土器の分布域の南部（宮城県南部・山形県・福島県）の概要を記すと、以下の通りである。

大木5式（図4-1～3） 口縁部が外反した円筒形または植木鉢状の器形で、縄文地にジグザグの貼付文と口部の鋸歯状裝飾体に特徴付けられ、年代的に5a式と5b式に二分されている（興野1969）。先行する大木5a式は口部の鋸歯状切り込みが大型で鋸歯数は少なく、ジグザグの貼付文は体部に幅広く数段にわたって付される傾向が見られる。これに対し後続する大木5b式は鋸歯状裝飾体が口周に広がり始め、鋸歯数は多くなるが、鋸歯自体は小刻みとなる。文様は区画線の発生により、ジグザグ文が頸部に圧縮され、段数も減少し、貼付文から沈線文に漸次変化する。頸部文様帯は上限を刻みのある浮線文1本、下限を刻みのない細い浮線文1本ないし数本で画するものが普通で、下の区画線は沈線が用いられることが多いが、上限の刻み浮線文は沈線化しないことが多く、大木6式頸部の刻み隆起線につながる（今村2006c：39頁）。

大木6式1期（図4-4～14） 1期は長胴形と胴下部が縮約し球胴形に向かう形の違いがより明瞭になってくるが、まだ完全な分化とは言えない。全体的に文様が少なく、頸部で強く外折する器形や、その括れ部を水平に

回る刻みのある隆起線（結節浮線になるものもある）が特徴的である。球胴形は口縁部文様帯が未発達で、頸部の括れの下に浮線文からなる幅の狭い文様帯を有し、長胴形は頸部・胴部文様帯が振るわない傾向が指摘される（今村2006c：42～45頁）。

大木6式2期（図5-15～34） 2期は長胴形と球胴形の分化はまだ不明瞭で、長胴形でありながら胴部の膨らみが強く、判断しにくい例（25～27）も存する。球胴形は底部近くが縮約し再び開くもの（16）と、胴部から円筒状の脚台状部への移行が緩やかなもの（18・22・23）があり、括れ部直下には結節浮線文が用いられ、文様が発達する傾向が見られる（今村2006c：59頁）。長胴形は口唇部の隆帯とその下の隆帯の間を円形の貼付文や数本の隆起線で裝飾的に結ぶなど、口縁部が複雑化しており、北部における変化と軌を一にし、双頭波状口縁が発達する（31・32・33）。また隆起線による立体的な裝飾が特徴的で、隆起線の中心線に沿って擦糸を押し付けたもの（29・31・34）が、山形と会津に認められる（今村2006c：51頁）。

大木6式3期（図6-35～46） 3期は長胴形と球胴形の2種類からなる組成で、この時期に「浮線文系球胴形土器」が最も発達する（35～39）。球胴形は外反する口縁部、球状に膨らむ胴部、円筒形の台状部の3段からなる器形で、結節浮線文、ソーンズ状浮線文、結節沈線文等の文様表現で飾られたものが多い（今村1985：111頁）。口縁部の幅が広がり、その上の文様が発達し、胴部文様帯の幅も広がりが見られ、下限は胴径最大部付近に達するものが多い（今村2006c：59頁）。長胴形土器は北部と同様の口縁部文様帯（中太の沈線で複雑化した文様）を有するが、胴部文様帯を欠く土器が多い（今村2006c：54頁）。

大木6式4期（図7-47～56） 4期は球胴形と長胴形で組成されるが、球胴形は口唇が内外に突出した断面を有するものが多く、胴部文様帯は狭くなり、帯をなさない懸垂文になるもの（47・50）もある。ジグザグは短い浮線の端を重ねるようにしたもの（端重ねジグザグ）が特徴的で、胴部は羽状縄文を縦に配したものが大部分となる（今村2006c：62頁）。長胴形は北部と同様の口縁部文様帯（複雑化した文様が単純な形に整理される）を有するものの他に、口縁に浮線文系球胴形と類似の文

様を有し、胴部は縄文だけになる円筒形の土器 (54～56) が見られる (今村 2006c : 54 頁)。頸部文様帯では刻み隆起線からの変化とみられる竹管外面による押し引きが特徴的で、1 本の場合 (53) が多いが数本重ねるものもあり、他に平行沈線を重ねるもの (52) もある (今村 2006c : 50 頁)。

大木 6 式 5 期 (図 7-57～64) 5 期は長胴形と球胴形の文様上の区分がなくなり、胴部が球形に膨らむかどうかだけの区分となる。球胴形の器形は球胴部分が収縮し、台状部が太く高くなるため、球胴形というより口縁部の下が膨らむという表現が当てはまる。また 4 期と同じく口唇の断面形が内外に突出するものが多く、更に複雑になって内側では階段のように 1 段低い位置から突出するもの (57・58・60) が見られる。文様は浮線を 2 本平行に貼り付けて文様を描き、その 2 本を短い浮線で梯子形にならざる梯子形文様 (58・60・61) やドーナツ形貼付文に刻みを入れた文様が認められ、口縁部文様帯の下限をわずかな隆起線で画するものが多く、大きな橋状把手も用いられる (今村 2006c : 58・62 頁)。

中期初頭 (図 8 下段) 五領ケ台 I a 式と同 I b 式並行期の土器が相当する。前者は大木 6 式 5 期との近似性が強く、器形的には胴部下半の円筒部分が大きさを増し、文様では浮線文による表現を沈線文に置き換えたのが五領ケ台 I a 式並行期で、短沈線を並べた梯子形の文様図形を特徴とする。大木 6 式 5 期ではドーナツ形文様部分が独立的であることが多いのに対し、五領ケ台 I a 式並行期では周囲の文様の中に埋め込まれ、渦巻きの端が斜めタスキに流れ込む傾向が見られ、文様の空白部の削り取りであった三角形が、沈線に沿って機械的に並べたものが現れ、口唇外側を厚くし、縦線を刻むものが増える (今村 2010 : 361 頁)。胴部には縦方向の縄文が加えられるのが普通で、羽状に組まれたり、両端に結節回転文が加えられる (今村 1985 : 97 頁)。

五領ケ台 I b 式は細線文を地文として用いるようになり、その上に I a 式からのドーナツ形や斜めタスキなどの文様図形を沈線で描き、三角形の刻文を加える。しかし細線文が卓越するのは南西関東で、東北ではあまり普及しておらず、I a 式並行期と I b 式並行期の区分は必ずしも明確とは言えない (今村 2010 : 363 頁)。

中期初頭の東北中・南部に特徴的に見られるのが、「糠

塚系統」と称される土器である。口縁部を水平線で数段に区分し、その各段に縦の沈線を並べ挿入し、胴部を削り取ったような無文または縦方向の羽状縄文になるもので、縦沈線の代わりにジグザグを入れたものもあり、胴部はまっすぐなもの膨らみを持つものがある。大木 6 式 5 期には出現しており、五領ケ台 I 式並行期に続き、同 II a 式並行期頃には文様が単純化し、口縁部や口縁の折り返し部に縄文を加えたものが多くなる (今村 2010 : 362-363 頁)。

3. 庄内平野吹浦遺跡出土の前期末葉の土器

吹浦遺跡 (遊佐町) は、庄内平野の北縁、島海山麓の泥流台地に立地する、大木 5～7a 式にかけて形成された集落跡で、主体は大木 6 式期にある。住居が 48 棟、土坑が 334 基検出され、台地の縁辺に沿った馬蹄形の配列が認められる (図 9)。竪穴住居は不整形方を基調とし、地床炉を有し、不規則な柱穴で構成される。建て替え・重複が顕著で、13ヶ所の住居群に纏められ、同一箇所に 10 回程度の建て替えを示す例 (ST1150・1151) も見られ、主軸を集落の中心に向けて構築されている。土坑群はフラスコ状・袋状土坑が 173 基検出されており、深さ・底径 2 m 超の大型の例も多く認められる。台地は緩斜面をなし、中央部は遺構が希薄で、それを取り巻くように住居が配置される。住居と土坑の重複が著しく、遺構群の「重帯構造」(谷口 2005 : 4-6 頁) は明確でないが、中央部の浅い楕円形の土坑のまどまりを墓塚群と見なす指摘もあり、玉斧が出土した土坑 4 基は、墓塚の可能性が高い (相原 2010 : 129-131 頁)。住居と重複したフラスコ状土坑の多くは、住居が廃絶された後に構築されており、住居 1 棟当たり 3～4 基の土坑が使用されたと想定されている (渋谷・黒坂 1988 : 238 頁)。なお大型のフラスコ状土坑 (直径・深さとも 2 m 超) については、大木 4 式期前後に北海道・東北北半部ではじめに成立し、東北南半以南に波及したことが指摘されている (林 2004 : 262 頁)。

不整形の竪穴住居は、主軸を集落の中心に向け同一地点で頻繁に建て替えられている。重複のため長軸方向に伸張した例も見られ、結果的に長大な大型住居の放射状配列に類似した構成となるが、同じ出自の集団により居住区画が踏襲された結果を示しているのであろう。ま

た調査区北側に長方形の柱穴列が認められており、大型の掘立柱建物が存した可能性が考えられる。

前期末葉の日本海沿岸については、今村啓爾氏が北陸集団の北上を予察している(今村 2010:303—355頁)。同氏は前期末の真脇式の末期(関東の十三普提式の中段階末に並行)に、北陸から現在の秋田市周辺への集団移住という出来事があったと主張している。その集団はもう少し北で円筒下層d式集団と接触した後、その土器の影響を北陸にもたらすことになった。吹浦遺跡はそのルートの上上に位置し、北陸集団の進出以前から以降にまたがって継続した遺跡で、古段階(大木6式1・2期)→中段階(同式3期)→新段階(同式4・5期)の変遷が組み立てられている。しかし大木6式の代表的遺跡とみなされている吹浦遺跡で主体を占めるのが、各時期とも大木6式とは言いにくい土器である。

吹浦遺跡の古段階 古段階(図 11、図 15—1—18)は粗製土器を主とし、大木式といえるものは少ないが、大木5b式末～大木6式2期の土器を少し含む。土器はほとんどが円筒形で、単純な円筒形または口縁下が少しくびれるものが普通であるが、くびれ部に隆帯を廻しその上を連続的に押し窪めたものが特徴的で、その上側を文様帯としたものや波状口縁もあり、胎土には繊維が含まれる。1950年代に調査されたB地区出土土器(図 10 上段)が該当し、1980年代の調査では、貯蔵穴の SK1011、SK1073、SK1075、SK1086、SK1108 の一括資料が代表的である。この古段階には、北陸の土器の伴出は見られない。

吹浦遺跡の中段階 中段階(図 12、図 15—19—25)は古段階の粗製土器と同じような円筒形土器に加えて、典型的な大木6式3期の球胴形の土器(浮線文より沈線文が多い)が数多く見られる。しかし大木6式といえる長胴形の土器(図 12—1)はあまり見られず、円筒形粗製土器がその位置を占めている。胎土は円筒形のものか繊維を含むのに対し、球胴形のものには繊維を含まない良好な焼成と報告されている。また量は多くないが真脇式そのものが少し伴う(図 12—10・19)。1950年代に調査されたA地区出土土器(図 10 下段)が該当し、1980年代の調査では SK1098、SK1104、SK1164、SK1245 が代表的な資料である。

吹浦遺跡の新段階 新段階(図 13・14)はこれまでの

状況が一変し、主体は圧倒的に北陸系(朝日下層式、新保式上安原段階)となり、中段階に進出が著しかった普通の大木6式がほとんど見られなくなるのに替わり、それまで見られなかった円筒下層d系(そのものとは言いえない)少し変化した土器)が相当地に伴うようになる。秋田市周辺遺跡で朝日下層式並行期に見られたのと同じ急激な変化が、同時期の山形県海岸部にも指摘される。この時期の遺構別のまとまりとしては、貯蔵穴の SK1078 と SK1079 の大資料が典型的である。なお両土坑は隣接し、土製球状耳飾りが出土している(図 9)。

上記したように、吹浦遺跡では古・中・新段階ごとに系統的な組み合わせが大きく変化する。古段階から中段階への変化は、大木6式(球胴形を主体)の進出である。中段階から新段階へは更に激しい変化で、土着の粗製土器を含む大木6式系が影を潜め、圧倒的な北陸系の進出とこれに次ぐ円筒下層系によって占められてしまう。土器で見ると中段階に北陸集団の影響が見え始め、新段階に大きな転換期が想定されるが、上記した吹浦遺跡の集落構成の中に北陸の影響が見出せるのかどうかは、なお検討を要するであろう。

4. 船見沢遺跡(酒田市飛島)の様相

日本海沿岸部の庄内地方では、これまで吹浦遺跡が大木6式の内容が捉えられた唯一の遺跡であったが、近年 50 km離れた鶴岡市川内袋遺跡で大木6式1～3期の資料と共に、多量の円筒形の粗製土器が報告されている(齊藤主税 2012)。また飛島の船見沢遺跡でも、前期末葉の集落跡が調査されている。

遊佐町吹浦港から 30 km の距離にある飛島では、1991年に船見沢遺跡が発掘調査され、前期末葉の竪穴住居跡跡が2棟検出された(齊藤主税 1992)。飛島はその南西部の島海山を眺望する東斜面に位置している。2棟の住居跡は深さ 2～2.5 m、幅 30 m 程の小規模の沢を挟んで 90 m 離れているが、第1号竪穴住居跡(ST 1)が大木6式2・3期を主体としたのに対し、第2号竪穴住居跡(ST 2)は新保式上安原段階と円筒下層d式系の土器で占めており、全く異なった様相が看取される(図 16)。

第1号竪穴住居跡(ST 1)は南北 3.5 m、東西 2.8 m

の方形の竪穴住居跡で、壁高は25～35 cmを測る。西壁は調査区外で、東壁～南壁にかけて風倒木SX19による攪乱を受けており、SX19出土資料の多くは本来ST 1に帰属していたと推定される。床面は多少凹凸を有するが、地床炉2基が検出され、柱穴は1基確認されている。

図16-1～19がST 1から出土した土器、20～33がSX19から出土した土器である。1・2・10は同一個体で、結節浮線文が施された球胴形土器で、胴部が球状に膨らんだ器形で、大木6式3期に相当する。4・20は同一個体で球胴形土器と推測されるが、幅狭の口縁部に凹線による曲線的な文様、括れ部に結節浮線を巡らし、頸部は上位から半截竹管によるジグザグ文、結節浮線、ジグザグ文が重ねられており、口縁部や頸部の文様から大木6式2期に相当すると考えられる。それ以外の大半は土着化した粗製土器に相当し、23は括れ部に刻み隆起線を巡らし、口縁部文様帯に繩の側面圧痕、24は絡条体圧痕が加えられる。5は推定4単位の大波状縁で、波頂部直下に凹円とボタソツ状貼付文が施され、器面には燃糸の側面圧痕が加えられており、吹浦遺跡の古段階(図15-18)に類した土器であろう。なお報告書に拠ると、1・2・10・28以外の胎土には繊維が混入されている。

第2号竪穴住居跡(ST 2)は沢の南側に位置し、南北4 m、東西3.5 mの不整方形の竪穴住居跡で、検出面からの壁高は10 cm程度と浅い。床面は凹凸を有し、柱穴1基と土坑2基が検出されたが、好跡は確認されていない。

34～43・46が北陸系土器、48～50・53～62が円筒下層系土器に相当する。前者は胴部上半から強く張り出して立ち上がり、上端で鋭く内折した器形で、主に集合沈線文で構成される。後者は木目状燃糸文を特徴とするが、48・55・56・58・62の胎土には繊維が含まれる。

北陸系土器は前期最終末の新保式上安原段階で、ほぼ占められている。34・46は同一個体で、口縁端部は内外面とも貼り付けた粘土帯で肥厚し、くの字形に内折しない。37・39～41・43は同一個体で、口縁部の屈折がやや緩くキヤリバー形の深鉢となる。口縁部文様帯は縦位の集合沈線文と瘤状裝飾、頸部文様帯はV字形区画内に横位の集合沈線が充填され、胴部は木目状燃糸文が施される。35は胴部文様に横位の結節繩文、36は縦位

の結節繩文、34は木目状燃糸文が施される。38は口縁部がくの字形に屈折し結節浮線の文様を有しており、朝日下層式に相当しよう。

円筒下層d式系土器は円筒形を呈し、緩やかな波状縁(49)で、口縁部文様は燃糸の側面圧痕(48～50)や絡条体圧痕(54・59)で構成され、胴部文様は木目状燃糸文が卓越する。54・59は同一個体で、頸部に刻み隆起線を巡らしており、その他に胴部に羽状繩文(48)、縦位の結節繩文(60)が施される。なお円筒下層d式系とした土器の内繊維を含まない53・57・60・61は、一部北陸系土器となる可能性も否めない。

吹浦遺跡の円筒下層系土器は胎土に繊維をほとんど含まず、木目状燃糸文も顕著でなかった点で、本遺跡とは差異が存している。しかし北陸系土器と円筒下層系土器で構成され、大木6式系土器を含まない点で、両遺跡は共通している。

5. 最上川中流域(山形盆地)の様相

最上川中流域に当たる山形盆地の中で、発掘調査された前期末葉の集落は寒河江市高瀬山遺跡に限られる(齊藤・須賀井2005)。同遺跡は山形盆地西端の最上川左岸の河成段丘に立地する、大木6式期を主体とした環状集落である(図18)。

遺構は直径120 mの範囲内に住居群が配置され、その内側に土坑群が形成され、更に中央の直径30 mの範囲は遺構密度が希薄となっており、円環状の「重帯構造」(谷口2005: 4-6頁)が看取される。集落は大木5b～6式期に形成されており、竪穴住居は3～5 mの標準的な住居(円形・楕円形・隅丸方形)37棟と、長軸15～20 m超の大型住居12棟が検出されている。大型住居の多くは主軸を放射状にして配列されるが、主軸が円周方向を向く例もあり、大型住居同士の重複も認められる。小型住居には壁柱穴を巡らすものや不規則な柱穴のものがあり、地床炉を持つ例は少なく、床面中央の溝状の掘り込みを特徴とする。また斜面部の住居を除くと小型住居同士の切り合いは少なく、大型住居に切られる例が見受けられる。高瀬山遺跡は山形県内における大型住居を主体とした集落の初現となるもので、中期に連なる構成であると考えられている。

高瀬山遺跡では大木5b式～6式3期にかけて、遺構

単位で多くの土器が出土している。特に大型住居跡である ST1341 は他の時期の混在もあるが、大木 6 式 2 期を主体とした良好なまとまりであることを今村氏が指摘している (今村 2006c : 65 頁)。

大木 5b 式 高瀬山遺跡では大木 5b 式に相当する土器が多数認められる。口縁部が緩やかに外傾した朝顔形(図 19-1・4・7) や、頸部が弱く括れ口縁部が外反した器形(2・3・6・8・9) が多く、後者には波状線(2・3) も存し、平縁では幅広の低い突起を配した例(6・8) が見受けられる。文様は頸部や胴上部の細かなジグザグ貼付文が特徴となるが、沈線の例(3・7・8) もあり、ジグザグが全周せずアケセントとして弧線が挿入されたり(8・9)、文様が途絶した例(3) も存しており、その他に上下に対向した弧線(5) も見られる。今村氏は本型式の特徴として、頸部の文様は上限を刻みのある浮線文 1 本、下限を刻みのない細い浮線文 1 ないし数本で画した例が多いことを上げている(今村 2006c : 39 頁) が、2・4~6 がこれに該当する。大木 6 式 1 期 大木 6 式 1 期として図 19-10~20 を図示したが、15 は大木 5b 式、16 は大木 6 式 2 期に比定され、不適切な提示となっている。

1 期の一括性の高いまとまりとして、ST822 が上げられる。調査区南東の小型の隅丸方形の住居跡(3.88 × 3 m) で、10~12 は球胴形、13・14 は長胴形で、12 は床面近くで、その他は床面より 10~40 cm 程浮いた状態で出土した。球胴形の口縁部は幅が狭く厚く作出され、10 は短沈線列と縦位の貼付文、11 は 8 単位の波状線で双頭の波頂部直下に凹円を配し、その間が短沈線で刻まれており、双頭波状の初現的様相を呈する。13 は 4 単位の波状線で、幅狭の口縁部は弧状の隆帯文様で構成され、胴部は半截竹管による乱雑なジグザグ文が横位に施される。14 は 8 単位の波状線で、口縁部は半截竹管による 3 本の結節沈線文と頸部は 2 本のジグザグ文が巡らされ、胴部には LR を地文に格子目の沈線文が認められる。「胴部における沈線の交叉は大木 6 式のものとも初期に多く見られる文様」(今村 2006c : 40 頁) と指摘されており、1 期に位置づけられる。

15 は円形住居跡である ST3202 から出土したが、胴部から底部への移行が緩やかな器形で、2 の系統にある球胴形として本型式で図示した。しかし大木 5b 式の公

算が強い。口縁部が波状線に沿った無文の肥厚帯で、頂部直下に円孔が穿たれ、更にその直下にボタン状貼付文が付される。頸部の文様は上限を刻みのある 1 本の浮線文、下限を刻みのない細い 2 本の浮線文で画し、その間に 2 本単位の縦位と上下に対向した弧状の貼付文が展開しており、大木 5b 式の特徴を具備している。16 は大木 6 式 2 期の結節浮線文の球胴形土器であるが、15 と同じ ST3202 から出土したことから併せて提示した。しかし同遺構(住内土坑 SK3767) からは大木 5b 式(9) も出土しており、一括性には問題があらう。

17・18 は調査区東側のフランスコ状土坑 SK1281 から出土した。17 は無文の幅広の肥厚帯を持った球胴形で、胴部から底部への移行が緩やかな器形である。肥厚帯の上下両端が刻まれ、波頂部直下に円孔が穿たれ、括れ部直下の幅の狭い文様帯は結節沈線による弧状の文様で構成されるが、渦巻文様の原形となるものである。18 は胴上部が僅かに張り出し頸部で括れ、口縁部が外傾した深鉢で、複合口縁の上端が刻まれ、頸部に棒状工具によるジグザグや弧線の文様が施される。

19・20 は調査区中央南側の土坑 SK3648 から出土した。共に口縁部は緩い波状線で幅狭の肥厚帯となり、頸部で強く外折し、胴部は球状に膨らみ、緩やかに底部へ移行する。19 は口縁部に凹円を配し、括れ部直下に結節沈線で区画線と弧状の文様が配される。20 は括れ部に刻み隆起線、その直下に平行沈線を巡らせる。

大木 6 式 2 期 大木 6 式 2 期は ST1341 が基準資料となる。球胴形と長胴形の分化がより明瞭となり、後者の口縁には双頭波状が発達する。今村氏は 2 期として本遺跡の球胴形 4 点(図 20-21~24) と長胴形 5 点(26・28~31) を図示している(今村 2006c : 10・14 図)。

21~25 は 2 期の球胴形土器である。口縁に肥厚帯を有し、頸部が強く外折し、胴部が張り出し脚台状部へ移行する器形が多く、底部近くが縮約して再び開く例(24) も見られる。胴部文様帯は胴上部の幅狭の区画帯内に、結節沈線(21~23) や結節浮線(24・25) による文様で構成されるが、上端の区画線は浮線(または隆起線) となる例が多い(21・22・24・25)。口縁部は幅狭で文様はあまり発達せず、凹線や隆起線で構成され、緩い波状線(23・24) も見られる。21・23 には口縁に沿って隆起線と凹線が巡らされ、途中つまみ状の

縦長突起が配される。25は胴部が球状に張り出し、胴部文様帯に結節浮線による渦巻とジグザグの文様が展開しており、3期に比定される可能性も否定できない。しかし31と同じ住居跡から出土し、また立体的な双頭波状口縁で構成されることから同期に位置づけた。双頭波状の隆起線を縁取るように結節浮線文が施され、その間にも2列の結節沈線が充填され繁縷となる。双頭波状間には棒状工具で縦に刻まれ、口唇部には縦の貼付文が付される。

26～31は2期の長胴形土器である。双頭波状は2期に発達するが、29・31はその典型となり、隆起線と凹線で構成された26・27の口縁部は、球胴形(21)と共通する。また口縁部文様の隆起線の中心線に沿って燃糸を押しつけたもの(28・29)が、山形と会津方面に特徴的に見られる(今村2006c:51頁)。長胴形の頸部文様帯には刻み隆起線が見られるが、その直下に水平の平行線やジグザグ文を巡らす例(27・30・31)も存する。胴部文様を欠いた土器がほとんどで、文様を有する27・30・31は例外的である。

高瀬山遺跡では2期の球胴形土器が思いの外多く認められる。上記したように口縁部が厚手で文様帯幅が狭く、胴上部の狭い区画内には結節浮線や結節沈線による文様が展開するが、その数量は3期を凌駕するようにも窺われる。本来浮線系球胴形土器は3期を象徴する器種類型であるが、同遺跡には前駆的資料が集中していることになる。筆者の型式同定に問題があることも否めないが、多数存するのは日本海側内陸部における球胴形の主導権を握っていた可能性が考えられる。また長胴形土器についても同様で、2期の方が多くに見受けられる。なお28が出土したST4063は、ST1341と共に大木6式2期の良好なまとまりとなる。

大木6式3期 今村氏は大木6式3期として、本遺跡の球胴形2点(32・33)と長胴形2点(35・36)を图示している(今村2006c:11・14図)。

32～34は3期の球胴形土器である。口縁部は上下幅が広がり、胴部は大きく球状に膨らみ、球胴部から台状部へ直角に近く折れ曲がり、下を小さな脚台状の部分を支える器形が多い。口縁部には三角形刻文(32)や結節浮線によるジグザグ文(33・34)、胴上部も結節沈線(32)や結節浮線による文様(33・34)が展開し、

文様帯の幅が広がるため、線の間に余裕のある空間が配置される(32・33)。

35～37は3期の長胴形土器である。口縁部文様の上下幅が広がり、双頭波状の中間に凹円を配し、それを囲うように中太の沈線でくの字形や三角形の文様が施される(35・36)。頸部には沈線群が巡らされた例(36)があるが、胴部には文様が見られない。

39は今村氏が「十三善提式銅屋町系土器」として紹介した土器である。文様は関東の原形に近いが、器形が円筒形で、文様帯をこのように何段も重ねるのは北陸にはあまり見ないが、中部高地や関東では少なくないと解説された(今村2006d:129頁)。

日本海沿岸部では真脇式の末期(十三善提式の中段階末に並行)に、北陸からの集団的移住が起こるが、それに先行して、北陸の銅屋町系土器が中部高地を通って関東地方に入り、それらの地域で変形した後、東北地方を北上した現象があったことが指摘されている。関東地方の十三善提式中段階、東北の大木6式3期に相当し、その場合には日本海沿岸部とは異なり、圧倒的な量の東北地方の土着の土器の中に、わずかな量の銅屋町系土器が混じるだけとなる。39はその異系統土器に該当するが、文様の崩れ等から搬入された土器ではなく、東北で作られたと理解されている。「関東からの移住者が遠方で関東本来の土器作りや約束ごとを忘れかけながら作つたと判断するのが妥当」(今村2006d:130頁)であり、「本場から遠く離れた東北地方に移住した孤独な土器の作り手は、作り分けの約束を忘れ、自分が保持する2つの系統を完全に折衷した土器を作ってしまったのである。」(今村2006d:130～131頁)と解説した。関東の土器作りの系統を担った作り手が、大木6式土器の高瀬山遺跡の集落の片隅で暮らしていた様相が想定されている。

高瀬山遺跡では大木6式3期までの資料が多数認められる。しかし4・5期に相当する資料はほとんど見当たらない。38は円筒形を呈し、口縁部文様が横線と縦の貼付文の単純な形に整理されており、新しいような資料として图示したが、複合口縁でやや厚みを有しており、3期の位置づけが妥当であろう。上記から大木6式3期の段階で、この大規模な集落が終焉を迎えたことが指摘される。調査区域外の地点に集落を移した可能性も否めな

いが、集落を再編成しなければならぬ事態が生じた可能性が考えられる。

中期初頭 中期初頭は天童市板橋1遺跡で、糠塚式が出土している。同遺跡は高瀬山遺跡の東方7kmの乱川扇状地の扇端部の微高地に立地している(図17)。図20—40～43は、E区のグライネ化した砂層からまよって出土したが、遺構は検出されていない(齋藤健2004: 14頁)。

40は頸部が括れ、口縁部が外傾して立ち上がる長胴形の深鉢である。口唇部と括れ部に横位、口縁部文様帯に4単位の縦位の隆起線が貼付され、その区画内は篋状と棒状工具で刻まれた3段(一部4段)の刻目帯で構成され、括れ部と縦位の隆起線は縄(LR)の側面圧痕が加えられる。胴部は無文に表現されているが、写真図版(齋藤健2004: 写真図版13)では縦位の結節縄文が確認できる。41・43は同一個体ではないが、胎土・文様が類似しており、隆起線で画された口縁部文様帯には、斜位の浮線と刻目が多用され、胴部は縦位の結節縄文となる。42はキャリパー形の器形で、口唇部と括れ部に横位の隆起線が巡らされ、口端からS字形に隆起線が垂下し、区画内は篋状工具による短沈線が充填される。胴部の裝飾は磨耗のため確認できない。また隣接する板橋2遺跡でも、糠塚式相当の橋状把手を持った口縁資料(44)が出土している。

6. 最上川上流域(米沢盆地)の様相

最上川上流域に当たる米沢盆地には大木6式の遺跡が多く分布するが、型式内容が窺える遺跡は米沢市の大壇おおだんB遺跡(山形県教委 1986)、八幡原A遺跡はちまんぼら(加藤編1975、手塚ほか1977)、台ノ上遺跡(菊地2006)に限られる。いずれも5km圏内の至近に位置しており、大壇B遺跡と台ノ上遺跡は松川の扇状地、八幡原A遺跡は梓川(天王川)の扇状地を生活領域としていたと推測される(図21)。时期的には大壇B遺跡が大木6式1期、八幡原A遺跡が同6式2・3期にほぼ限定され、遺跡単位での変遷が跡付けられる。台ノ上遺跡は大木6式2期から集落の形成が始まり、集落のピークを迎える大木7b～8b式まで連続と続いているが、大木6～7a式は零細な資料となる。中期初頭では糠塚式や五領ヶ台1式、新保式第Ⅲ段階も出土しており、該域の中心的遺跡であっ

たことは確実であるが、筆者の理解が及ばず大木6式4・5期と中期初頭の資料を抽出することが叶わなかった。大木6式1期 大壇B遺跡は大木6式1期の遺跡で、前後する土器をほとんど含まない一括性の高い資料となっている(図22—1～6)。

1～3が球胴形に相当し、口縁部が幅狭で厚く作出され、頸部で強く外折し、胴下部が縮約したのち底部に向かって再び開く器形となる。1は頸部に上下を結節浮線文で区画した幅狭の文様帯が配置され、区画内は結節浮線の菱形とジグザグの貼付文が施される。2は緩い波状縁で、波頂部直下に凹円を持ち、口縁下端に沿って結節沈線が加えられる。頸部には結節沈線が2条巡らされ、波底部直下で背向して突出し、作出された菱形区画内にボタツ状貼付文が付される。3は折り返し部の中央に沿って水平に凹ませ、つまみ状の縦長突起が区切る構成となり、1の口縁部に類似する。

長胴形はまだ明確化していないが、4～6が相当する。4は頸部が緩く括れ口縁部が外傾しており、長胴形の初現的な器形となる。折り返し部の上下両端に刻みが加えられるが、大木5b式のジグザグの名残であるう(今村2006c: 49頁)。5は口縁部が外折した長胴の深鉢で、口唇部が刻まれ、口縁部は無文で、頸部に刻み隆起線が巡らされる。6は一見大木5b式そのものであるが、頸部文様帯上下の区画の刻み浮線が沈線と化し、胴部縄文の上に重ねて浅い沈線による交叉文が見られることから、今村氏が「まさに5b式と6式の境目の土器」(今村2006c: 40頁)と評価している。

大木6式2・3期 八幡原A遺跡に代表されるが、文様があまり返達せず、2期と3期の区分は明確でない。しかし球胴形と長胴形の分化は明瞭になる(図22—7～21)。

7～10は3期と思われる球胴形土器であるが、器形・法量・文様に一定の規格性が認められる。器高は22～26cm、胴径は25～28cmの範囲にあり、最大径は口径と胴径が同等か或いは胴部の方にある。口縁部文様帯の幅が比較的狭く、胴部は球状に膨らみ強く折れ曲がって脚台部に移行するが、底部近くが再び開いており、古の様相が看取される。口縁部文様帯は無文(7)や、結節沈線(8)、平行沈線(9)、貼付文(10)によるジグザグ文が展開しており、8は下縁を縁取った半円の突起

とその直下に凹線で縁取った円文が配され、口唇部には縦の貼付文が付される。胴部文様帯は7が波状の結節沈線文に縦横のジグザグ文を組み合わせた構成、8がH字形の垂線を基点に結節沈線によるX字形とジグザグの文様を組み合わせた構成、9が楕円形をくの字形の平行沈線で囲った構成(9)、10が円文間をジグザグの結節浮線文で連絡した構成となる。

13・16・17が口縁部文様帯を有した長胴形土器で、胴部が弱く膨らみ頸部で括れ、口縁部が外傾した器形となる。13・17の口縁部は肥厚しており、13は双頭波状、16・17は平縁となる。13は双頭波状間の直下に渦巻文様を配し、突起間を反転した2段の平行沈線が連絡し、波底部で5本の短沈線で区切られる。頸部は平行沈線が巡らされ、渦巻文直下にボタソ状貼付文が付される。16は幅広気味の扁平口縁に、単沈線による4条の多重沈線が描かれるが、松田光太郎氏は大木6式新段階(今村氏の4期相当)に位置づけている(松田2003:18頁)。17は口縁部に格子目沈線が施され、三角形や菱形の区画内に円形刺突が加えられる。

18～21は器高40cm超の長胴の大型深鉢である。口縁部に刻み隆起線を巡らした18・21は、5からの発展が想定される。複合口縁でその下端に三角形刻文を加えた19は、4からの発展が窺える。20は隆起線と凹線で構成された口縁部は、1・2の口縁部の系譜を引くと思われ、隆起線上には半截竹管による結節が加えられる。

12のように口縁部に太い粘土紐を付した文様は、会津方面に集中すると指摘されている(今村2006b:47頁)。会津に近接する米沢盆地にも見られ、前出の高瀬山遺跡にも確認できる。東北地方西部の大木6式2・3期に特徴的な文様と言えるであろう。

上記したように、1期の大壇B遺跡と2～3期の八幡原A遺跡出土の長胴の深鉢を見た場合、系統的な発展が認められる。但し胴部の文様は発達せず、頸部文様帯も刻み隆起線のみで、裝飾性に乏しい。また口縁部文様帯に円形刺突が加えられた例(15・17・18)が見られるが、本遺跡の特徴として指摘できるであろう。

7. 山形県内の縄文前期末葉の総括

山形県内の前期末葉における日本海沿岸部並びに内陸部の山形盆地(最上川中流域)、米沢盆地(同上流域)

の様相を概観してきた。

吹浦遺跡では大木6式1・2期に円筒下層系が土着化した粗製土器が主体を占めており、大木6式3期に球胴形土器が進出する。しかし同4・5期では大木6式系が影を潜め、圧倒的な北陸系土器の進出とこれに次ぐ円筒下層系によって占められる。庄内地方ではこうした状況が後続する大木7a・7b式まで継続した。

日本海沿岸部では大木6式4・5期に大木6式が撤退するような形で、北陸と円筒下層式の交流が展開する。同6式3期末に北陸集団の移動が始まるが、この時期は沿岸部で知られる唯一の大規模集落が吹浦遺跡であり、同遺跡とは深く関わらずに更に北の地域を自して北上したとされている。しかし同遺跡はその後、北陸系と円筒下層系の土器で占められる。北陸集団の北上に際して先住者が存した吹浦遺跡では、中段階から新段階にかけて大木6式集団が立ち退いて入れ替わるような劇的な変化が惹起したのであるうか。

また北陸集団が北上を開始した直後、日本海沿岸部には円筒下層d系統の土器が現れる。北陸集団が秋田県の八郎潟北方で円筒下層d式集団と接触した直後、北陸西部(富山・石川県)に円筒下層d式の強い影響が出現し、朝日下層式の成立を見る。そして同式内部に取り込まれた円筒下層d式の要素が沿岸部の北陸系土器の分布の中を東進した。一方円筒下層d系も変形しつつ直接的に南下し新潟まで到達したが、同集団のまとまった自主的な南下は認めにくいと指摘された(今村2006b:47頁)。吹浦遺跡はそのルートの途上にあり、円筒下層d式土器の変形した在り方をどのように解釈すればいいのか、具体的な情景を描き出すことは困難である。「出来事のコアは北陸系土器を担った人たちの移住」(今村2006b:45頁)であったが、集落構成に大きな変化は認められない。吹浦遺跡が新段階になって北陸集団によって占地されたのか、南北双方方向の集団の交流の場と化したのか、または大木6式系集団と共存融和の関係にあったのか、中期初頭の状況も踏まえて更に検討することが求められよう。

山形県内の内陸部では、大木5b式から大木6式3期にかけて、土器の系統的な発展が認められたが、同4・5期や中期初頭糠塚式の資料を見出すことができなかった。この点については既に今村氏が、「北陸系が北上す

る4期、5期については今のところ山形県内陸部でも遺跡が知られていないようである。」(今村 2006a: 39 頁)と指摘しており、筆者の分析からも同様の結論に至った。日本海沿岸部に北陸集団の影響が現出する時期に、内陸部でも人口が希薄となる状況が生じたことを想起させる。但し米沢盆地の台ノ上遺跡では、大木6式4期以降も遺跡の継続が確認できる。しかし該期の土器は後統型式(大木7b式以降)に比べ非常に少なく、筆者の理解では資料の抽出が叶わなかった。

山形盆地に位置する高瀬山遺跡は大型住居を基調とした環状の集落構成から、東北中部の中でも有数の集落で、求心性を有していたと考えられる。特に大木6式2・3期が最も繁栄した時期で、この時期(3期)に異系統の十三菩提式鍋屋町系の土器(図20—39)が出土している。関東の土器の作り手が単身あるいは少数でこの拠点集落に移り住んで、集落の片隅で暮らして土器を作ったと想定されている。しかし同遺跡ではその後の土器(大木6式4・5期)が認められず、集落は忽然として姿を消したようにも窺われる。

前期末葉において内陸部の山形盆地と米沢盆地では、北陸系や円筒下層系の土器が全く見られない点や、口縁部に太い粘土紐を付した文様が盛行し、長胴形の胴部文様が振るわない等の共通した様相が指摘される。しかし米沢盆地の大木6式1期では福島県の会津地方との関係が強く、同2・3期では胴部文様を欠いた長大な深鉢が特徴となる。また中期初頭には台ノ上遺跡を見る限り、北陸の影響もある程度顕在化する。一方山形盆地では2期の段階に球胴形土器が定着しており、両地域間でも差異が認められる。更なる資料の蓄積と検討が求められよう。

8. 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡の様相

宮城県七ヶ宿町に位置する小梁川^{こやながわ}遺跡は、縄文時代前期末葉～中期中葉の長期間にわたった集落跡で、膨大な土器資料が得られたことから、東北中・南部(大木式土器分布圏)の中期前半を代表する遺跡として周知されてきた。取り分け東側遺物包含層では、大木6～7b式土器の5階層にわたる変遷が層的に分離され、相原淳一氏による所謂「小梁川編年」(相原ほか1986)が提示されたことで、中期前半期の編年研究の指標に位置づけられてきた(小林圭—2017a)。

(1) 小梁川遺跡の前期末葉の集落構成(図23)

集落形成の開始期に当たる大木6式1期～4期を1期、続く大木6式5期～五傾ヶ台Ⅱ式並行期をⅡ期とする。1期の遺構としては、フラスコ状土坑27基、その他の土坑27基、埋設土器4基が検出され、竪穴住居跡は検出されなかった。但し時期不明の住居跡や西側の焼け面を囲むピット群に見出せる可能性も否めない。

板沢地区のフラスコ状土坑の分布を見ると、北東群の東側遺物包含層上端縁に沿って比較的大きめの土坑16基が帯状に分布する。また南東群(4基)と南西群(6基)にもやや小さめのフラスコ状土坑の分布が認められる。その他の土坑では、上記した3地点の他に北西群にも分布が見られる。埋設土器は中央エリアで3号埋設土器、南西群で1・2号埋設土器、西端で4号埋設土器(図8—8)が検出され、東側遺物包含層の形成も開始された。時期別で見ると、大木6式1期はフラスコ状土坑(462・498号土坑)が北東群に出現し、隣接した東側遺物包含層の形成も始まる。続く同2期も北東群(334・461号土坑)に主体があるが、南東群にも不整形円形の909号土坑(口径114×80cm、底径100×64cm、深さ26cm)、中央エリアや西端に3・4号埋設土器が構築されるなど、遺構の広がりを確認できる。同3期になると遺構は板沢地区の全面に展開する。北東群では545号土坑(図8—12)、南東群では177号土坑や222号土坑(十三菩提式鍋屋町系土器出土)、南西群では10・542号土坑(図8—11)、北西群では400号土坑(図8—13)が該期に位置づけられ、全体が4つのまとまりに分割され、環状を企図したような構成が認められる。続く同4期は北東群の612号土坑と、Ⅱ期として報告された330号土坑(図8—15)のみで、東側遺物包含層から出土した土器も先行型式よりも減少する(小林圭—2016b)。

1期の遺構は土坑と埋設土器のみで、その他に東側遺物包含層が加わるが、居住施設は明確でない。貯蔵穴が多数構築され、捨て場跡が形成された以上、定住的な集落として機能していたことは疑えない。時期不明の南端の28号住居跡や西側の焼け面を囲むピット群が該期の居住施設であった可能性、また掘り込みの浅い竪穴式もしくは平地式の住居で検出が困難であった可能性も考えられる。最初期は北東群に主体があったが、大木6式3

期には4つのエリアに分割されていた可能性が指摘され、集落形成の初期の段階である程度環状構成が企図されていたように窺われる。

なお大型住居である58号住居跡は、大木6式1～2期の462号土坑、同2～3期の463号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。恐らく住居跡の方が新しいと思われるが、該期の可能性も残されている。46号住居跡は住居内の堆積土から五領ケ台Ⅰa式並行期の土器(図8-27・29)が出土しており、住居跡はⅡ期に帰属されるが、大木6式4期の612号土坑(図8-16)を切って構築されていた。また1・2号埋設土器は型式の特定は困難であるが、複合口縁の長胴形であることから、大木6式前半期に位置づけられる。3号埋設土器は中央エリアで検出されており、墓域として既に意識されていた可能性も考えられる。北東群の330号土坑(口径194×104cm、底径150×70cm、深さ46cm)は楕円形の土坑で、Ⅱ期として報告されたが、出土土器(図8-15)はⅠ期に比定され、規模・形状から土坑墓の可能性も考えられる。

(2) 小梁川遺跡のⅠ期(大木6式1～4期)の土器

Ⅰ期は東側遺物包含層第Ⅴ層から出土した土器が主体で、報告書では第Ⅰ群土器として前期未葉に位置づけられ、同層準は南側のCL～CN・72～73区で1枚、北側のCL～CQ・86～87区では最大3枚(a～c層)に細分された。今村啓爾氏の5細分編年(今村2010)の大木6式Ⅰ期～4期の土器に該当するが、同遺跡では先行する大木5b式の土器は認められず、同6式Ⅰ期になって忽然と集落の形成が始まったことになる。

Ⅰ期の土器のうち図24-1～7が大木6式Ⅰ期、8～25が同2期、26～35が同3期、図25-38～46が同4期に位置づけられる。大木6式は長胴形と球胴形の土器を主体に構成されるが、この区分は大木6式の成立した時期ではそれ程明瞭でなく、2期以降に分化が進行した。長胴形は頸部の括れた胴部の長い深鉢形土器で、口縁部・頸部・胴部の三つの文様帯を有した例(18・37・35・46)、胴部文様帯を欠いた例(21・25・30)、頸部と胴部文様帯を欠いた例(20)の三様が見られる。球胴形は外反する口縁部、球状に膨らむ胴部、円筒形の台状部の3段からなる器形で、結節浮線文、ソーマン状浮線文、結節沈線文等の文様表現で飾られたものが多く、

特に3期に「浮線文系球胴形土器」(26)が発達する。39は報告書で第Ⅱ群土器に分類されたが、口縁部に渦巻き状の突起を配し、括れ部下端にかけて「く」字状の短沈線文が繰り返されることから、筆者は大木6式4期に位置づけた(小林圭一2016b)。

(3) Ⅲ期(大木6式5期～五領ケ台Ⅱ式並行期)の土器
Ⅲ期は東側遺物包含層第Ⅳ層・第Ⅳ層上面から出土した土器が主体で、報告書では第Ⅱ群土器として中期初頭に位置づけられ、同層準は南側のCL～CN・72～73区で1枚確認された。今村氏の編年研究の大木6式5期～五領ケ台Ⅱ式並行期まで含まれるが、前記したように五領ケ台Ⅱb・Ⅱc式並行期の土器は判断としない。

Ⅲ期の土器のうち図8-17～23が大木6式5期、27・28が五領ケ台Ⅰa式並行期、30・31が同Ⅰb式並行期、32・33が同Ⅱa式並行期に位置づけられ、24～26はこれ等に伴った「糠塚系統」土器である。大木6式5期は先行型式までの長胴形と球胴形の文様上の区分がなくなり、胴部が球状に膨らむかどうかの区分となり、胴部には縦方向の縄文が施され、羽状に組まれたり、両端に結節回転文が加えられる。文様は口縁部に集約され、浮線を2本平行に貼り付けて文様を描き、その2本を短い浮線で梯子形に繋いだ梯子形文様やドーナツ形貼付文に刻みを入れた文様が認められる。続く五領ケ台Ⅰa式並行期は浮線文による表現が沈線文に置き換えられ、短沈線を並べた梯子形の文様図形を特徴とする。同Ⅰb式並行期は口縁部文様の簡略化が進み、幅狭の文様帯をもった円筒形(30・31)が目につくが、東北では同式の指標となる細線文が普及しておらず、Ⅰa式並行期との区分は必ずしも明確でない。同Ⅱa式並行期の土器は極僅かとなるが、原尻地区では当該型式の住居跡(56号住居跡)が検出され、32(床直上)と33(床面)が出土した。同式は口唇部の刻みと口唇外面の縄文帯及び沈線に沿う刺突文を特徴とするが、33は縄文帯を欠くが、口唇部が細かく刻まれ、括れ部の水平の複合鋸歯文の上下を区切る平行沈線文に沿って刺突列が加えられ、同式の特徴を具備している。

上記した装飾を持った土器に伴って、在地系の「糠塚系統」土器が出土する。同系統は口縁部を水平線で数段に区分し、その各段に縦の沈線を並べて挿入し、胴部を削り取ったような無文または縦方向の羽状縄文になるも

ので、大木6式5期(図8-24)に登場し、五領ヶ台I式並行期(25・26)に続き、同II a式並行期には文様が単純化し、口縁部や口縁の折り返し部に縄文を加えたものが多くなる(今村2010:362-363頁)。更に少量ではあるが、折返し口縁を有した縄文施文の「下小野系粗製土器」に類似した土器(今村2010:126-141頁)も出土している。

9. 会津地方・阿賀野川流域の前期末葉の様相

福島県の会津地方と新潟県の阿賀野川流域の遺跡は同一の水系で結ばれた50km圏内に位置しており、ほぼ同じ文化圏と見なすことも可能であろう。東北南部の縄文前期末葉には、福島県西端の沼沢火山の噴火が、会津地方に甚大な被害をもたらしたことが知られている。大沼郡金山町に所在する沼沢湖を水源として、テフラ(Nm-N)の降下年代は紀元前3400年頃と推定され、考古学上は大木6式の間隔幅の中にあつたと特定されている。噴き出した火砕流は只見川を流走すると共に、東側にも達しており、またテフラは供源から東方向の福島県内ほぼ全域に降下した(図26)。この噴火により、会津盆地の西部や只見川流域は壊滅的な被害を受け、一時的に生活が困難になる状況が生じたと推定されている。

(1) 大木5a式について(図27-1~18)

大木5式は口縁部が外反した円筒形または植木鉢状の器形で、縄文地にジグザグの貼付文と口部の鋸歯状裝飾体に特徴付けられるが、興野義一氏によって5a式と5b式に二分されている(興野1970)。同5a式は上記した特徴を具備するが、口部の鋸歯状切り込みは大型であるが鋸歯数は少なく、ジグザグの貼付文は体部に幅広く数段にわたって付される傾向が見られる。

当該域の大木5a式は、^{かふとみやにし}胃宮西遺跡と^{かしま}鹿島遺跡でまとまっている(図27-1~18)。口縁部が外反した朝顔形の深鉢(1・2・4・14)が大半を占めるが、頸部が括れ胴部が内彎した器形(3・5・6・8・10)も存し、口縁部は平縁の他に4単位の波状口縁(3・4・8・14)も見られ、特に前者の器形では波状口縁の場合、波頂部が鋸歯状裝飾体となり、4は竹管端による列点が加えられ、14は無文となる。また後者の器種では、括れ部が画され、口縁部が無文帯となる例(3)も認めら

れる。

文様では胴部のジグザグ状の貼付文(2・4)を特徴とする。短い粘土紐(長さ2cm程度)を折り重ねて連続した山形の文様を作出し、2本一組で構成される場合が多く、沈線文とは併用されない。しかし当該域では、やや太目の沈線で大振りの山形の文様を施した土器(1・3・5・6・14)が卓越しており、貼付文が卓越する東北中部(岩手県南半・宮城県北半)との違いを際立たせている。ジグザグ文以外の沈線文様では、8は波頂部直下の胴部上半に「3」字形を線対称に配し、7は弧線と鋸歯文を組み合わせた文様、3は「V」字形や同心円モチーフで構成されるが、ジグザグ文も併用される。また地文には単節RLが多用される。

15・18は口縁部に捺糸圧痕を加えた土器で、両例とも側面圧痕と胴部施文に同一の原体が用いられる。15は頸部が緩く括れた器形で、口唇上に鋸歯状裝飾体(無文)を配し、口縁部に2列の縄文原体(RL)を捺捺する。18は口縁部が短く外折した器形で、口縁部と頸部に2列ずつ縄文原体(0段多糸LR)を捺捺し、後者には竹管による刺突を加えた環状突起が貼付される。なお両例は異系統土器の11・16と近接して出土しており、共存したものと考えられている(芳賀1985:114頁)。その他の胴部に縄文のみを施文した土器として、口唇上に鋸歯状裝飾体や刻みを加えたり、口縁部に無文帯を巡らした例も存する。口唇上の縄文・口縁部の捺糸圧痕・羽状縄文・口唇上のジグザグ貼付文等を特徴とした土器群は、東関東で「栗島台I式」と認識されてきたが、大木5a式の一部を構成するもので、東関東へ進出したことが指摘されている(芳賀1985:130頁、今村2010:61頁)。

その他に口縁部に半截竹管による刺突列を有する土器(5・10)が存する。頸部が緩く括れ、胴部が内彎した長胴の深鉢で、口縁部の刺突は「C」形が多数で「D」形が少なく、1列よりも2列の方が多い。胴部に縄文地(RL)にジグザグの沈線文様を配した例(5)や太い沈線を等間隔で横走させた例(10)が見られるが、縄文地文のみも存する。口縁部が短く外折し、胴部が張る器形で、口縁部に刺突列を巡らすことから、興津式の影響が想定され、同式と大木5式との折衷土器と評価されよう。大木5a式は諸磯c(古)式・興津II式と並行関係に

ある。11～13が諸磯c(古)式に比定される。11は口縁部が外傾した口径52cmの大型の深鉢で、口縁部に横走する条線、胴部は交差する条線が施文され、棒状とボタツ状の貼付文の発達が著しい。9・16・17は興津Ⅱ式に比定される。同式は磨消貝殻文に特徴付けられ、文様施文具に貝殻が多用されるが、当該域では竹管・櫛歯で代用し「擬似貝殻復縁文」(芳賀1985:129頁)をなす点に特徴がある。17は4単位の波状口縁の深鉢で、体部上半に半截竹管の平行沈線により区画した後、区画内が竹管端部による刺突で充填され、幾何学的なモチーフで構成された磨消貝殻文に類似した構成となる。胴部下半にはRLが施文され、興津Ⅱ式としては器高が高く括れの弱い器形から、同式と大木5式の折衷土器と評価される。

青宮西遺跡の胎土分析では、大木5式と興津式の粘土鉱物にあまり差がなく、遺跡周辺で製作されたと想定されるのに対し、諸磯c式は2型式と大きく異なり、他地方からの搬入品と考えられている(芳賀ほか1984:169-170頁)。在地系と興津式との折衷土器(5・10・17)が存在することや、施文具として貝殻の代わりに竹管が多用される点からも支持されるであろう。

(2) 大木5b式について(図27-19~27)

大木5b式は鋸歯状裝飾体が口周に広がり始め、鋸歯数は多くなるが、鋸歯自体は小刻みとなる。文様は区画線の発生により、ジグザグ文が頸部に圧縮され、段数も減少し、貼付文から沈線文に漸次変化する。しかし当該域の大木5b式は油田遺跡あびらでんと上野東遺跡で零細な資料が得られているに過ぎない(図27-19~27)。

当該域の大木5b式は折り返された口縁部と、その下の幅の狭い頸部文様帯からなり、その下位は縄文となるものが大半を占める。口縁の折返し部の上下端の刻みは先行型式の鋸歯状裝飾体の痕跡と見られ、頸部の文様は沈線文のみで、浮線文で構成された例は認められない。先行型式の系譜を引く朝顔形の深鉢(19)も存するが、当該域には器高と口径がほぼ同等で、口径に最大径を持った長胴形(21・22・24~27)が特徴的で、胴下部は殆ど縮約せず、底径の大きな底部に至る。口縁部は幅狭の肥厚帯や簡素な裝飾帯となり、頸部には縄文地に平行沈線を巡らし、その直下には平行沈線によるジグザグ文(20・21・24)や弧線文(26)、曲線の文様(22)

等も配される。また口唇上に鋸歯状裝飾体も認められる(26)。

23は「栗島台式」とされた縄文施文の土器である(今村2010:61・68頁)。外反した口縁に平行した擦糸圧痕を有し、先行型式に見られた口唇上の縄文や鋸歯状裝飾体を持たない。25は折り返し口縁部を持つ円筒形の深鉢で、口縁部に3列の擦糸圧痕が施される。口縁部直下に鋸歯状文等の文様が施されるが、口縁部の擦糸圧痕は栗島台式に関連するもので、形状は下小野系粗製土器に繋がるのであるうか。

福島県内では大木5a式が豊富に得られているのに対し、同5b式は極端に少ないのが実情である。時間的に大木5b式と栗島台式、諸磯c(新)式が並行すると考えられるが、当該域では<大木5b+栗島台>の関係(今村2010:61頁)が確認されるのみで、諸磯c式との関係は判断としない。なお当該型式から大木6式1期にかけて、胴部に結節回転に似せた小波状沈線文も特徴として指摘される。

(3) 大木6式1期について(図28-28~43)

当該域の大木6式1期は、上道うみちうみち上B遺跡と上ノ原遺跡でまとまっている(図28-28~43)。口縁部は厚みが強く、頸部で外折する器形で、その括れ部を刻み隆起線(結節浮線の例もある)が横走し、胴部は水平方向の結節回転文が顕著である。球胴形と長胴形の分化はまだ明確でないが、口縁部文様帯は未発達で、胴下部が縮約した球胴形に類した土器(35・36)が存在しており、口縁部が短く外折し、胴部の膨らみの強い深鉢(29・37・38)も認められる。口縁部の文様は口縁に沿って2本の隆起線を巡らし、その間につまみ状の突起や橋状把手を配した例(38・40・41)や擦糸圧痕を加えた例(34)が見られ、波状口縁の波頂部に刻みを加えたり(29・33・37)、厚みを増し突起化した例(28)も存する。但し32は2個一組の球状突起で双頭波状口縁風に裝飾されており、2期に属する可能性が高いであろう。口縁部が弱く外反した43は折り返し口縁部の中央が水平に凹んでおり、後続型式の凹線文に引き継がれると共に、下端の刻みは先行型式の鋸歯状裝飾帯の名残と思われる。

当該型式の胴部上半には文様があまり発達しないが、縄文地に結節沈線による文様が認められる。多くは横走

する結節沈線や浮線の文様で構成されるが、中には狭小な区画帯に菱形等の文様を配した例 (37) も見られる。また器面に瘤状小突起を貼付した例 (28) も存する。

長胴形では、器高 40 cm 超の大型深鉢が特徴となる (30・31・41)。外折した口縁部は比較的単調な装飾で、胴下部の縮約は極僅かで底径が大きく、長い胴部は縄文施文のみとなる。42 は先行型式の「粟島台式」の系譜を引くと思われる縄文施文の土器で、折り返された口縁部には、縄文地 (RL) に RL の側面圧痕が等間隔で加えられる。

(4) 大木 6 式 2 期について (図 28 — 44 ~ 60)

当該域の大木 6 式 2 期は、鹿島遺跡と法正尻遺跡、北野遺跡でまとまっている (図 28 — 44 ~ 60)。特に法正尻遺跡の大木 6 式古段階とされた土器群は当該型式でほぼ占められており、鹿島遺跡では沼沢火山火砕流の直下、北野遺跡では二次堆積層の直下から出土している。口縁部文様が複雑化し、双頭波状の口縁が発達し、頸部に刻み隆起線を巡らし、胴部文様は殆ど見られないが、上端に横位の結節回転文を加えた例が存する。長胴形と球胴形の分化の状況は判断しにくいのが、長胴形でありながら胴部の膨らみが強く、どちらも言いにくい器形が目につく (図 28 — 44・45・55・56)。また括れを持たずに外傾して立ち上がる直胴形の深鉢 (51・52) も当該型式に認められる。

先行型式に比べ口頸部の上下幅が伸張し、口縁肥厚部は厚く幅狭であるが、装飾が複雑になる。隆起線の貼り付けや凹線、凹円により、立体的な装飾で構成され、隆起線の中心線に沿って燃糸を押しつけた手法 (44・51・54) は、東北南部の特徴となる。双頭波状口縁 (46・51・53) や円弧状突起 (44・48・55) が特徴的で、前者では双頭波状口縁の間に挟まって縦長の粘土紐が数本並列する (46・53)。波状口縁では、隆起線や結節浮線・沈線を問わず波頂部直下に円形や渦巻モチーフを配し、波底部から延びた弧線が取り囲んで菱形の区画を作出した文様構成が特徴的で、波底部にはボタン状や縦長の貼付文が配される (50・52・56)。

胴部上半に文様を施した球胴形も存するが、胴部から台状部への移行が比較的緩やかで、胴部上半にはジグザグ文 (44・47) や渦巻文 (49)、菱形文 (50) 等の単調な文様が配される。その他の器形でも、括れ部の隆起

線の直下にジグザグ文を配した例 (45・48) が散見され、括れを持つ長胴形深鉢では緩く括れた頸部に複数のジグザグ文を巡らす例 (59) が特徴となる。

北野遺跡の成果から、十三菩薩式古段階や鍋屋町式との併行関係が推定される。共に沼沢火山二次堆積層直下から出土し、伴出した土器からも大木 6 式 3 期に先行することは確実である。当該域では、大木 6 式に典型的な長胴形の深鉢 (46・60) が当該型式で明確でなくなる。以降胴部の長い器形では直胴形や円筒形が主体となっており、器高 40 cm を超える特大の大型品も姿を消す。

(5) 大木 6 式 3 期について (図 29 — 61 ~ 72)

沼沢火山の噴火は大木 6 式 2 期と 3 期の間、または 3 期の中で起こったと推定されているが、当該域の大木 6 式 3 期は、法正尻遺跡や新編具の境明^{げんみょうだけ} 深鉢遺跡、猿額^{さるがけ}遺跡でまとまっている (図 29 — 61 ~ 72)。特に法正尻遺跡では、先行型式と異なった分布状況が確認され、後続型式と共に沼沢湖テフラ層直上からの出土が示唆されており、69 はテフラ層に密着して出土したことが報告されている。また後二者の遺跡では、沼沢火山二次堆積層直下から出土している。上記から大木 6 式 3 期の時間幅の中で、沼沢火山の影響が顕現したと考えられる。

当該型式は浮線文系球胴形の深鉢 (61・62・67) に代表され、東北中・南部一帯に分布する。胴部が丸く膨らみ、球胴部から台状部に直角に近く折れ曲がった器形で、外折した口縁部の幅が広がり、胴部文様帯の下腹も胴径最大部付近に達するものが多く、文様は主に結節浮線文で構成される。しかし当該域には上記した特徴を持った土器は少なく、渦巻文を基調とした沈線文様の例 (69・71) が卓越しており、沈線文の側縁に爪形の刺突列を加えた土器 (66・72) も現出する。後者の描出手法は 4 期に特徴的であり、その萌芽が 3 期にあったことを窺わせる。球胴形の胴部下半は縄文施文となるが、横位の羽状縄文 (61・69) や縦位の羽状縄文 (68) も認められる。

胴部の長い深鉢では、先行型式に見られた頸部の括れた長胴形が姿を消し、括れを持たない直胴形または円筒形で占められる。器高 35 cm 以下、底径 15 cm 以下で、先行型式に比べると小型化が進行しており、折り返され肥厚した口縁部に文様が集約され、胴部は縄文地文となる。波状口縁または山形突起を配した例が多く、口縁部

の文様は口唇の形状に対応した沈線文様で構成され、波頂直下に渦巻や半円形を基調とした文様が配される。

70は十三菩提式中～新段階に比定される土器である。胴部下半分が鍋屋町系、上半分が北白川系と評価され(今村2006d:129頁)、大木6式3～4期が併行関係にあると考えられる。十三菩提式中段階、東北の大木6式3期の時期に、北陸の鍋屋町系土器が中部高地を通じて関東地方に入り、それらの地域で変形した後、東北地方を北上した現象があったことが指摘されている(今村2006d:125頁)。その場合圧倒的な量の東北地方の土着の土器の中に、僅かな量の鍋屋町系土器が混じるだけとなる。70はその異系統土器に該当するが、文様の崩れや大胆な折衷等から直接搬入された土器ではなく、当該域で作られたと理解されている。関東の土器作りの系統を担った作り手が法正尻遺跡に移り住んで、本来の約束ごとを忘れかけながら作った可能性が想定されている(今村2006d:130-131頁)。

(6) 大木6式4期について(図29-73～93)
当該域の大木6式4期は、法正尻遺跡と葦原遺跡でまとまっている(図29-73～93)。前者では3・5期と同じ西側の分布域で出土し、土坑3基から一括性の高い資料が得られており、後者では沼沢火山二次堆積層の直上に相当するII層から出土した。大木6式に典型的な頸部が括れた長胴形の深鉢は認められず、直胴形または円筒形の深鉢と球胴形の深鉢で構成される。頸部が括れた胴部の長い深鉢(80・85・89・90)も存するが、球胴形の系譜を引いており、底部付近で縮約した器形になると推定される。

球胴形は波状口縁(73・74)と平縁(81)が存するが、胴部文様帯は上下幅が収縮し、帯をなさない懸垂文になったり(89・93)、縄文施文のみの例(74)も見られる。外折した口縁部は内彎気味に立ち上がる傾向にあり、口唇が内外に突出した断面を有するものが多い(80・81・89・93)。波状口縁では口唇の形状に対応して波頂直下に逆「U」字形を基調とした文様が配されるが、沈線文様でその側縁に爪形の刺突列を加えた手法が特徴的である(73・74)。平縁では浮線による文様が卓越するが、ソーマン状浮線と結節浮線が併用され、ジグザグ文は短い浮線の端と端を重ねた端重ねジグザグが特徴となる。また口縁部にドーナツ形・渦巻形の突

起(88)や橋状把手(89・93)が配され、胴部には縦位の結節回転文(74・89)が施文される。81の口縁部には「小円の貼付」が見られるが、この貼付文は限定された時期に広域に流行した属性(今村2006a:188頁)となっており、大木6式4期(朝日下層式・十三菩提式新段階前半)の指標に位置づけることができる。

直胴形または円筒形の深鉢は、口縁部がやや肥厚し、直上または外反する。文様帯の上下幅が伸張し、文様は沈線で施文されるが、波状口縁または口唇上に突起が配された場合、波頂直下に逆「U」字形・半円形・円形等の基調となる文様や突起が配される(75・78・83・87・90)。文様は球胴形と同様に太沈線の側縁に爪形の刺突列を加えた例(75・82・83・86・90)が特徴的であるが、上下交互の短沈線も多く認められ、縦沈線を繰り返した単調な文様(76・78)も同期の特徴となる。この上下交互の短沈線は、中期初頭の複合錯簡文と関連するのであろう。当該深鉢には球胴形のように口縁部を細い浮線文で装飾した例は見られず、胴部には横位の結節回転文や羽状縄文が施文される。また頸部文様帯を有する例(77・79・83?)も認められるが、上下限が狭く区画されている。

大木6式4期は十三菩提式新段階前半と併行関係にあり、その根拠に細密な浮線による小円形の貼付や細密化したジグザグ浮線文の共通性が指摘されている(今村2006c:66頁)。結節浮線文主体からソーマン状浮線文主体への移行期に当たり、内陸部を通じた関東地方十三菩提式との交流が維持されていた様相が看取されるが、一方で当該域の地域性が顕現した時期にも相当する。

(7) 大木6式5期～中期初頭について(図29-94～104)
大木6式5期は前期最終末の土器で、当該域では法正尻遺跡でまとまっている。同遺跡では大木6式3・4期及び中期初頭五領ヶ台I a・I b式と同じ西側の分布域で出土しており、土坑2基から一括性の高い資料が得られている。しかし大木6式5期と五領ヶ台I a式は非常に近似し、その差異は浮線文の有無が関わっており、ここでは両型式を包括した(図29-94～104)。

大木6式5期は内彎した口縁部を乗せたキャリパー形が多くなり、胴部が円筒形(95)や内彎した長胴形(94)、球胴部分が収縮した台状部が大きく高くなった球胴形(96)が見られるが、球胴形は「口縁部の下が膨らむという表

現」(今村 2006c : 62 頁)の方が適切で、中期初頭では更に縮約した器形となる。口唇の断面形は内側で階段のように1段低い位置から突出したり、口内に沈線を巡らせた土器(96・98・101・102)も見られ、中期初頭へと継承される。また「括れ部の直上、口縁部文様帯の下限をわずかな隆起線で画するもの」(今村 2006c : 62 頁)が多く、大きな橋状把手(96)も配される。

文様は口縁部にはほぼ集約され、梯子形の貼付文に特徴付けられる。浮線を2本平行に貼り付けて文様を描き、その2本を短い浮線で梯子形に繋ぐ文様で、沈線文で置き換えたものが中期初頭に位置づけられる。また大きく上が平らな隆起線で文様帯内部を区分し、その隆起線の上を短線で刻むもの(94・95・97)も5期に存するが、渦巻形やドーナツ形の図形を描出した後沈線帯で充填された土器(98～103)は中期初頭(五領ヶ台I a 式)に位置づけられる。平線が顕著であるが、波状口縁や突起を配した例も見られ、特に口唇上に環状や渦巻状の突起(96)が配される。括れ部の直下に懸垂文を残した例(96)も認められるが、胴部は基本的に縦位の結節回転文が施文される。

94と96の口縁部は横位の集合平行沈線を施し、上下の区画線に沿って部分的に半截竹管で三角形に縁取られており、松原式(大木6式4期並行)との関連が想定される。今村啓爾氏は95・96・97・103を「東北地方の五領ヶ台I a 式並行期」に位置づけている(今村 2010 : 392 頁)。しかし2006年の時点では、95・97を大木6式5期(図7-62・63)に位置づけており、同氏自身逡巡した様子が窺われる。大木6式5期ではドーナツ形文様部分が独立的多いものに対し、五領ヶ台I a 式並行期では周囲の文様の中に埋め込まれ、渦巻の端が斜めタスキに流れ込んでおり、また口唇外側を厚くし、縦線を刻むものが増える傾向にあり(今村 2010 : 361 頁)、恐らくこれ等の点を重視したため変更されたのであろう。104は円筒形の深鉢であるが、口縁部文様帯に短沈線が充填され、三角刻文が加えられており、「東北地方の五領ヶ台I 式並行期(おそらくI b 式並行)」(今村 2010 : 393 頁)に位置づけられている。

大木6式5期は十三菩提式新段階後半と併行関係にある。同式はソーマン状浮線文の発達が著しく、橋状把手も五領ヶ台I 式と同じ位置につけたものがあり、浮線文

を沈線文に置き換えれば五領ヶ台I a 式になるといつてよいほど近似性が強まる(今村 1985 : 96 頁)。しかし沈線文の土器は両型式にまたがって存在しており、区別に困難をきたしている点も否めない。大木6式5期と十三菩提式新段階後半は、大木6式系系の球胴形の土器が主体を占め、ソーマン状浮線文による梯子形文様が多用されるなど、顕著な共通性が認められ、先行型式と同様に内陸部を通じた強固な交流関係が維持されていたと想定される。

(8) 会津地方・阿賀野川流域の総括

福島県の会津地方と新潟県の阿賀野川流域の遺跡の検討を通して、沼沢火山の噴火と噴出物の二次堆積の影響についての考古学的年代を精査した。その結果、沼沢火山の噴火が大木6式2期と3期の間、または同3期の中で生じたことを明らかにした。火砕流は会津盆地の西縁まで達しており、同盆地は甚大な被害を被ったと推測される。また火山噴出物の流出によって阿賀野川流域の狭窄部が堰き止められてダム湖が形成され、一時的に水没した遺跡も確認されており、新潟県域では二次的な影響が大木6式3期以降に顕在化した。しかし同4期には収束した状況が認められ、水没から二次堆積の終了まで比較的短い期間で推移したと想定される。

大木6式1～2期には、新潟県の日本海沿岸部(豊原遺跡・南赤坂遺跡等)に会津系土器の進出が認められる。一方同3期以降では北陸系の真脇式主体が変わっており、会津方面の影響は影を潜めたことが指摘されている(今村 2006a : 205 頁)。年代的な推移で見ると、その背景に沼沢火山の噴火が関連した可能性が考えられる。会津地方では猪苗代湖北岸の法正尻遺跡や野沢盆地周縁の塩喰岩陰遺跡を除くと、大木6式後半の遺跡が姿を消しており、特に会津盆地内には火砕流が流下し、大きなダメージを受けたと推察され、同3～5期の遺跡は新潟県の阿賀野川流域にも僅かしか認められない。しかし当該期の会津地方とその周辺には地域色の強い土器が分布しており、3期では頸部が括れ胴部が内彎した長胴形の深鉢が消失し、直胴形や円筒形の器形が主体となり、4期には沈線文の側縁に刺突列を加えた個性的な文様を持つ土器が製作された。その一方法正尻遺跡では、4期の端重ねジグザグ文や5期の梯子形貼付文のように、広汎な近似性を示す土器も多数出土しており、内陸部を通じ

た広域的な土器情報の共有や人的交流が維持されていたと推定される。

沼沢火山の噴火と北陸集団の北上との関連性については、時間的にほぼ対応した点を除いて、積極的に結びつける根拠は指摘できない。会津方面の影響力が弱体化したことが、北陸集団の北上を促したとの見方は、あまりにも短絡的であるとの詭りは免れない。日本海沿岸部では会津方面との交流が希薄になった3期以降、能登半島(石川県)から男鹿半島(秋田県)に至る海岸伝いの交流関係が活発化したのは確実であり、それが土器に限られた現象なのか、他の資源等の移動が関与したもののなのか、さらなる検討が求められる。北陸方面の影響が沿岸部の遺跡に限られ、内陸部への進出が低調であったことから、集団の移動にあたっては海上を舟によって移動が行われ、漁撈を重要な生業とした人々が関わっていた可能性が指摘されている(今村2006b:308頁)。今回の研究は沼沢火山の噴火の時期とその影響の程度を明確にすることに主眼を置いたため、北陸集団の北上の背景には踏み込まず、年代的な整合性の提示に留まったが、中期に入ると新保・新崎式土器が内陸部まで進出し、また姫川産のヒスイが広域的に流通するなど、地域間交流の劇的な変化が予察されている。その究明に向けて詳細な地域編年の確立が必須の手続きであり、今後各地域での麥遷過程の明確化が望まれており、社会的動態を巡る問題がより深化されることを期待したい。

引用文献

- 相原淳一ほか 1986 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ 小梁川遺跡―遺物包含層― 原頭遺跡・養源寺遺跡・大熊南遺跡』宮城県文化財調査報告書第117集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 相原淳一 2010 『IV 東北地方南部の縄文集落の葬墓制』『シリーズ 縄文集落の多様性Ⅱ 葬墓制』pp.125-148 雄山閣
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年―その細分および東北地方との関係を中心に―」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第4号 pp.93-157 東京大学文学部考古学研究室
- 今村啓爾 2006a 「縄文前期末における北陸集団と土器系統の動き(上)」『考古学雑誌』第90巻第3号 pp.1-43(pp.181-223) 日本考古学会
- 今村啓爾 2006b 「縄文前期末における北陸集団と土器系統の動き(下)」『考古学雑誌』第90巻第4号 pp.36-51 (pp.296-311) 日本考古学会
- 今村啓爾 2006c 「大木6式土器の諸系統と麥遷過程」『東京大学考古学研究室紀要』第20号 pp.37-69 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室
- 今村啓爾 2006d 「縄文土器系統の担い手―関東地方から東北地方に北上した鍋屋町系土器の場合―」『伊勢湾考古』20(山

- 下勝年先生退職記念号) pp.125-132 知多古文化研究会
- 今村啓爾 2010 『土器から見る縄文人の生業』同成社
- 加藤綾編 1975 『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書 第1集』米沢市教育委員会
- 柏倉亮吉・江坂輝彌ほか 1995 『吹浦遺跡』庄内古文化研究会・サイエンス社
- 菊地政信 2006 『台ノ上遺跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第88集 米沢市教育委員会
- 興野義一 1969 「大木式土器理解のために(V)」『月刊考古学ジャーナル』No.32 pp.6-9 ニュー・サイエンス社
- 興野義一 1970 「大木式土器理解のために(VI)」『月刊考古学ジャーナル』No.48 pp.20-22 ニュー・サイエンス社
- 小林圭一 2014 「吹浦遺跡出土の縄文土器―今村啓爾氏の研究に学ぶ山形県内の縄文前期末葉の土器群―」『研究紀要』13 pp.3-51 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 小林圭一 2016a 「会津地方の大木6式土器と沼沢火山の噴火」『研究紀要』15 pp.25-77 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 小林圭一 2016b 「宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の大木6式土器」『研究紀要』第8号 pp.21-50 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一 2017a 「縄文時代中期「小梁川・大梁川編年」に関する覚書」『研究紀要』16 pp.3-24 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 小林圭一 2017b 「宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡の集落構成について」『研究紀要』第9号 pp.19-44 山形県埋蔵文化財センター
- 小林謙一 2007 「縄紋時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集(【共同研究】高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究) pp.89-133 国立歴史民俗博物館
- 齋藤健ほか 2004 『板橋1遺跡・板橋2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第125集 山形県埋蔵文化財センター
- 齋藤主税 1992 『船見沢遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第177集 山形県教育委員会
- 齋藤主税 2012 『川内袋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第197集 山形県埋蔵文化財センター
- 齋藤主税・須賀井明子 2004 「高瀬山遺跡(1期) 第1〜4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第121集 山形県埋蔵文化財センター
- 佐藤広史・伊藤裕ほか 1988 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ 大梁川遺跡・小梁川遺跡(石器編)』宮城県文化財調査報告書第126集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 渋谷孝雄ほか 1984 『吹浦遺跡第1次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第82集 山形県教育委員会
- 渋谷孝雄・佐藤正俊 1985 『吹浦遺跡第2次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第93集 山形県教育委員会
- 渋谷孝雄・黒坂雅人 1988 『吹浦遺跡第3・4次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第120集 山形県教育委員会
- 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 手塚孝ほか 1977 『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書 第3集』米沢市教育委員会
- 芳賀英一 1985 「大木5式土器と東部関東との関係」『古代』第80号(西村正衛先生古稀記念石器時代論集) pp.99-132 早稲田大学考古学会
- 芳賀英一ほか 1984 『胃宮西遺跡―縄文時代早期、前期集落跡の調査―』会津高田町文化財調査報告書第5集 会津高田町教育委員会

- 林 謙作 2004 『縄紋時代史Ⅱ』考古学選書 雄山閣
宮城県教育委員会編 1988 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告
書付編』宮城県文化財調査報告書第 126 集 宮城県教育委員
会
松田光太郎 2003 「大木 6 式土器の変遷とその地域性—縄文時
代前期未築の東北地方中・南部の土器編年—」『神奈川考古』
第 39 号 pp.1-30 神奈川考古同人会
村田晃一ほか 1987 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ
小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第 122 集 宮城県教育
委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
山形県教育委員会 1986 『大壇 B・C 遺跡発掘調査報告書』山
形県埋蔵文化財調査報告書第 103 集 山形県教育委員会

図版出典

- 図 1：(小林圭一 2017b：図 2)
図 2：(小林圭一 2014：図 2)
図 3：新規作成
図 4～7：(小林圭一 2016a：図 5～8)
図 8：(小林圭一 2017b：図 4)
図 9：(小林圭一 2014：図 6)
図 10：(小林圭一 2014：図 7)
図 11：(小林圭一 2014：図 9)
図 12：(小林圭一 2014：図 11)
図 13～16：(小林圭一 2014：図 13～16)
図 17：(小林圭一 2014：図 21)
図 18：(小林圭一 2014：図 19)
図 19・20：(小林圭一 2014：図 17・18)
図 21：(小林圭一 2014：図 23)
図 22：(小林圭一 2014：図 22)
図 23：(小林圭一 2017b：図 7)
図 24・25：(小林圭一 2016b：図 13・14)
図 26：(小林圭一 2016a：図 2)
図 27～29：(小林圭一 2016a：図 24～26)

- 表 1：(小林圭一 2016b：表 1)
表 2：(小林圭一 2014：表 3)

表1 今村啓爾氏による前期末～中期初頭の編年 (今村2006・10) 改変

	北 陸	中 部 高 地	西 関 東	東 関 東	東 北 中 ・ 南 部	東 北 北 部
	蜆ヶ森 II	諸磯c(古)式	諸磯c(古)式	興津 II 式	大木5a式	
前 期	蜆ヶ森 II	諸磯c(新)式	諸磯c(新)式	粟島台式	大木5b式	
	鍋屋町式 第1段階	十三善提式 古段階前半	十三善提式 古段階前半	粟島台式	大木6式1期 (古段階)	円筒下層c式
未 期	鍋屋町式 第2段階	十三善提式 古段階後半	十三善提式 古段階後半	粟島台式	大木6式2期 (古・中段階の間)	円筒下層c式?
	真跡式	十三善提式 中段階	十三善提式 中段階	下小野式	大木6式3期 (中段階)	円筒下層d1式
中 期	朝日下層式	松 原 式	十三善提式 新段階前半	下小野式	大木6式4期 (新段階)	円筒下層d1式
	新保式 上安原段階	踊 場 式	十三善提式 新段階後半	下小野式	大木6式5期 (新段階)	円筒下層d2式
初 頭	新保式 第II段階	踊 場 式	五領ヶ台 I a式	五領ヶ台 I a式 (+下小野式)	五領ヶ台 I 並行 (大木7a-I)	円筒上層a1式
	新保式 第II段階	踊 場 式	五領ヶ台 I b式	五領ヶ台 I b式 (+下小野式)	五領ヶ台 I 並行 (大木7a-II)	
初 頭	新保式	踊 場 式	五領ヶ台 II a式	五領ヶ台 II a式 (+下小野式)	五領ヶ台 II 並行 (大木7a-II)	
	新保式	五領ヶ台 II b式	五領ヶ台 II b式	五領ヶ台 II b式 (+下小野式)	五領ヶ台 II 並行 (大木7a-II)	
初 頭	新保式	五領ヶ台 II c式	五領ヶ台 II c式	五領ヶ台 II c式 (+下小野式)	五領ヶ台 II 並行 (大木7a-II)	
	新保式	大石式	大石式	竹ノ下 竹ノ下式	本来の大木7a式 (大木7a-III)	

(網点は本稿の時間的範囲を指示する)

表2 吹浦遺跡各段階を構成する系統(今村2010)一部改変

吹浦遺跡の区分	古 段 階	中 段 階	SK1094の段階 (中段階の終わり)	新 段 階
大木6式の区分	大木6式1期2期	大木6式3期	大木6式3期末	大木6式4期5期
土着の粗製土器	●●●	●●●●	●●	?
大木6式系の土器	●	●●		
北陸系の土器		●	●	●●●●
円筒下層系の土器			?	●●
該 当 遺 構	1951～53年調査	B地区出土土器	A地区出土土器	
	1985～86年調査 (第3・4次調査)	SK1011 SK1073 SK1075 SK1086 SK1108	SK1098 SK1104 SK1164 SK1245	SK1094 ST1070? SK1078 SK1079 SK920(単体)* *第2次調査

(●の数)は量の多少を示す、該当遺構の太字は今村氏の図示資料)

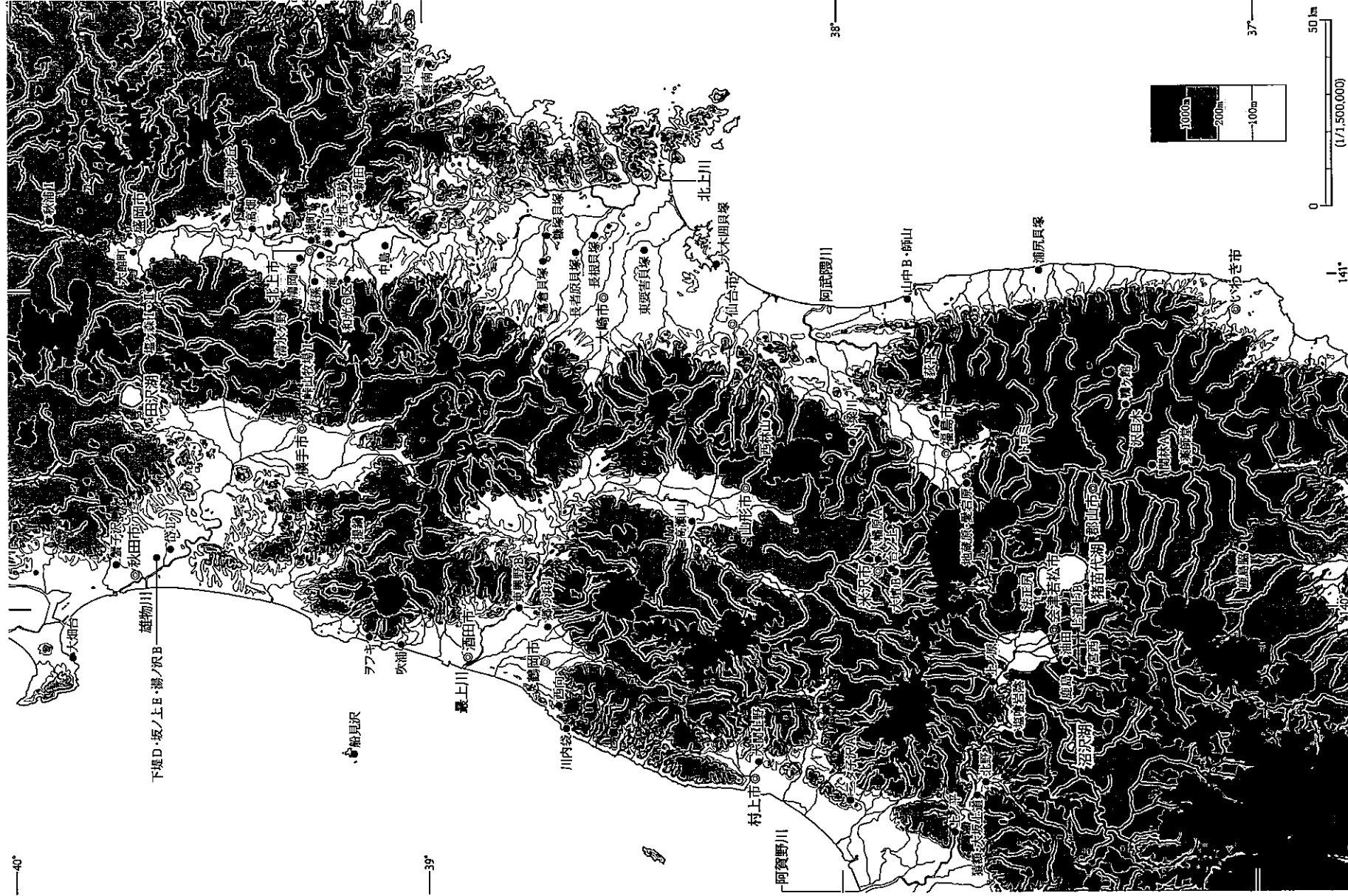


図1 東北中部・南部の縄文時代前期未葉～中期初頭の主要遺跡

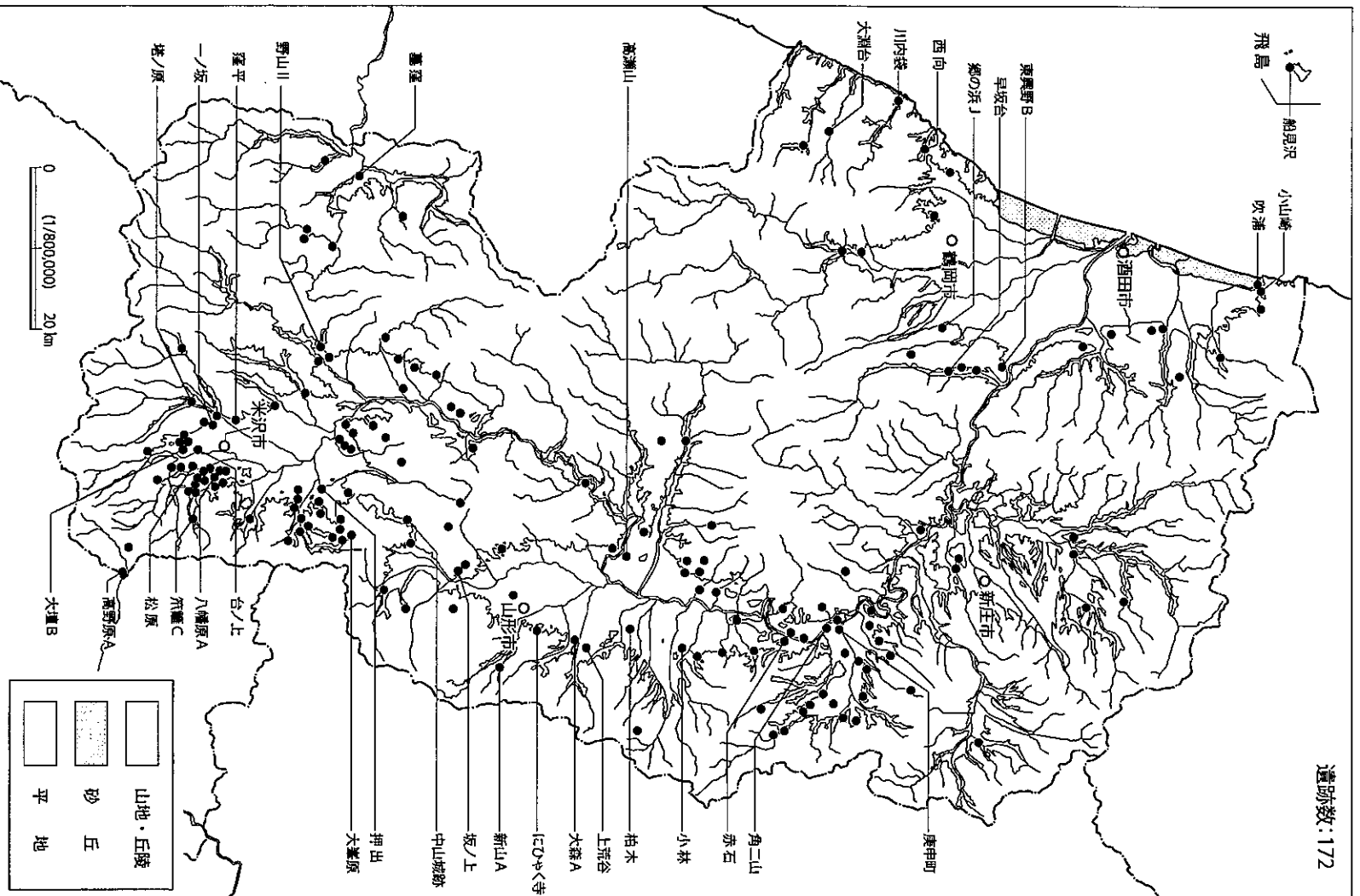


図2 山形県内の縄文時代前期遺跡分布図

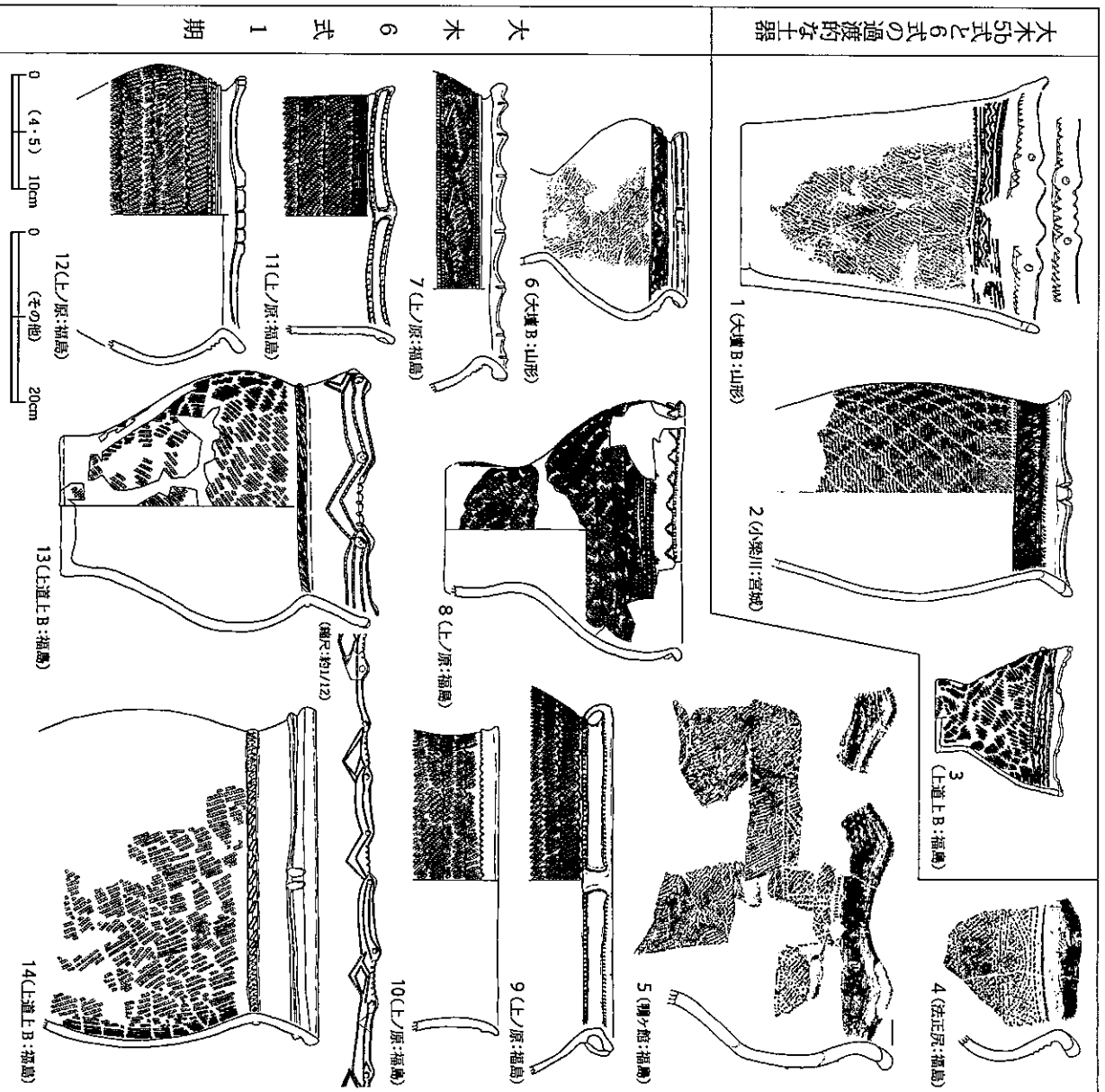
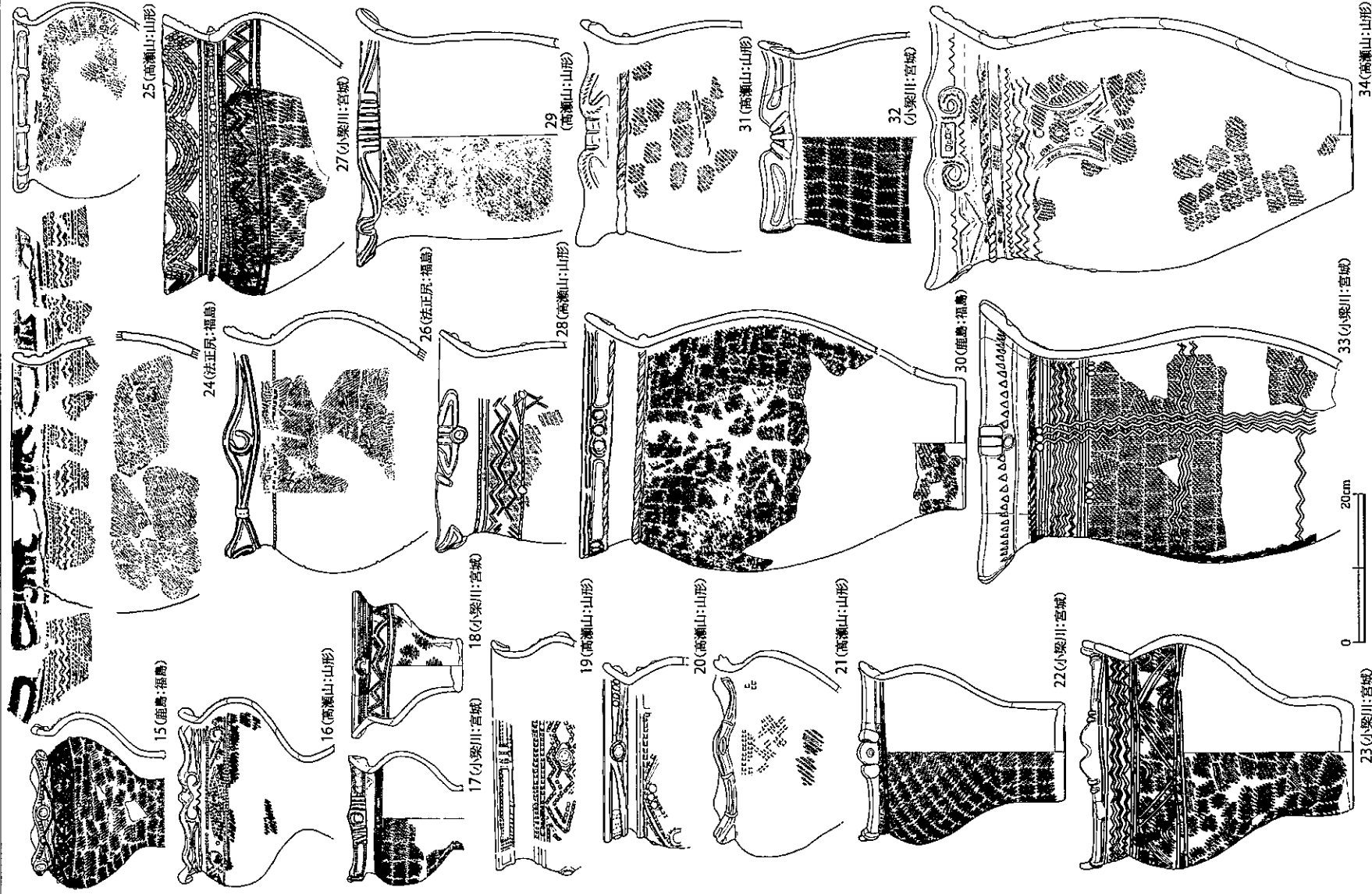


図 4 今村啓爾氏による南部の大木6式土器 (1)

浮線文系球胴形土器

長胴形土器



大木6式2期

図5 今村啓爾氏による南部の大木6式土器(2)

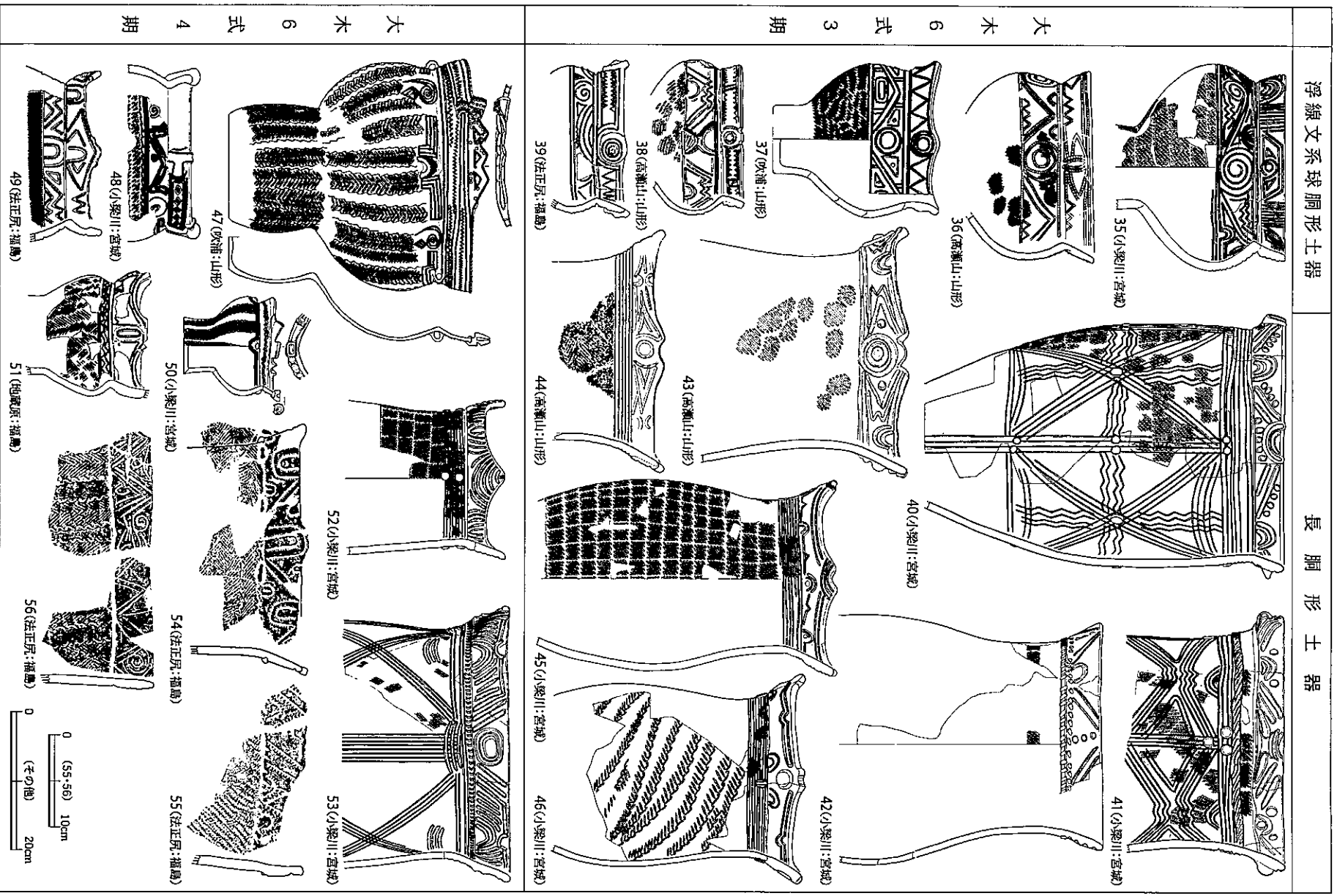


図6 今村啓爾氏による南部の大木6式土器 (3)

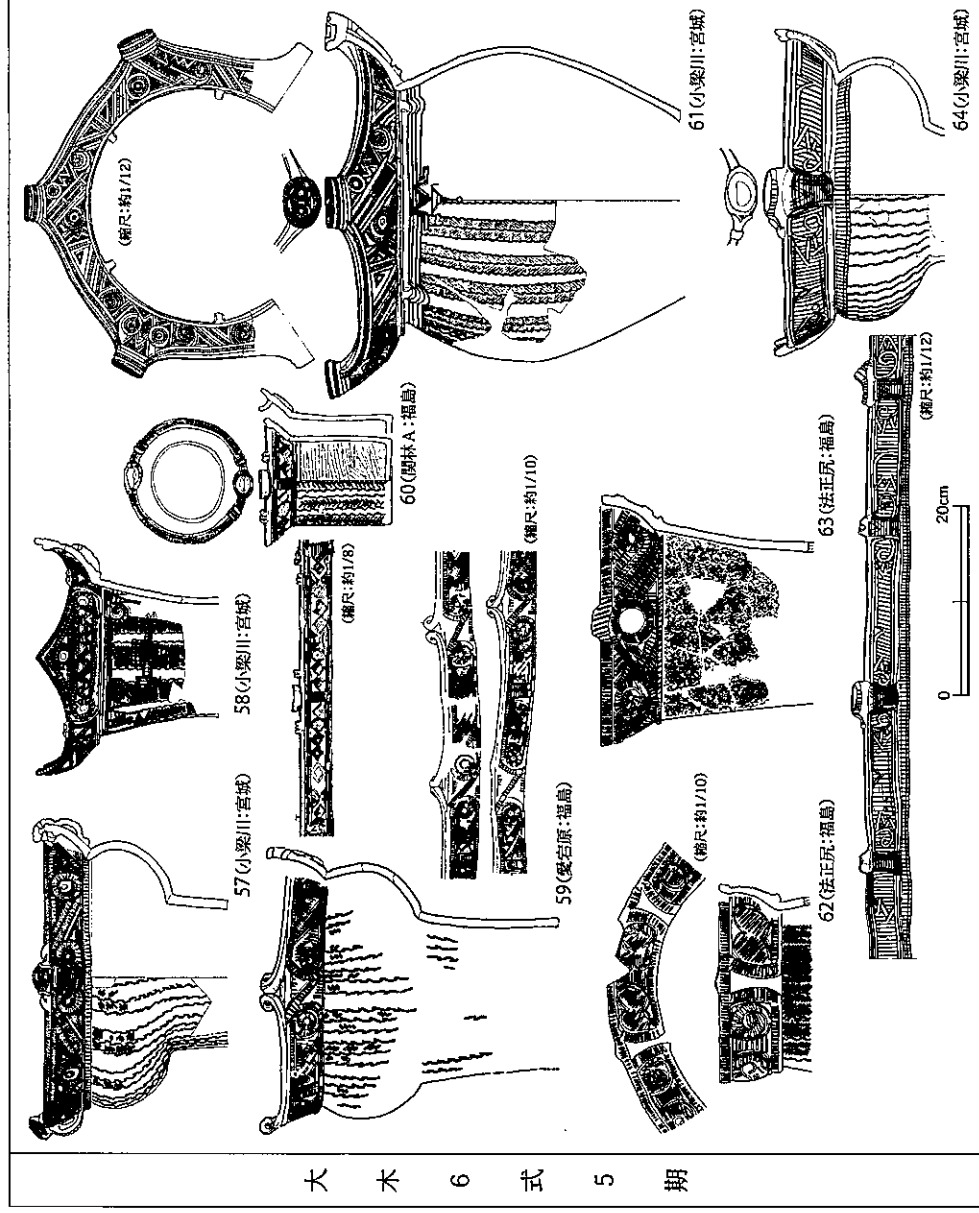


図7 今村啓爾氏による南部の大木6式土器(4)

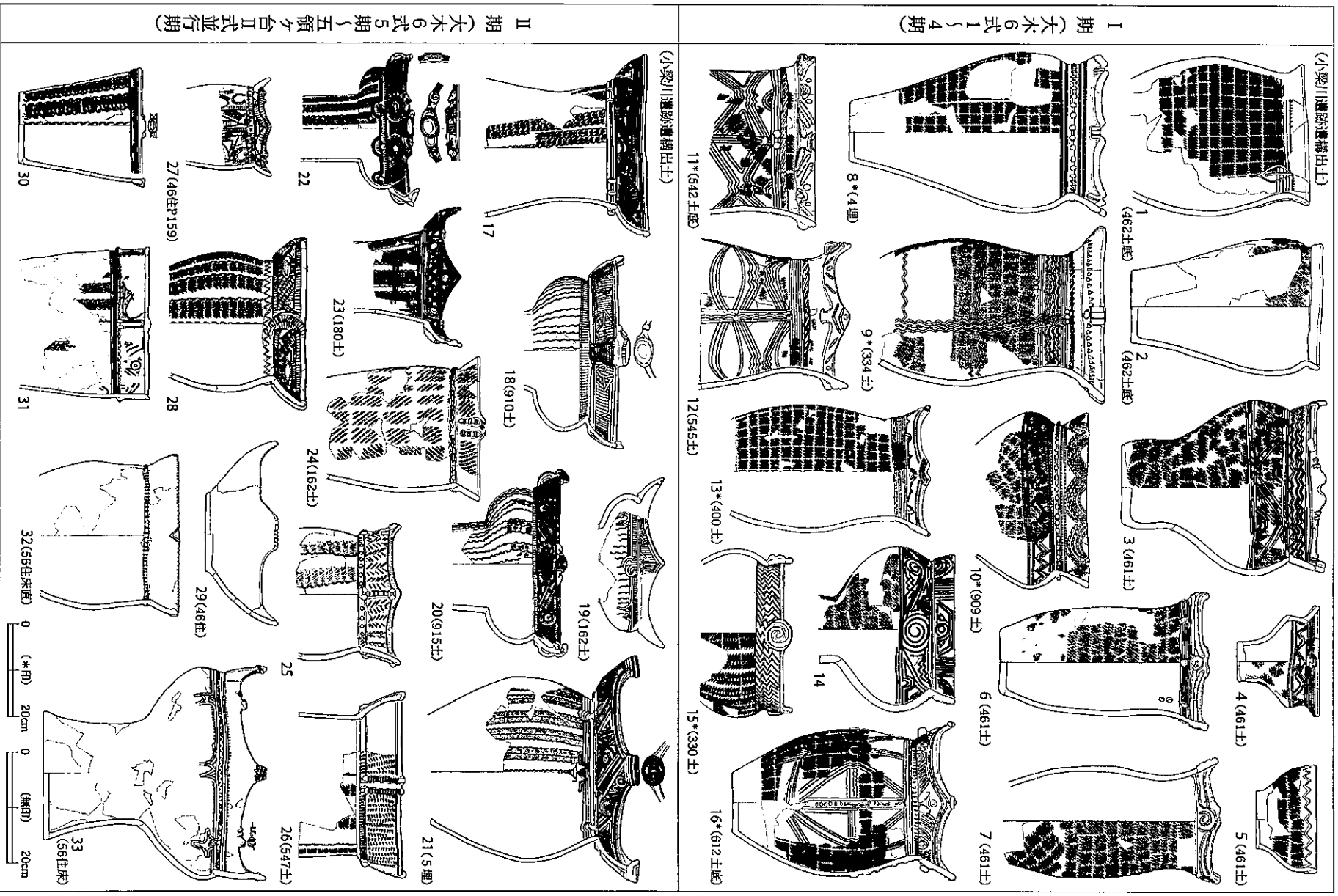


図8 小梁川の遺跡・大梁川の遺跡出土の縄文時代前期末葉~中期末葉の土器 (1)

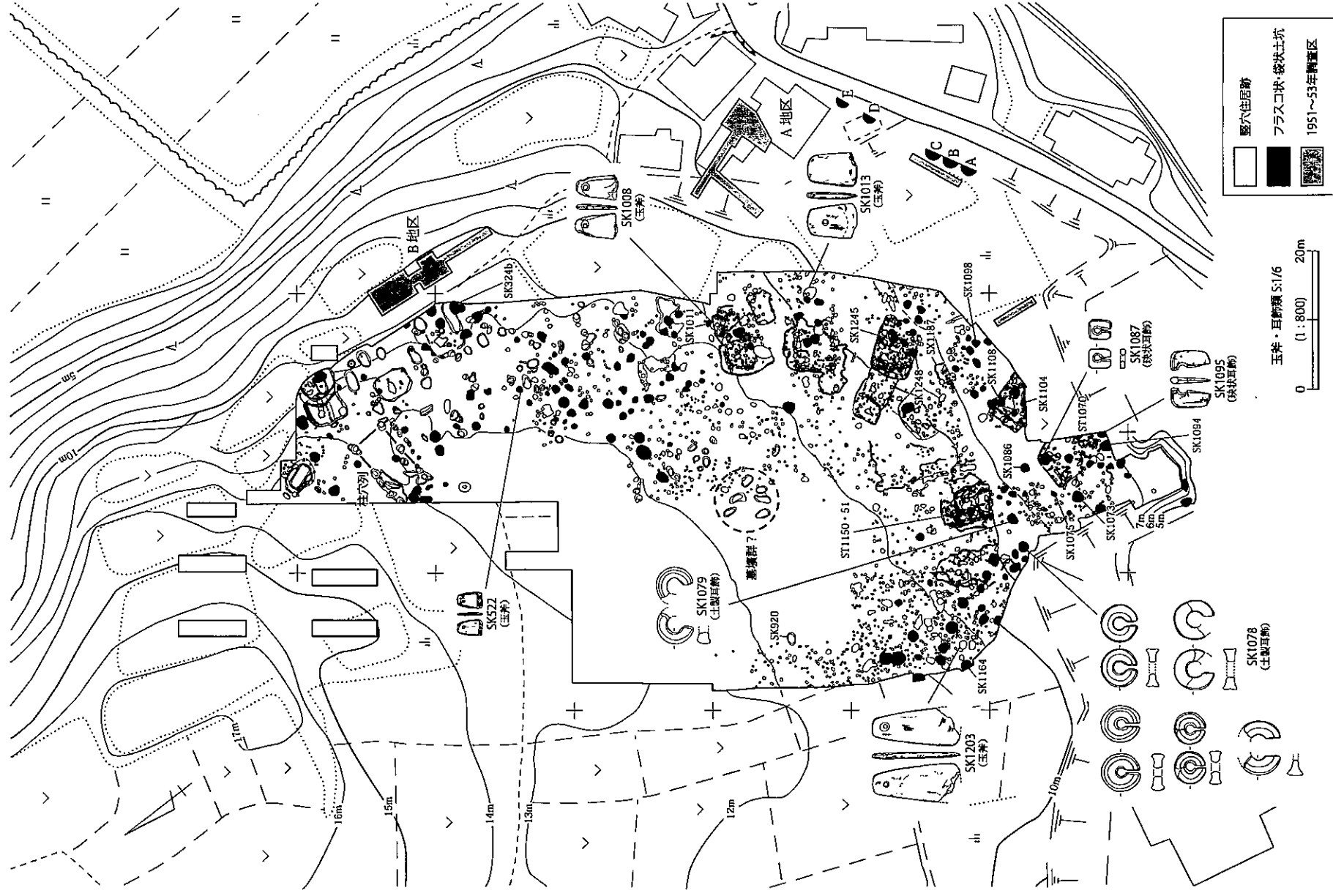
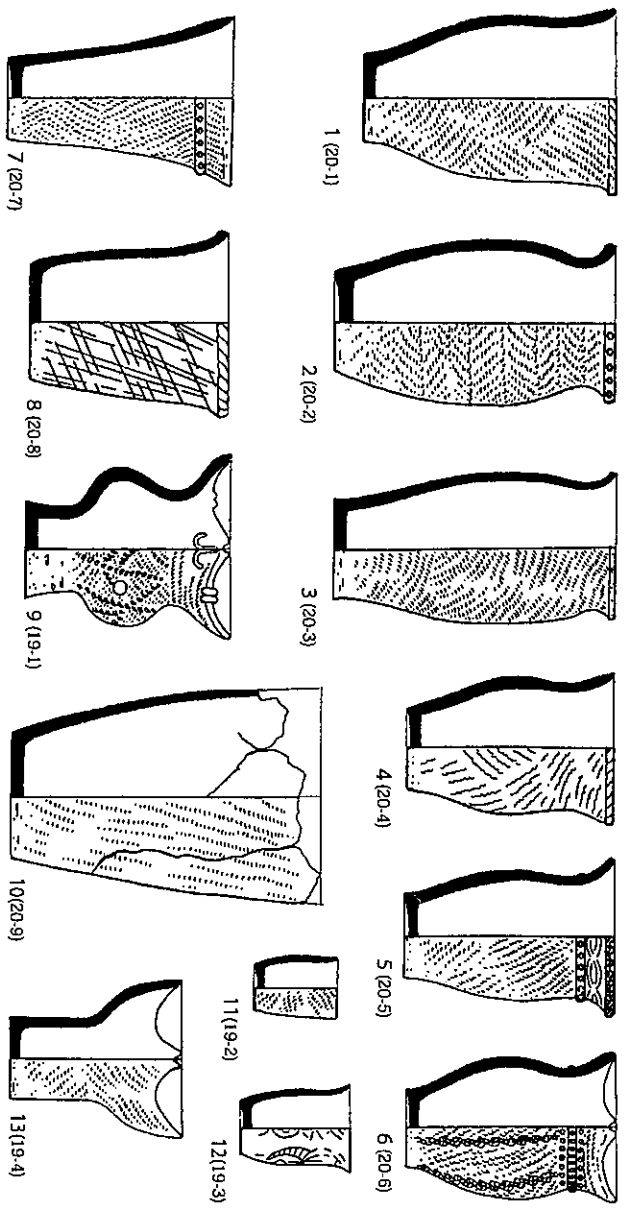
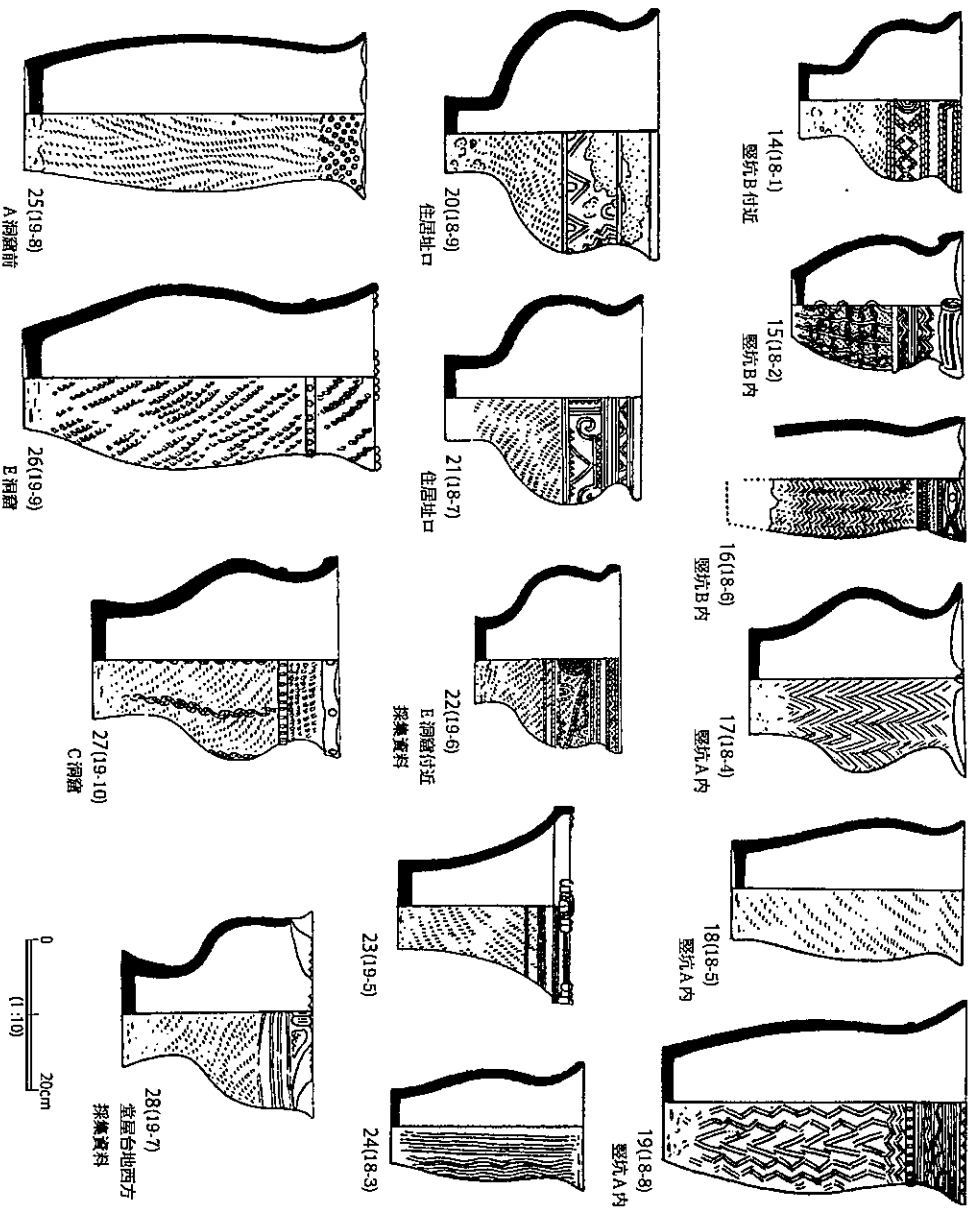


図9 遊佐町吹浦遺跡（大木6式）の集落構成

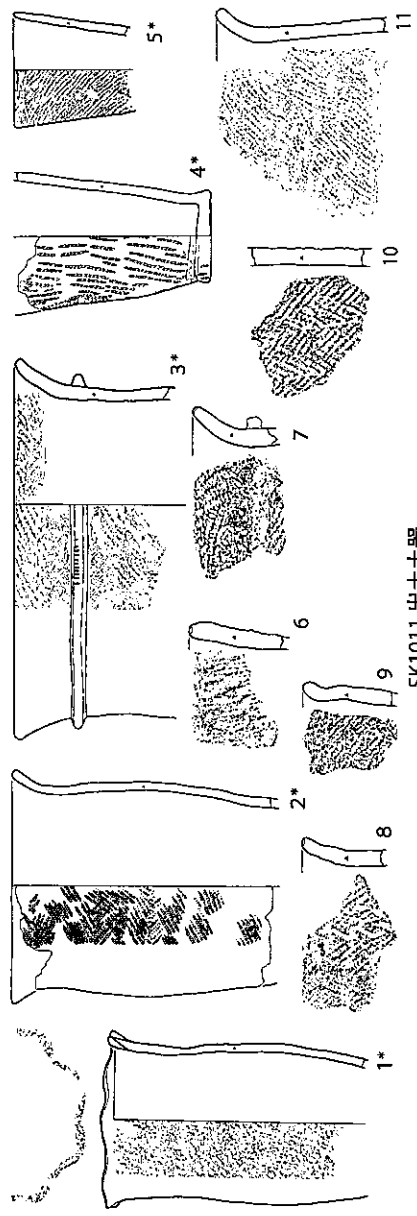


B地区出土土器 (1951～53年調査)

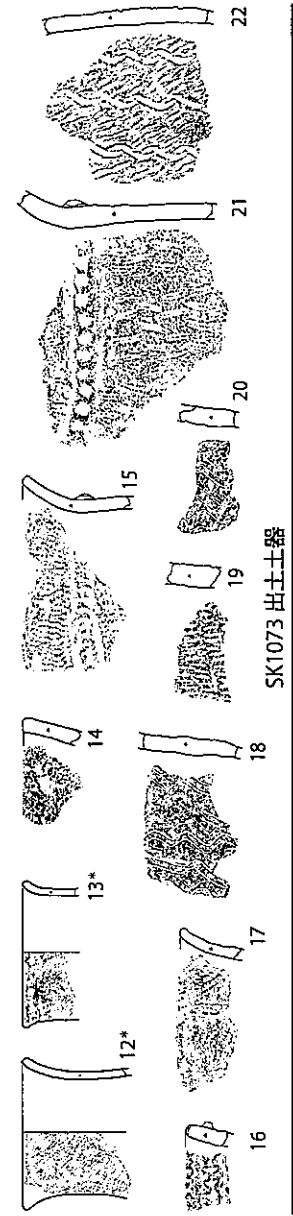


A地区出土土器 (1951～53年調査)

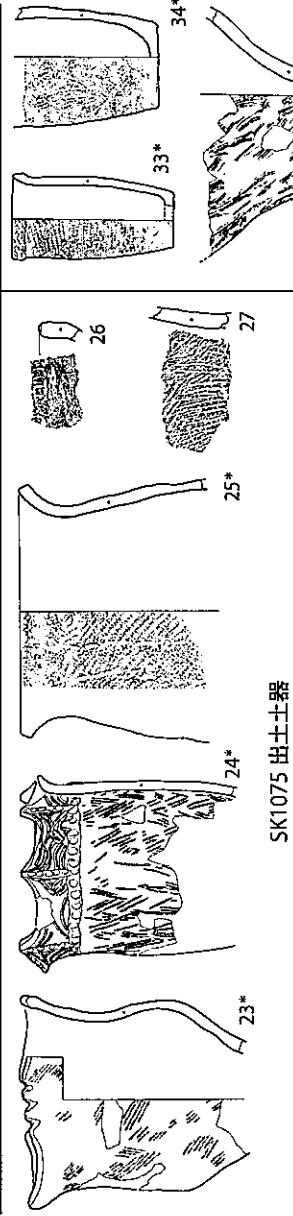
図 10 吹浦遺跡 1951～53年調査 A・B地区出土土器



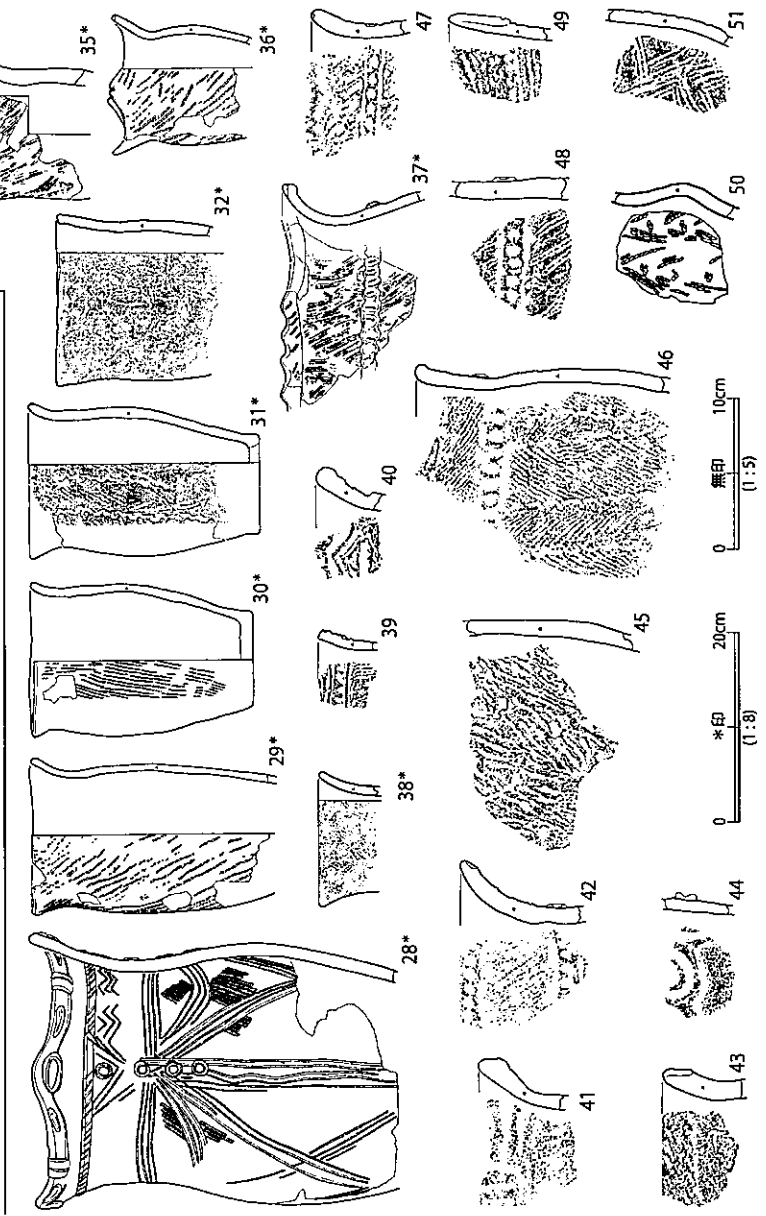
SK1011 出土土器



SK1073 出土土器



SK1075 出土土器



SK1086 出土土器

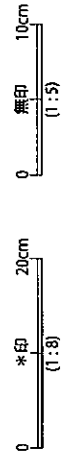
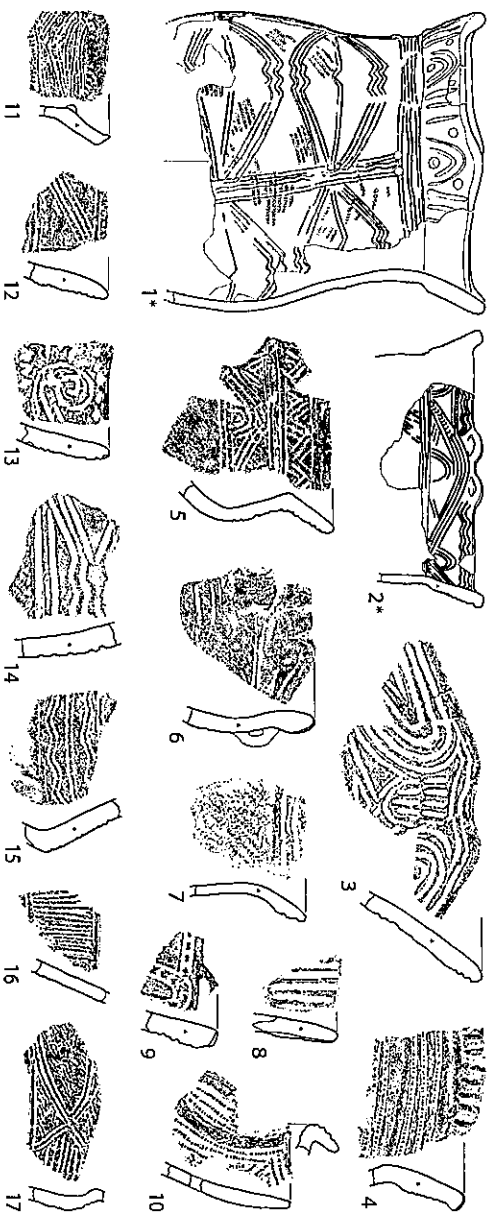
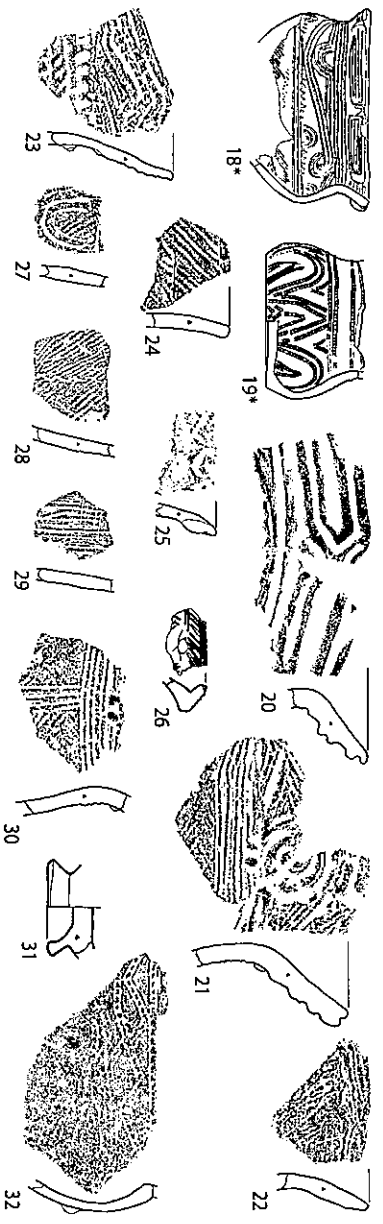


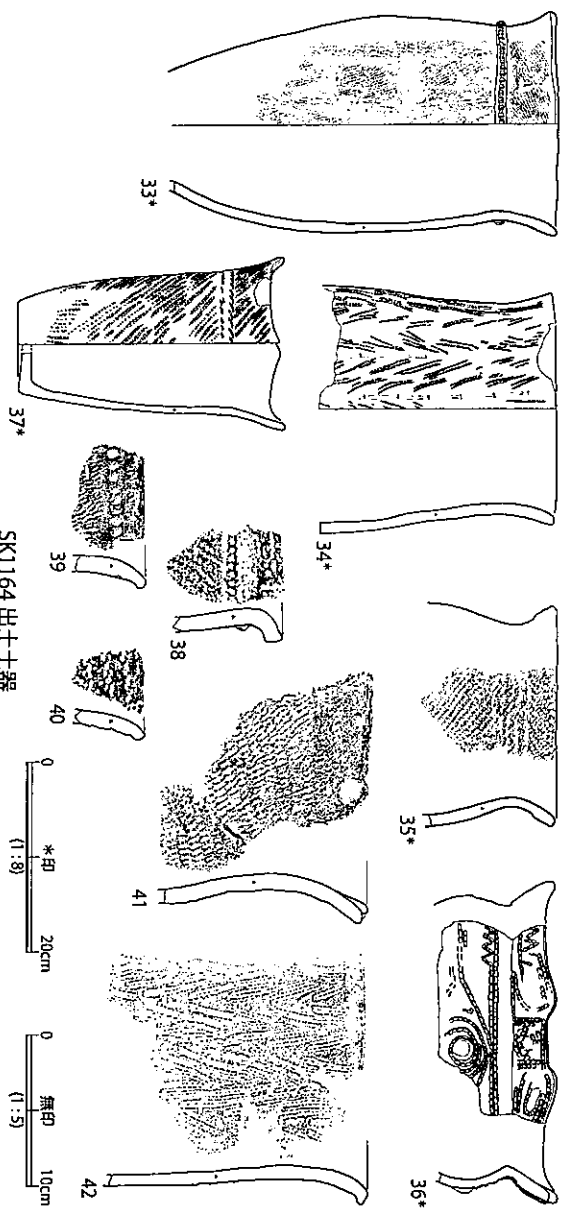
图 11 山形県吹浦遺跡出土土器 (古段階) (1)



SK1098 出土土器

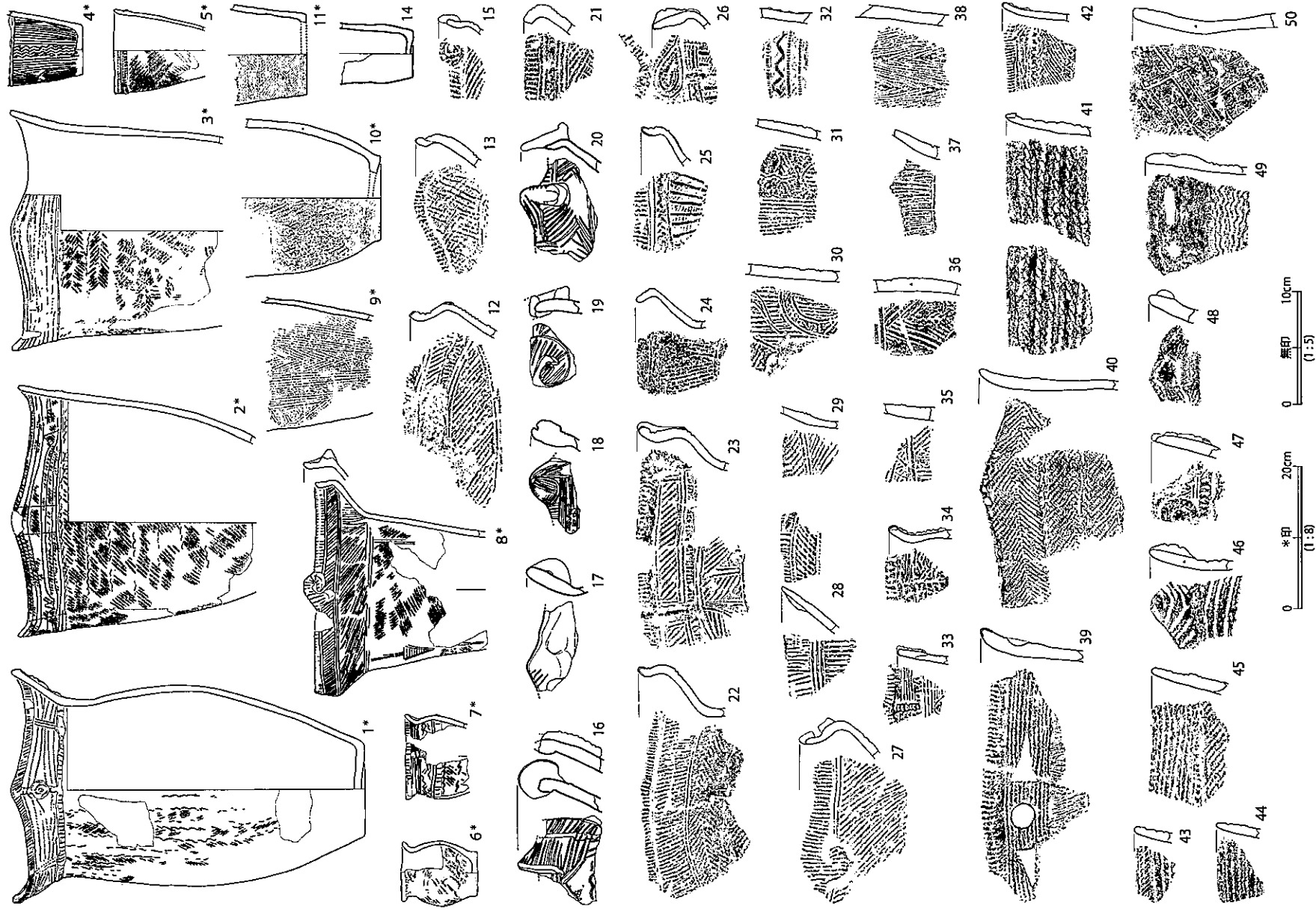


SK1104 出土土器



SK1164 出土土器

図 12 山形県吹浦遺跡出土土器 (中段階) (1)



SK1079 出土器

图 13 山形県吹浦遺跡出土土器 (新段階) (1)

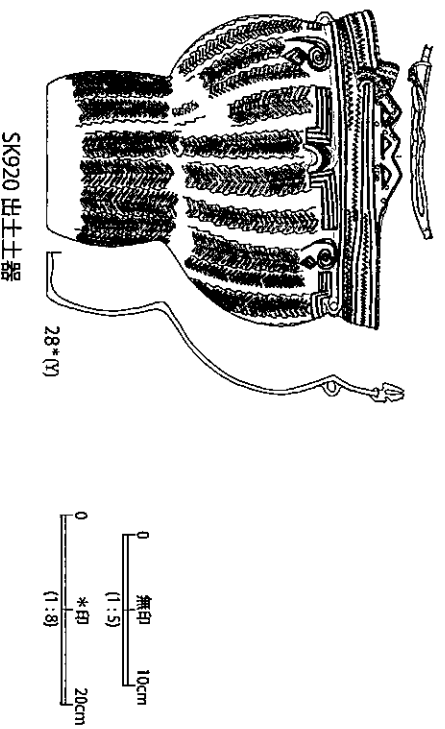
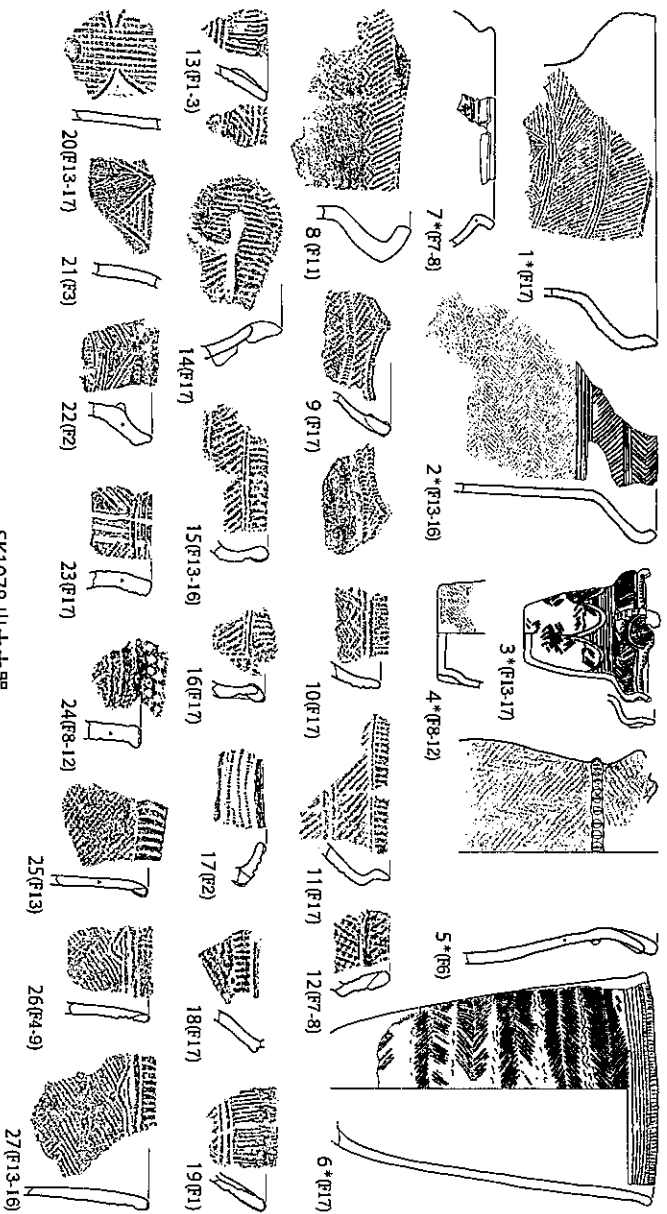


図 14 山形吹浦遺跡出土土器 (新段階) (2)

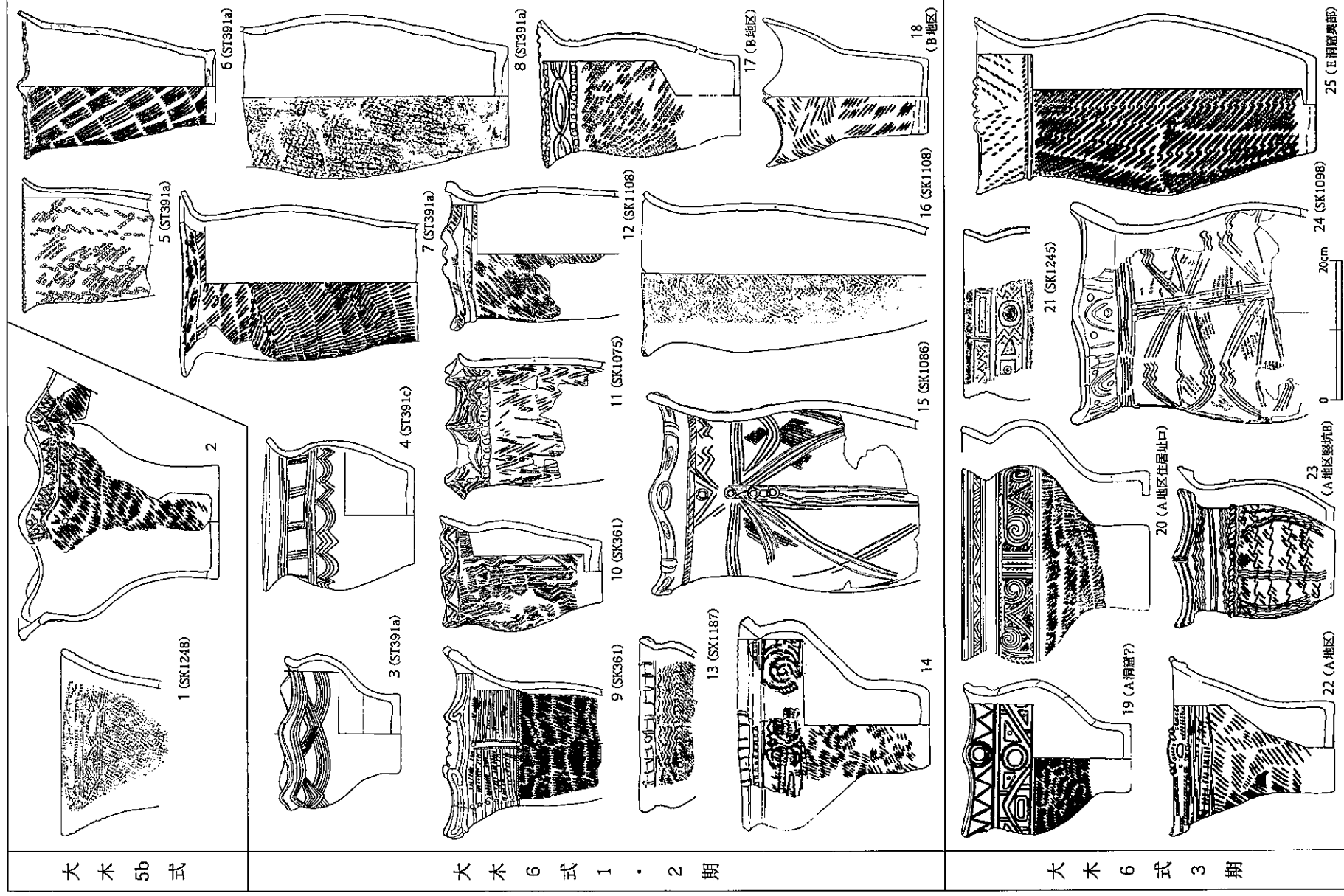
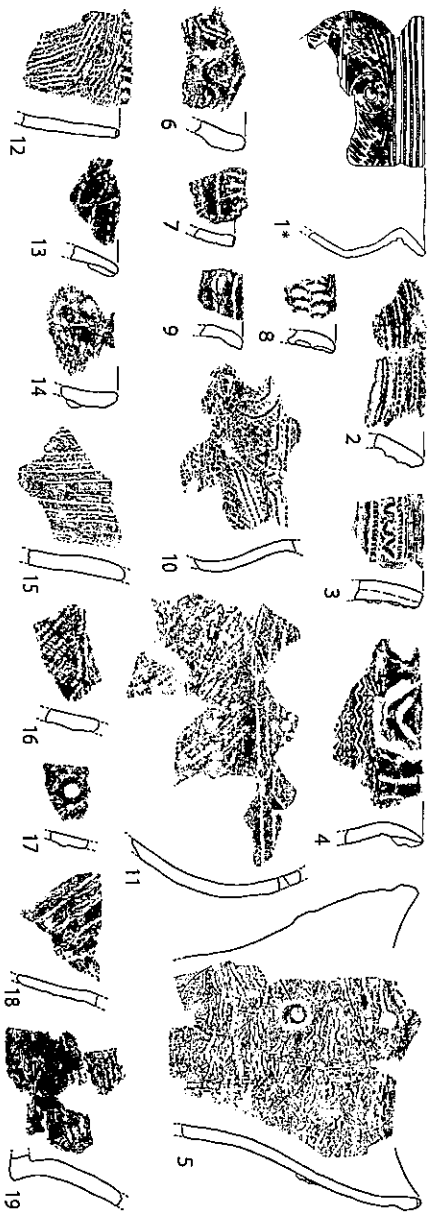
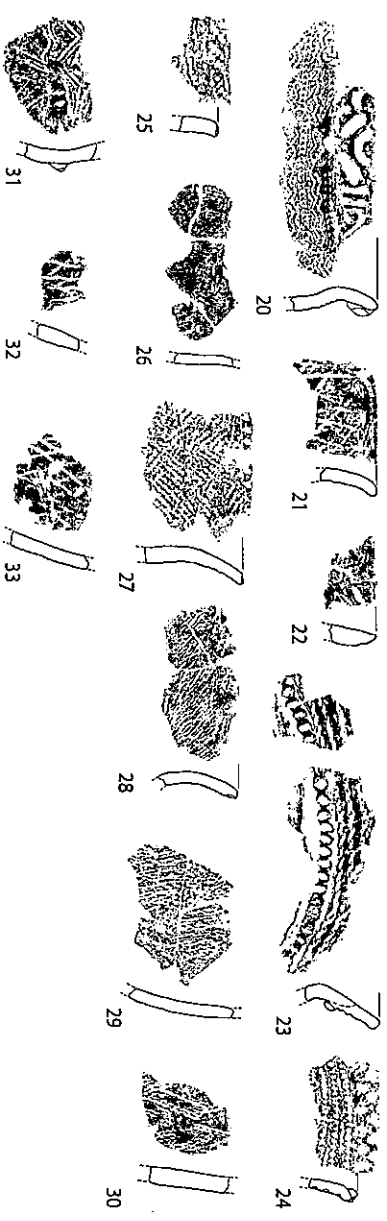


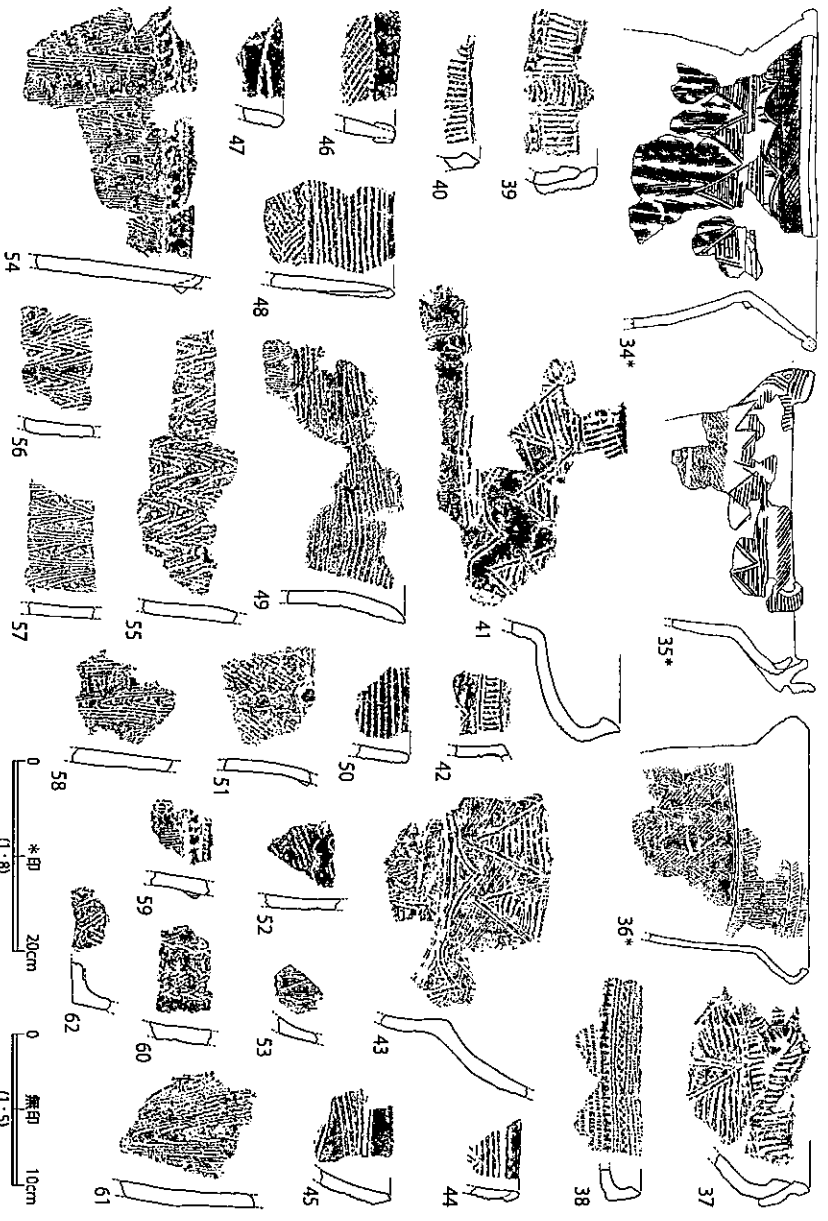
図15 庄内平野（吹浦遺跡）における縄文前期末葉の土器変遷図



ST1出土土器



SX19出土土器



ST2出土土器

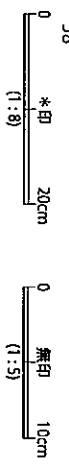


図 16 山形県酒田市船見沢遺跡出土土器



図 17 山形盆地の地形分類と縄文前期の遺跡分布

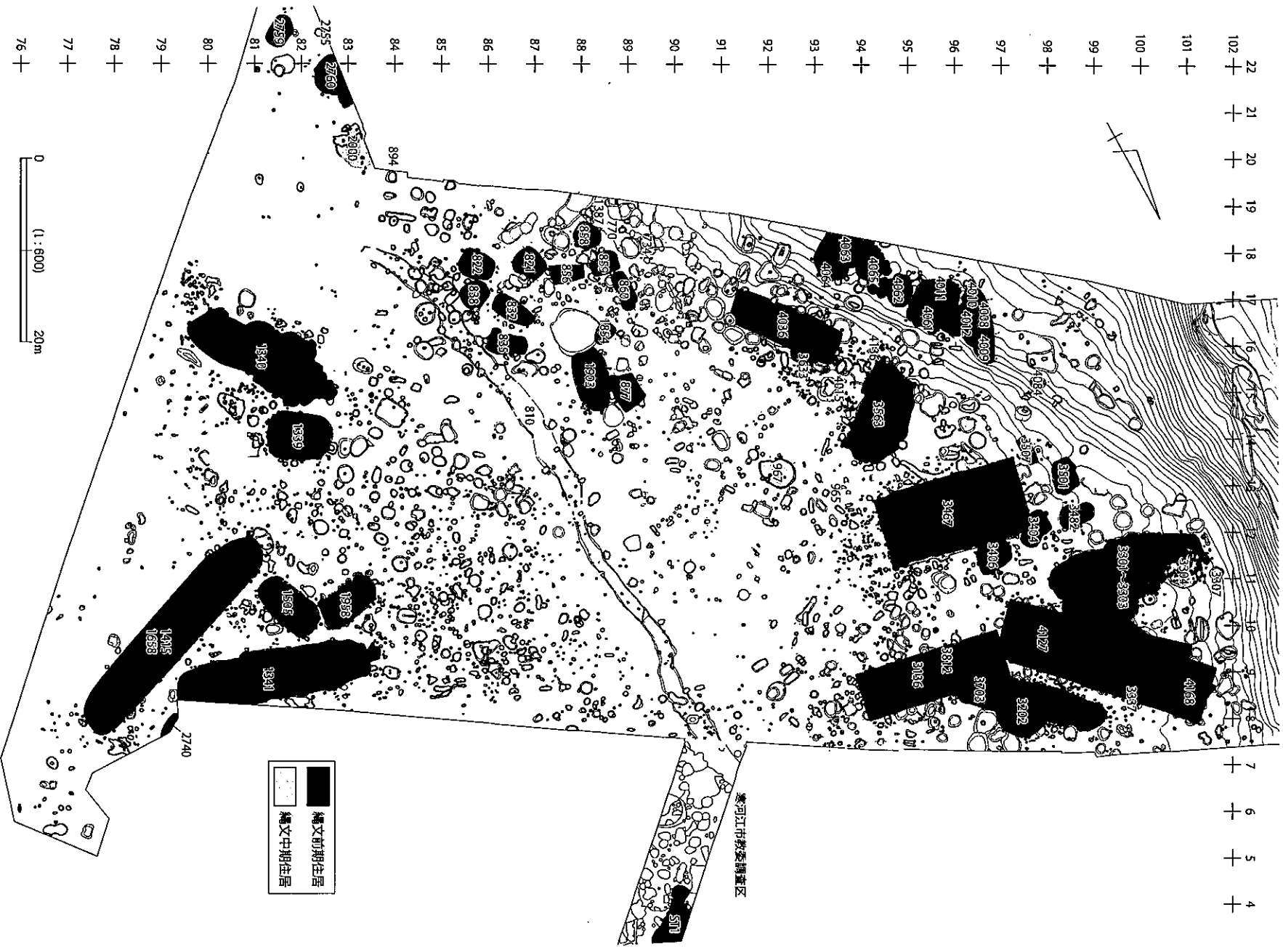


図 18 山形県寒河江市高瀬山遺跡の集落構成

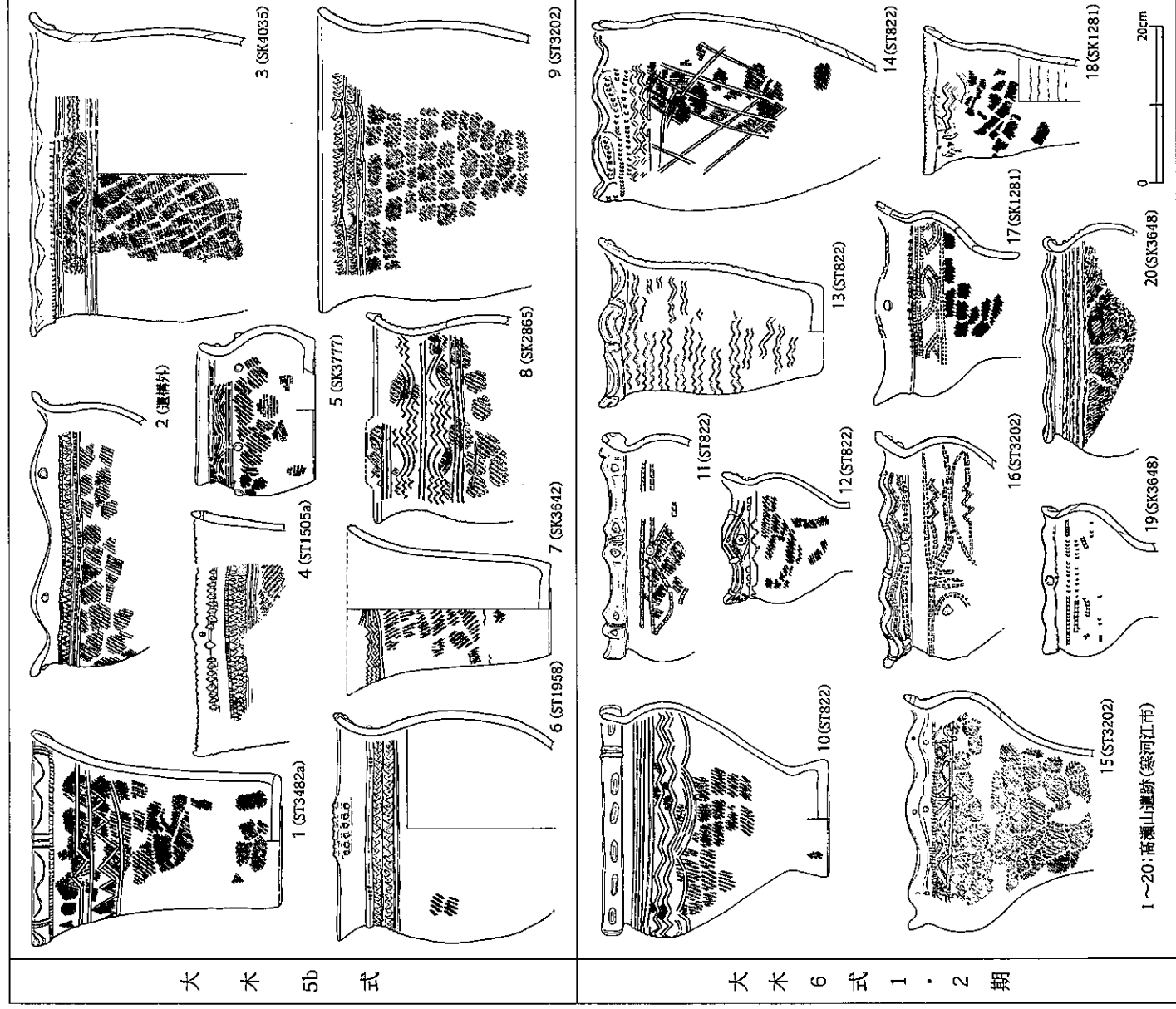


図19 山形盆地における縄文前期末葉の土器変遷図 (1)

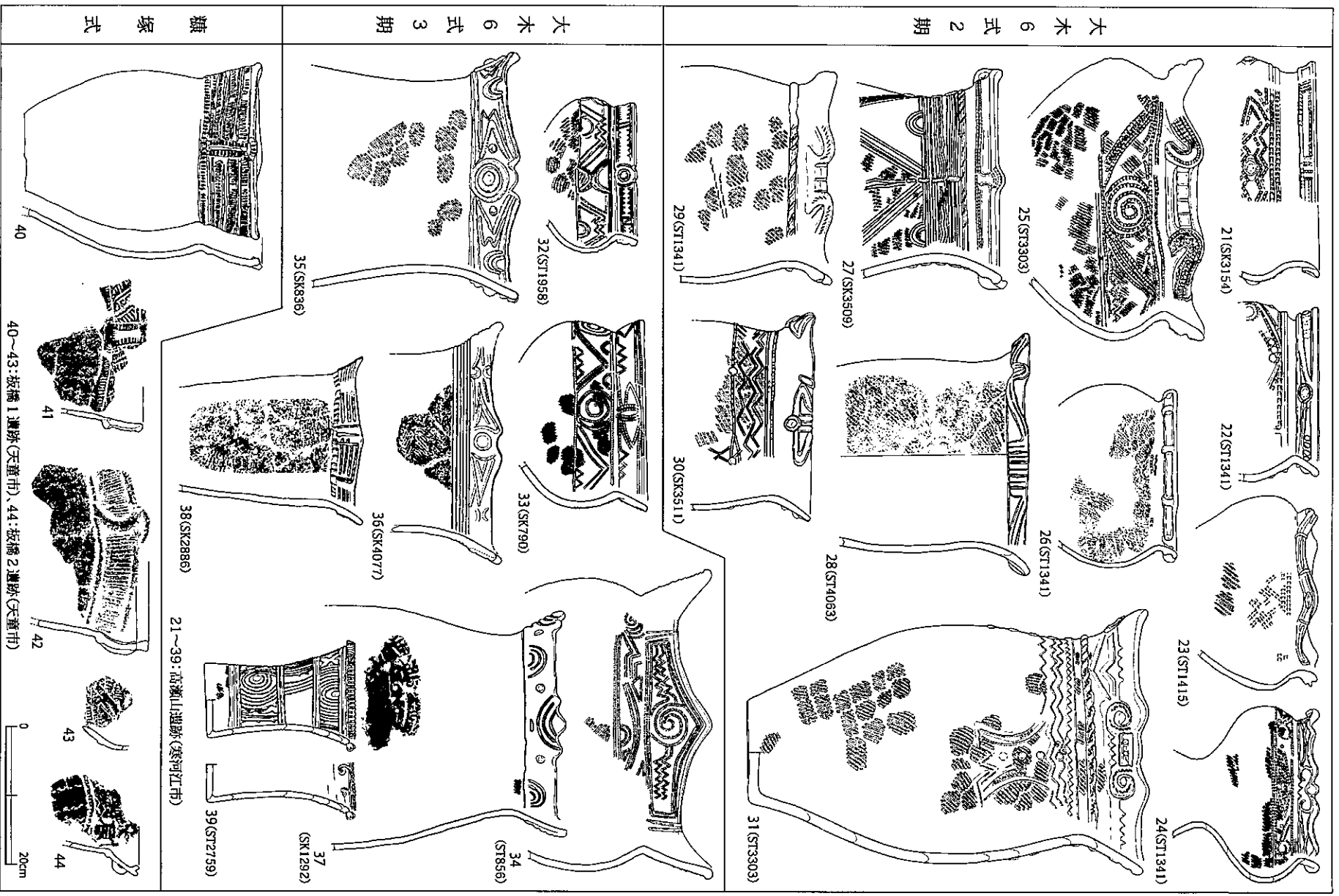


図20 山形盆地における縄文前期末葉の土器変遷図 (2)

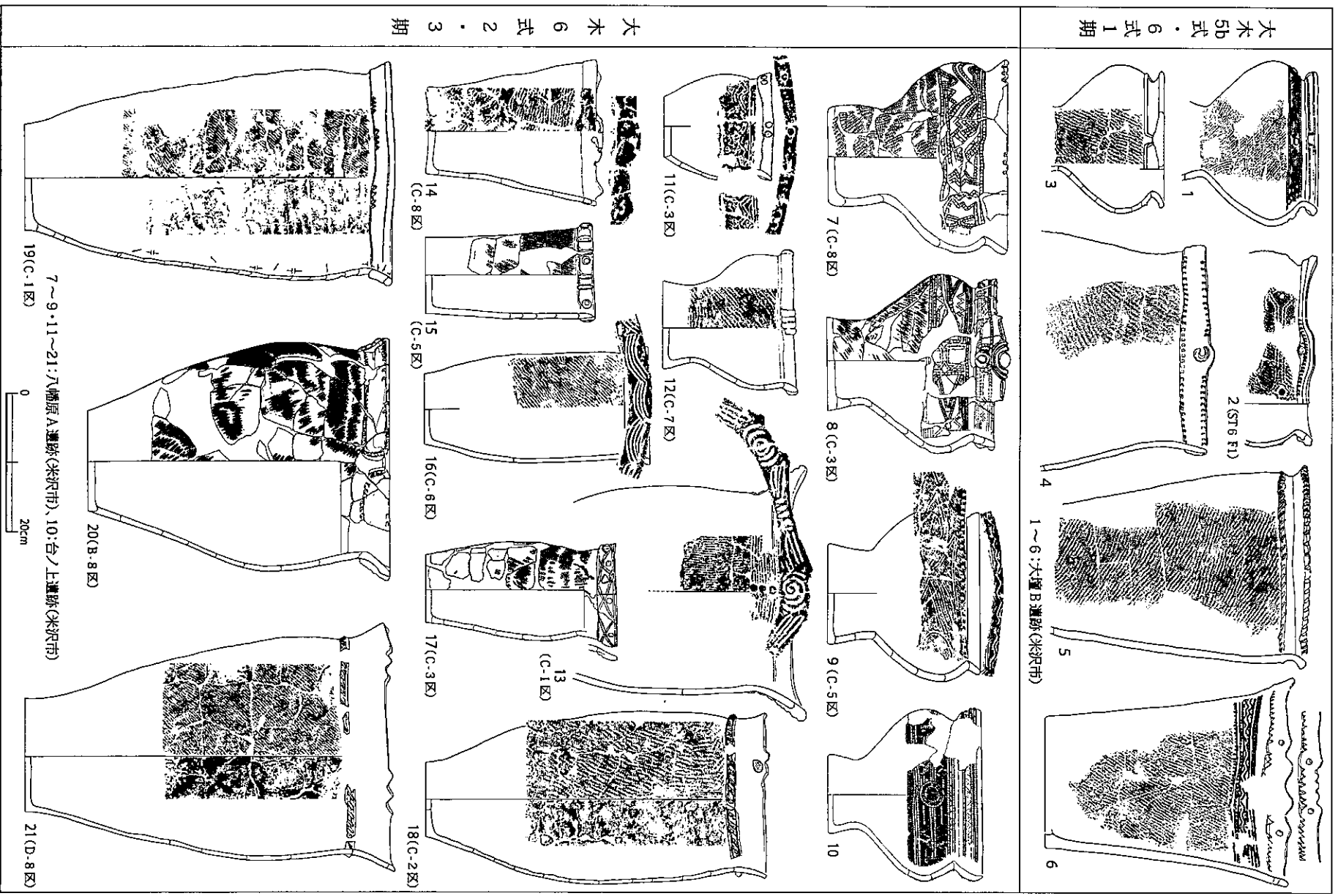


図22 米沢盆地における縄文前期末葉の土器変遷図

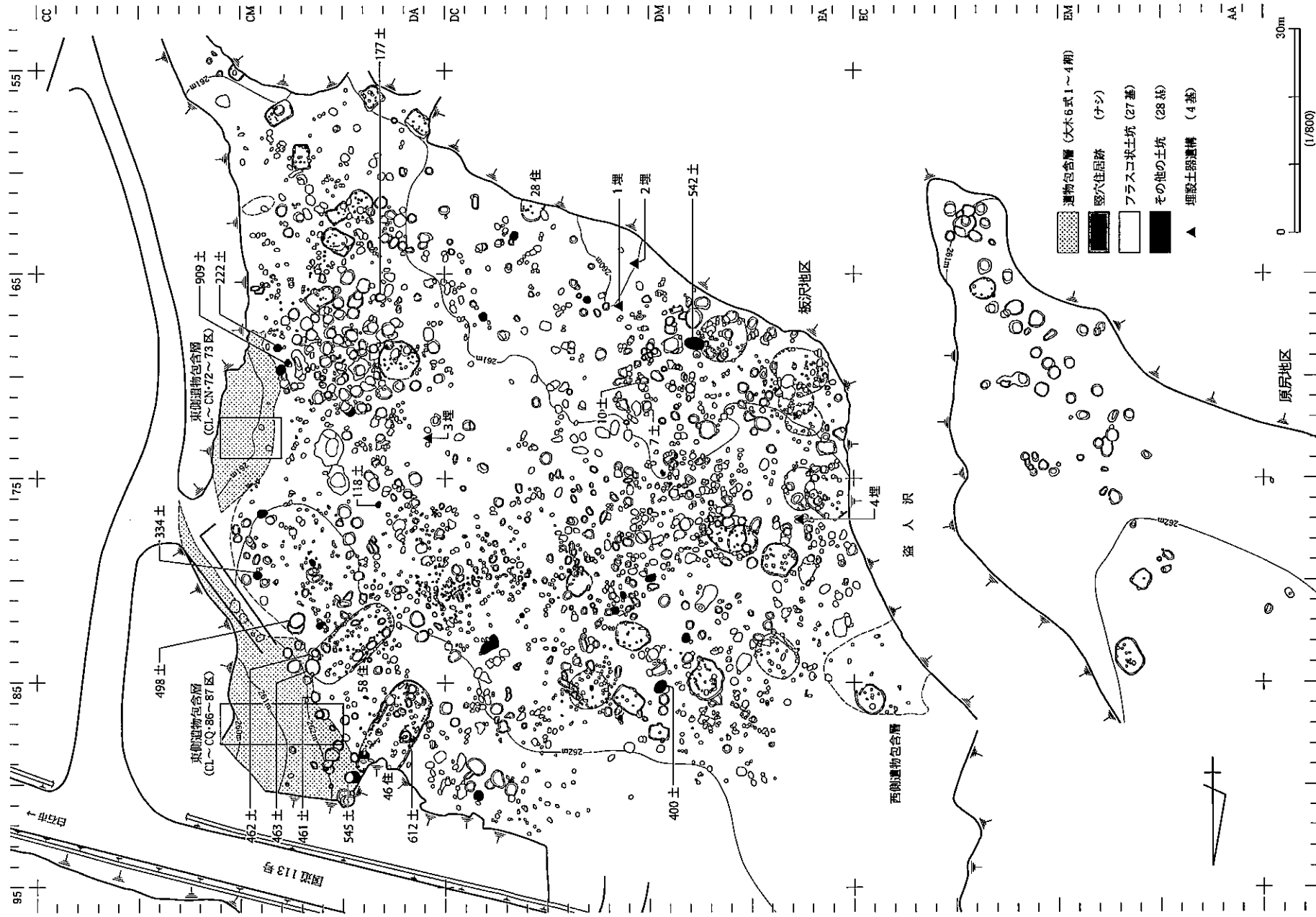


図23 小梁川遺跡1期(大木6式1期~4期)の遺構配置図

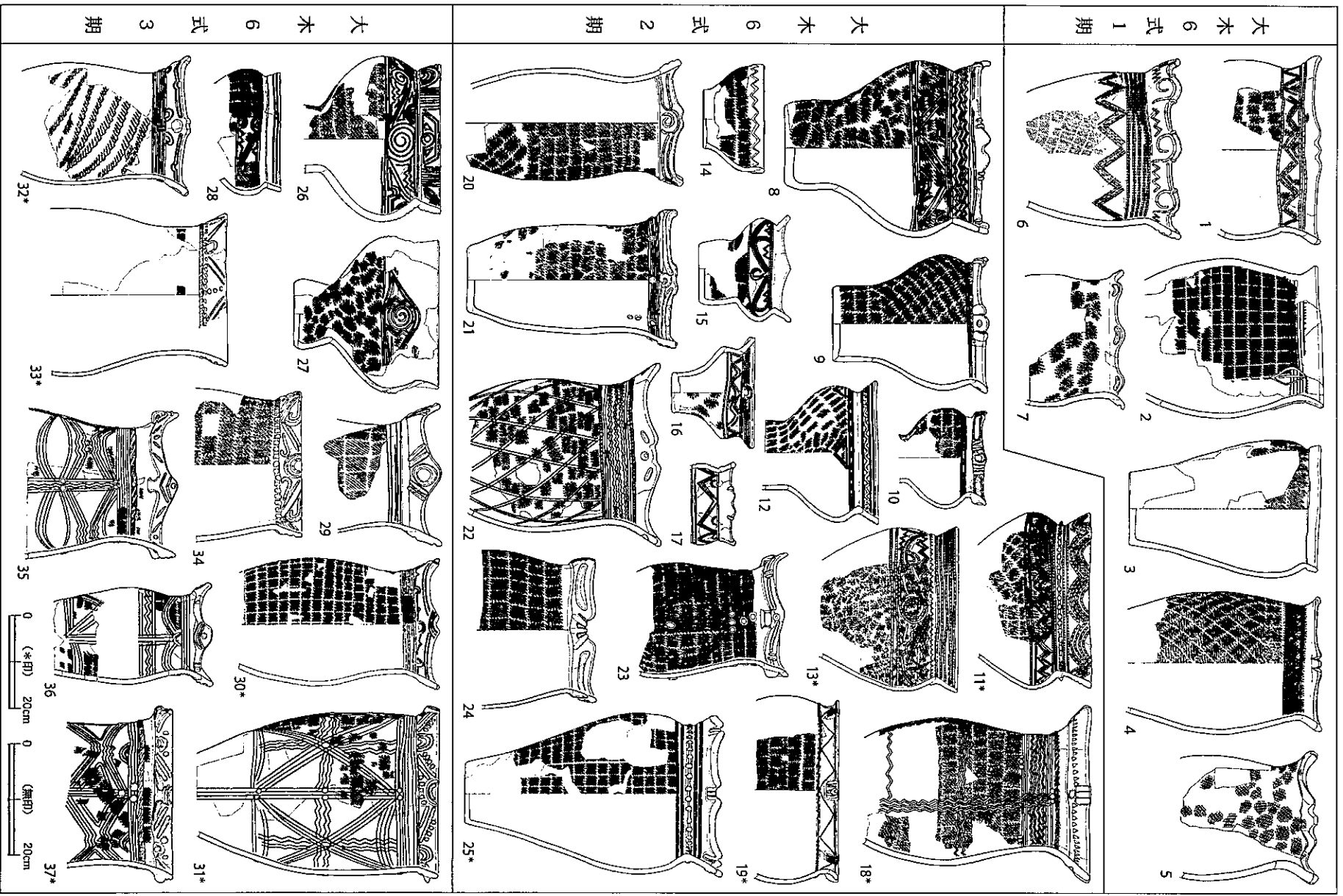


図 24 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡における縄文時代前期末葉土器変遷図 (1)

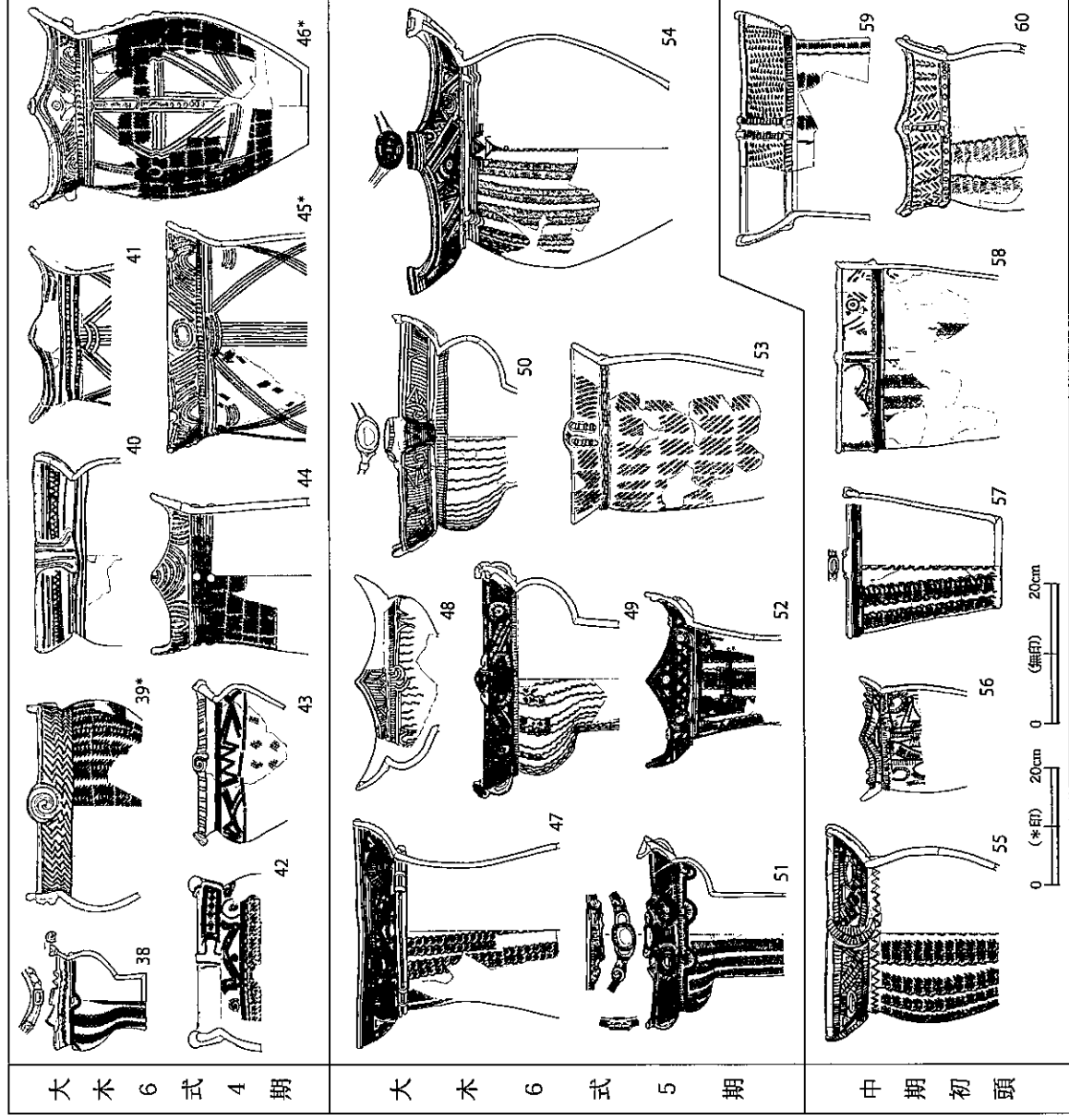


图 25 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡における縄文時代前期末葉土器変遷図 (2)

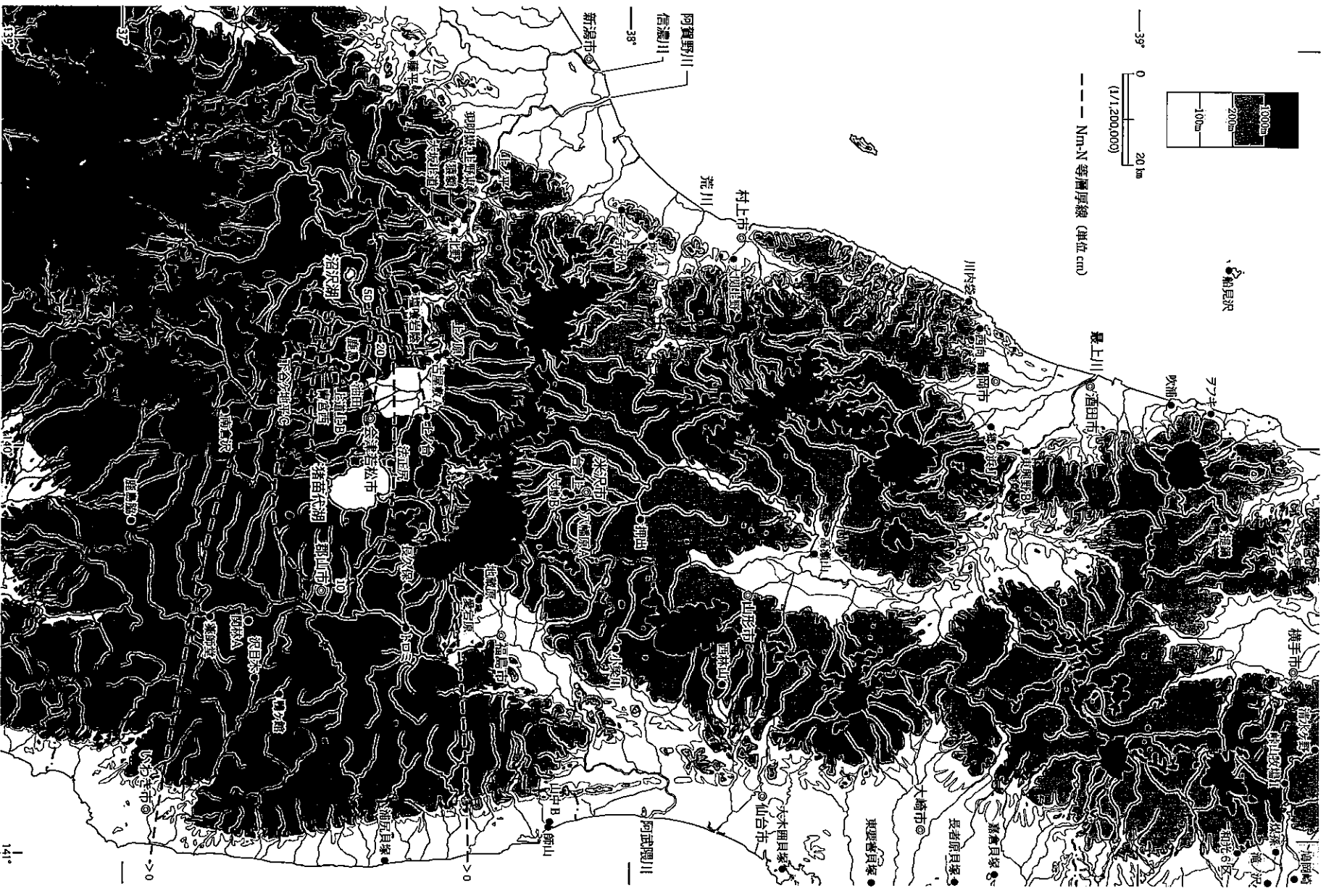


図 26 東北中・南部の縄文時代前期末葉～中期初頭の主要遺跡並びに関連遺跡位置図

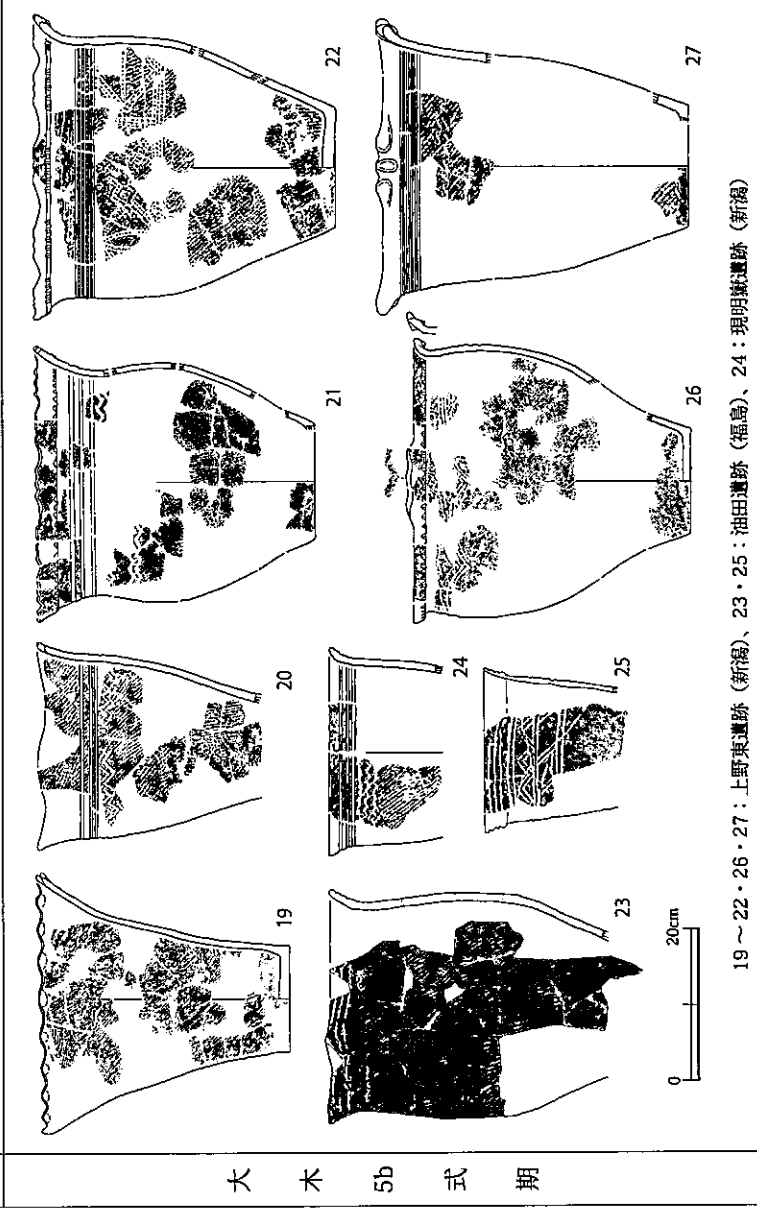
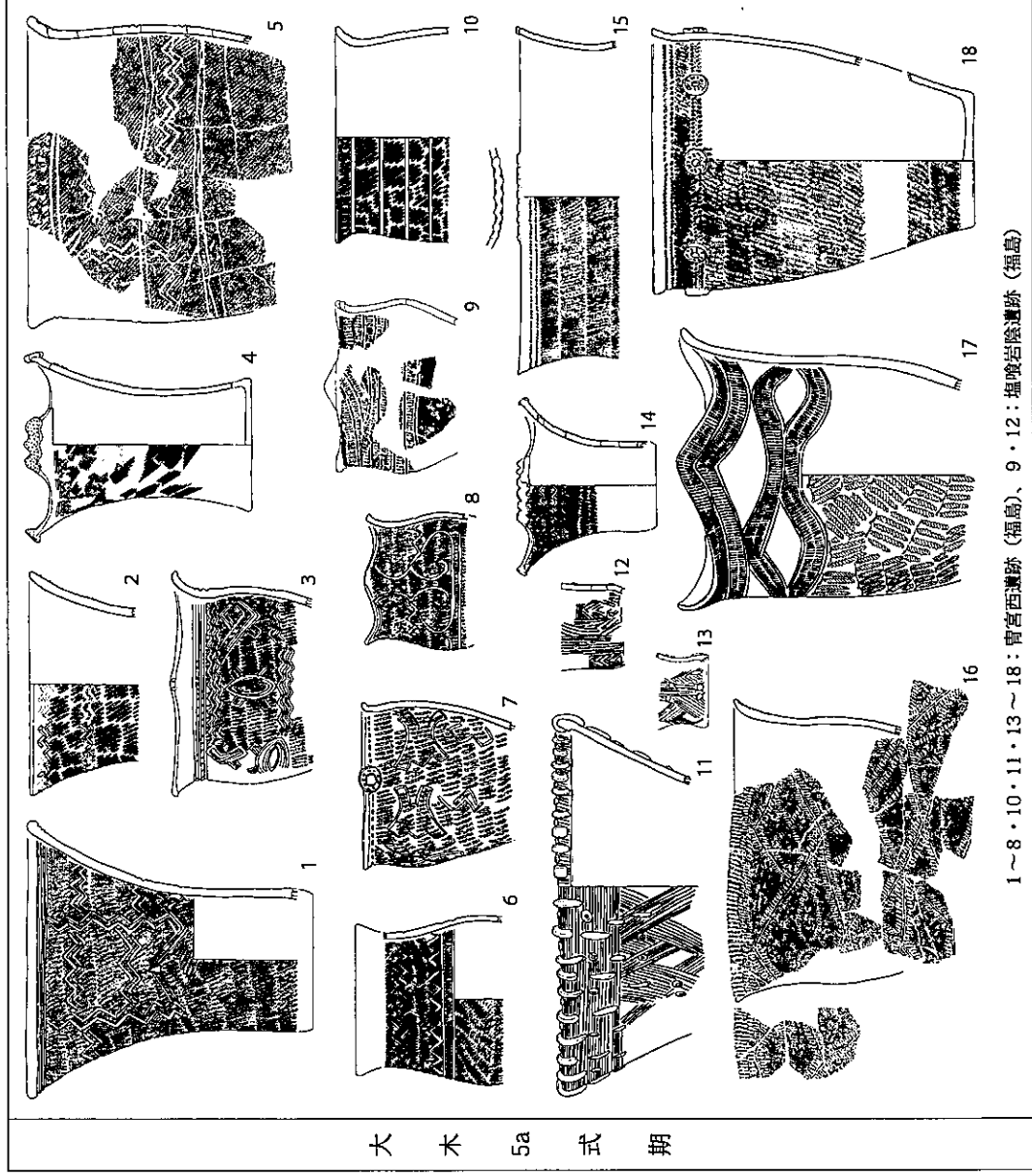


図 27 会津地方・阿賀野川流域における縄文時代前期末葉土器変遷図 (1)

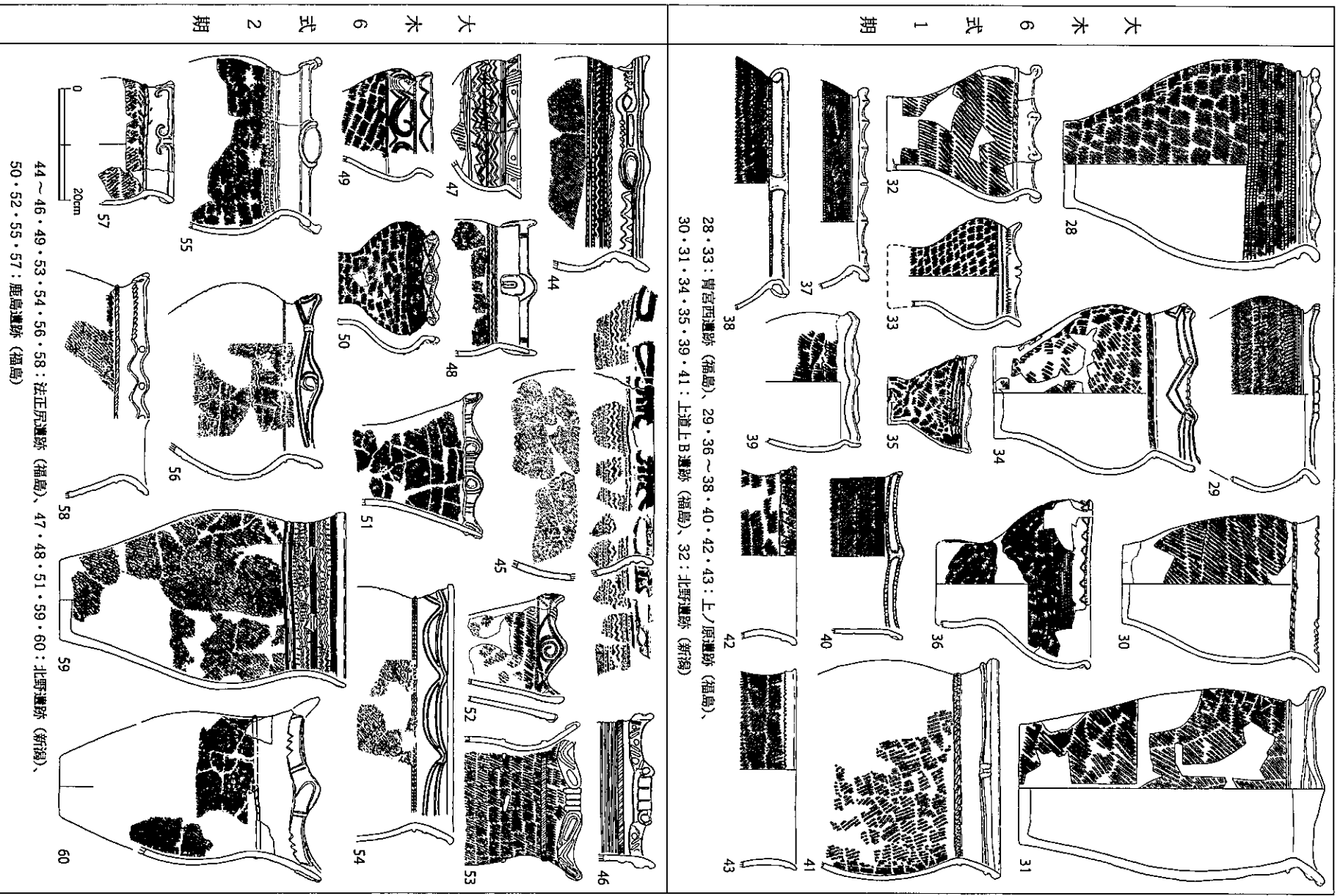


図 28 会津地方・阿賀野川流域における縄文時代前期末葉土器変遷図（2）

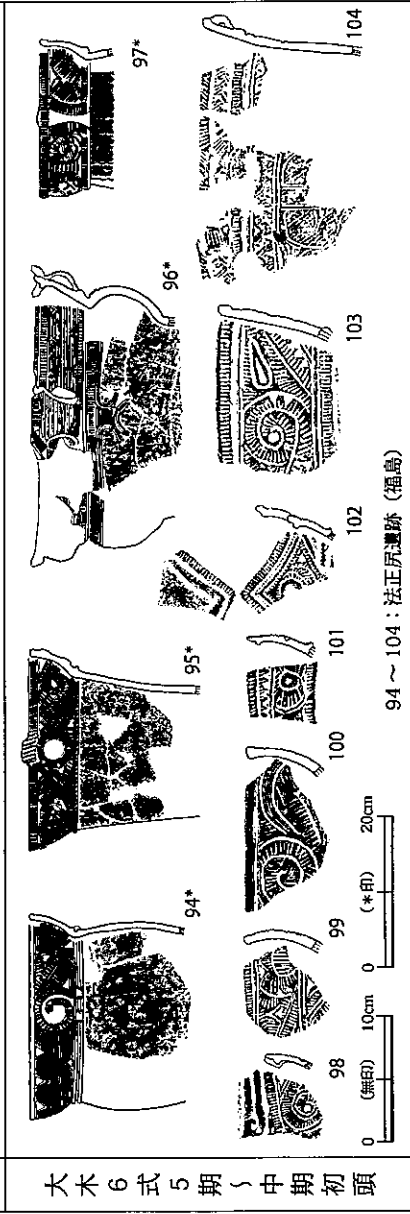
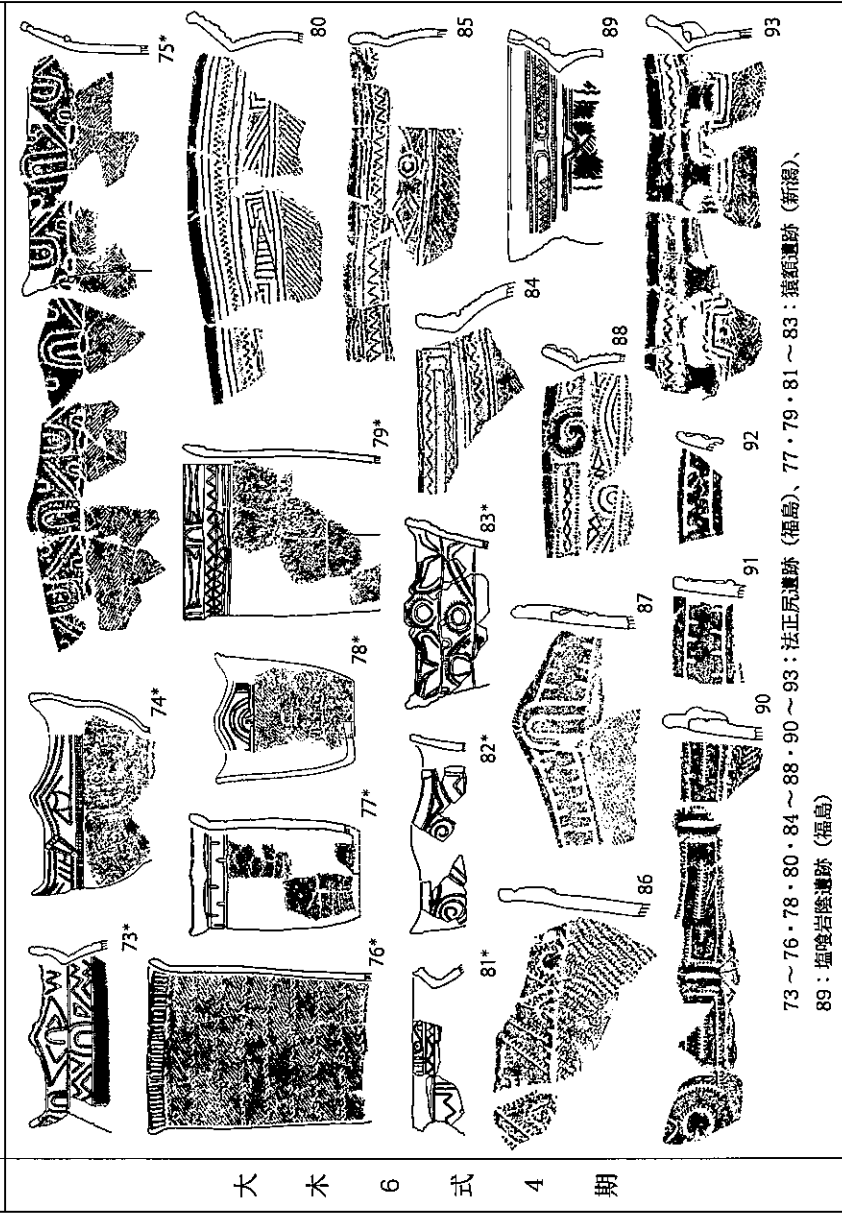
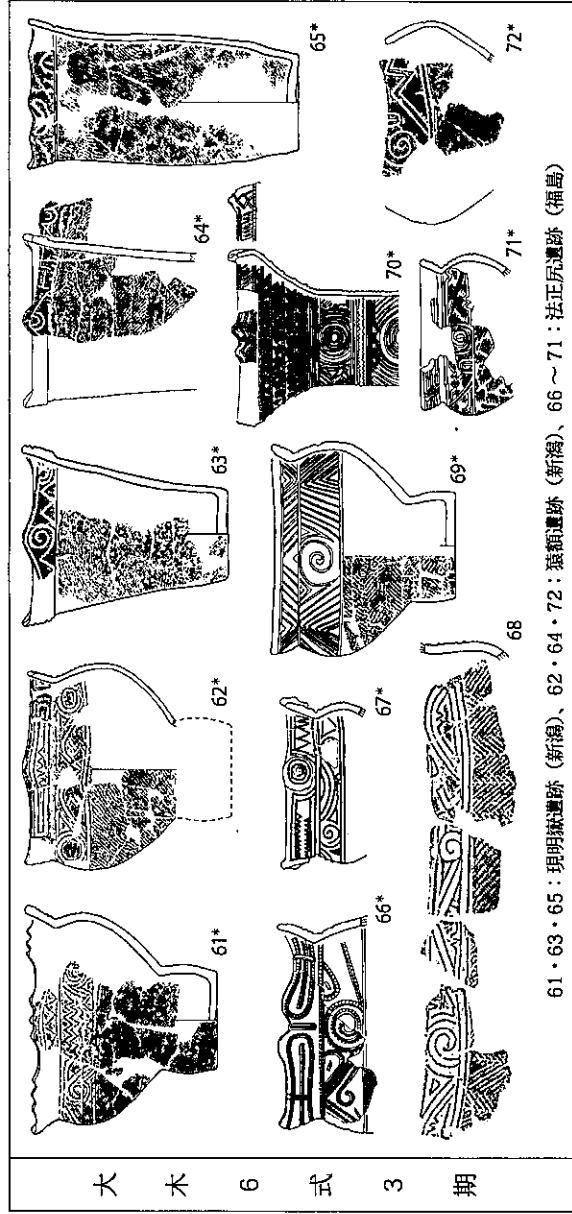


図29 会津地方・阿賀野川流域における縄文時代前期末葉土器変遷図（3）

山形県内の縄文時代前期 後半の土器様相



2018年7月15日
小林 圭一
(山形県埋蔵文化財センター)

縄文時代前期について

- 6,000～5,000年前(較正年代:7,000～5,470年前)
- ヒゼンカーナル期(気候最温暖期)に相当
- 年平均で現在より1～2℃ほど気温が高く、湿潤な気候
- 海水面が現在より2～3mほど高い→**縄文海進**
- 遊動的な生活様式から定住的な生活様式への転換
- 大規模集落の出現→貯蔵施設の発達・共同墓地の形成
- 多様な形状の土器が製作(繊維を含まない土器の製作)
- 植物資源の高度な利用技術の確立(道具類、食糧)
- 装身具類の発達(耳飾り、垂飾、漆製櫛など)
- 温暖な気候を背景に、豊かな安定した生活が想定される
- **縄文文化の基本的骨格が形成された時期**

山形県の地形区分図・ 最上川流域の地形分類概念図

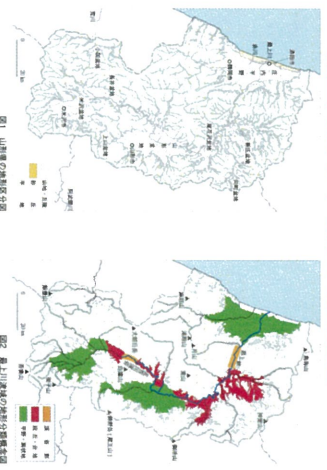


図1 山形県の地勢区分図
図2 最上川流域の地形分類概念図

山形県内の縄文前期 遺跡分布図



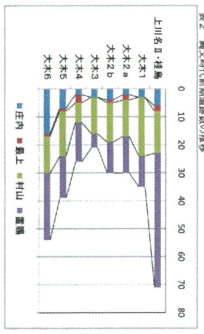
図3 山形県内の縄文前期遺跡の分布状況

縄文時代前期の遺跡数

表1 縄文時代前期の遺跡数

遺跡名	庄内	最上	村山	東部	合計
上川名Ⅱ式期	3	0	21	11	35
大木1式期	3	2	14	12	31
大木2式期	4	1	14	11	30
大木3式期	3	0	13	5	21
大木4式期	1	1	18	11	31
大木5式期	7	1	18	11	37
大木6式期	18	1	13	24	54

表2 縄文時代前期遺跡数の推移



前期の遺跡数推移

山形県内の遺跡分布図

上川名Ⅱ式期

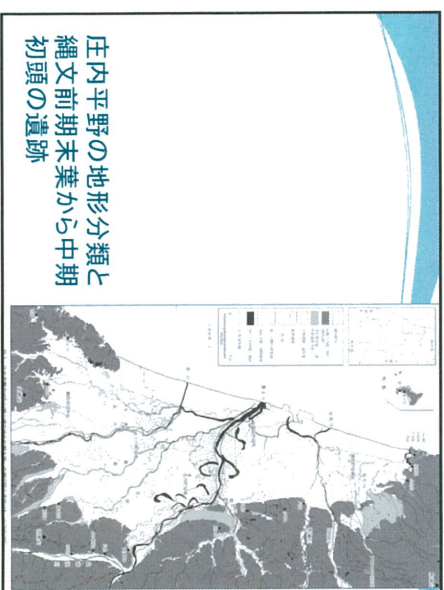
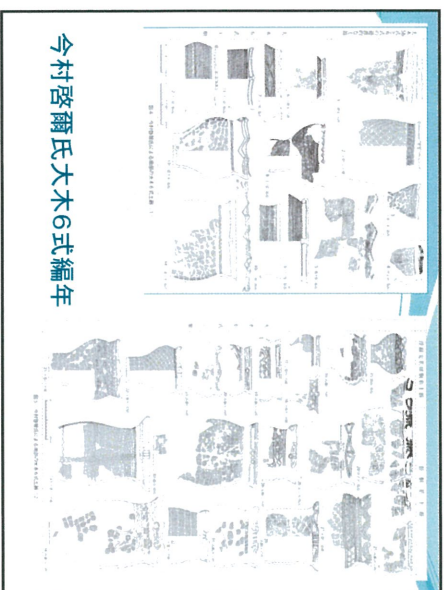


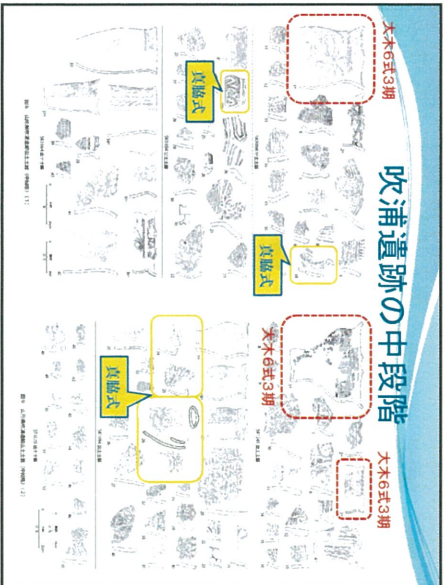
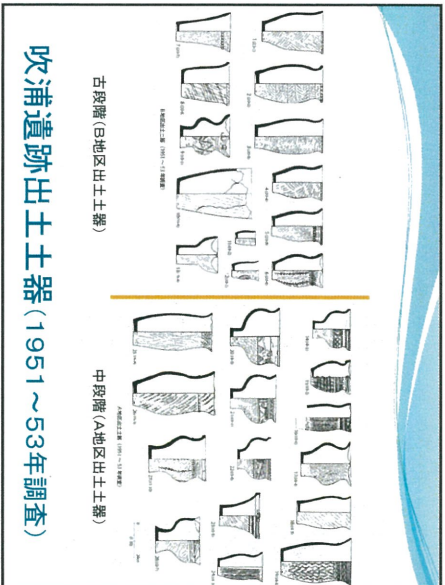
① 山形県内の上川名Ⅱ式期遺跡の分布状況

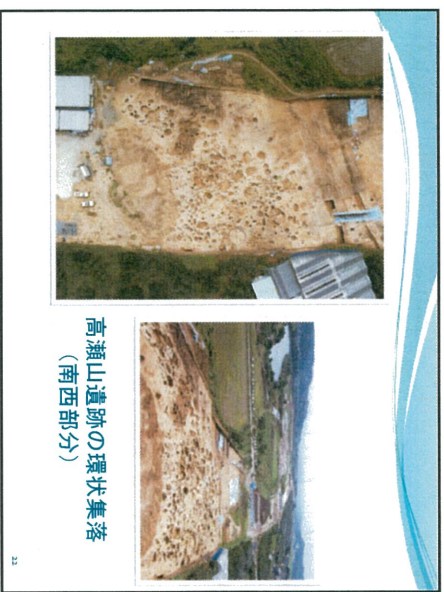
大木1式期



② 山形県内の大木1式期遺跡の分布状況



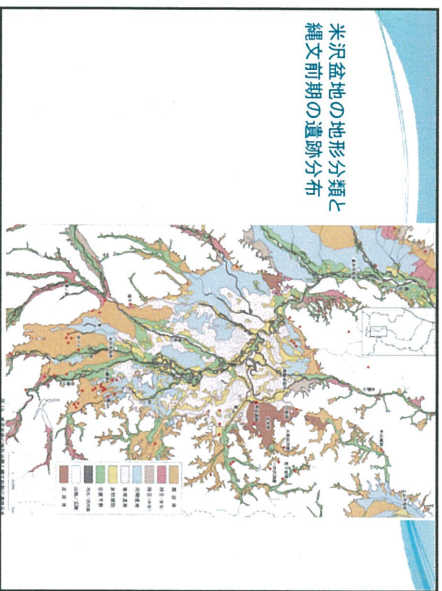






高瀬山遺跡出土大木6式球胴形土器

高瀬山遺跡出土十三善提式銅屋町系土器



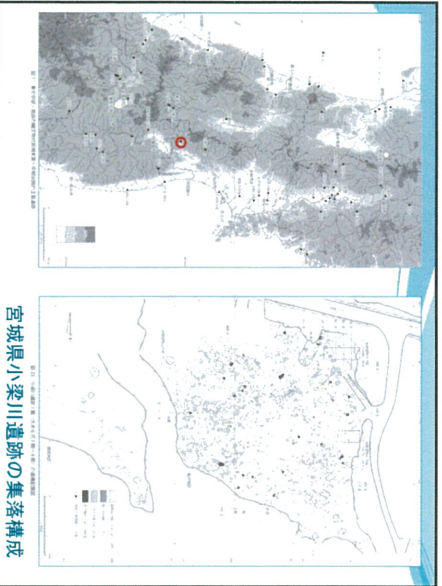
米沢盆地の地形分類と縄文前期の遺跡分布



米沢盆地の縄文前期末葉の土器

山形県内の縄文前期末葉のまとめ

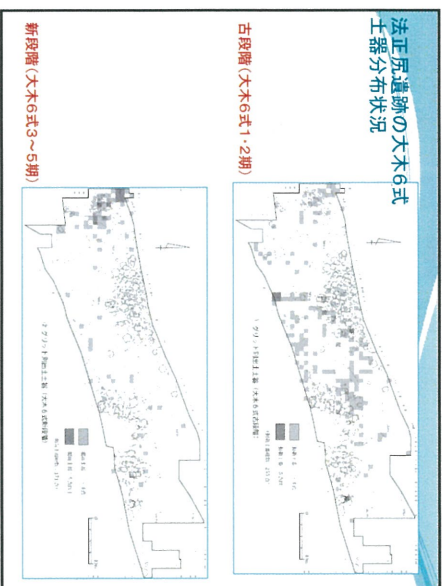
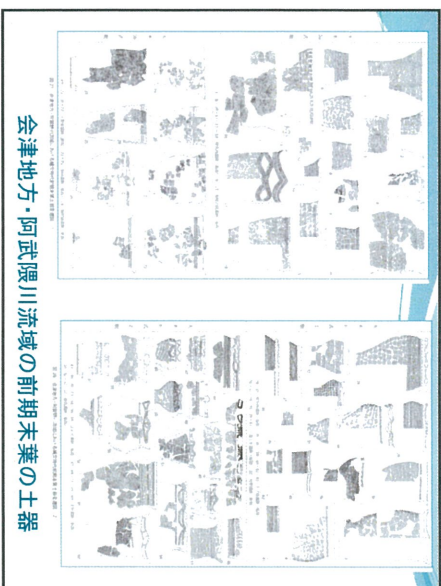
- 日本海沿岸部(庄内地方)
- 大木6式1・2期に円筒下層系が土着化した粗製土器主体
- 大木6式4・5期に圧倒的な北陸系土器の進出(大木6式の撤退)
- 大型フラスコ状土坑は北東北からの影響(集落構成は南東北)
- 山形盆地(最上川中流域)・米沢盆地(同上流域)
- 大木5b式~大木6式3期まで継続するが、大木6式後半の遺跡はほとんど認められない。
- 高瀬山遺跡では「十三善提式銅屋町系の土器」出土。
- 関東の土器の作り手が単身あるいは少数で移り住んで、土器を作ったと推定される。
- 北陸系や円筒下層系の土器は認められない。



宮城県小梁川遺跡の集落構成

小梁川遺跡出土の大木6式土器

- ・大木6式1期~五領ヶ台II a式まで継続(五領ヶ台II b・II c式期不明)
- ・1期(大木6式1~4期)の遺構は土坑と埋設土器(居住施設不明)
- ・II期(大木6式5期~五領ヶ台II c式並行期)に在在系の「藤原系統」土器が出土



- ### 沼沢火山噴火の影響
1. 噴火年代は地質学で紀元前3400年とされているが、紀元前3500年を遡る可能性が高い。
 2. 噴火は大木6式2期と3期の間、または同3期の中で生起。
 3. 福島県会津地方と新潟県北部に影響を及ぼす。
 4. 大木6式1～2期は日本海沿岸部に会津系土器が進出→同3期には北陸系真臘式主体に変化(会津方面の影響力の低下)→北陸集団の北上との関連性
 5. 会津地方では大木6式後半の遺跡が激減。
 6. 会津地方に特徴的な土器が出現(3期:長胴形が消失し直胴形や円筒形主体、4期:沈線文の側縁に刺突列を加えた個性的な土器)。
 7. 広汎な近似性を示す土器が多数出土(4期:器重ねシグサケ文、5期:椅子形貼付文)→内陸部通じた強固な交流関係。

- ### 北陸集団の北上の可能性
- 日本海沿岸の前期末葉は北陸の影響が顕著→北陸集団の移住があったのか。
 - 沼沢火山の噴火と北陸の影響の顕在化が年代対照。
 - 会津方面の影響力の低下が北陸集団の北上を促したのか。
 - 海岸伝いの交流関係(能登半島～男鹿半島)→内陸部への影響は希薄→舟による移動→漁撈重要な生業とした集団。
 - 他の資源の移動との関連性→中期前葉には新保・新崎式土器が内陸まで進出。
 - 姫川産ヒスイの広域的流通は中期前葉から(関東:勝坂式以降、東北:大木8a式以降)